



北部九州の宗像神と関連神を祭る神社の解析 —宗像神信仰の研究(2)—

静岡理工科大学 名誉教授

矢田 浩

概要 主として神社庁公表の全国神社データに基づき北部九州における旧郡毎の宗像神および関連神を祭る神社の祭神分布を調べた。宗像神は宗像郡から豊前・豊後に到る東部地域と、松浦半島から有明海に到る西部地域とに高密度で祭られている。両地域の間には玉依姫と埴安神を祭る神社が集中するベルト地帯があり、宗像神およびその東部分布域に高密度で祭られる水神 おかみ 龍神のベルト地帯とは統計学的に有意な棲み分け関係にある。これら分布域の起源は、弥生時代に遡ると推定された。九州北方海域の宗像神分布から、朝鮮半島から日本列島に到る古代通商路として、沖ノ島を経由するムナカタルート1と、壱岐を経由するムナカタルート2（佐賀県經由有明海方面と西海方面へも分岐）が推測される。三女神のうち市杵島神は、特に高密度で祭られている遠賀郡域にルーツがあるように見える。このことから地名ムナカタの語源についての新説を提出した。他の二女神のルーツについても予備的考察を行った。

1. はじめに

平成27年(2015)文化庁文化財特別審議会で、「『むなカタ神宿る島』宗像・沖ノ島と関連遺産群」が平成29年(2017)世界文化遺産登録を目指す候補として選定された。ムナカタ(旧宗像郡域)に、多くの人の関心が集まりつつある。

古代の宗像と沖ノ島には、多くの謎がある。多くの人々の関心にもかかわらず、その解明はなかなか進展しない。文献史料のほとんどない古代の歴史は、考古学知見からだけでは解明が難しい。

宗像の謎の核心は、宗像大社とその祭る神にある。しかし宗像大社の歴史だけからは、神話の世界の実像が見えてこない。神話を含む史料と遺跡・遺物とのギャップを埋めるために、宗像神および関連神を

祭る神社の祭神分布の解析を行っている。日本古代の神信仰は長い時の間に多くの変遷を経てきたが、人々は原則として一度祭った神を捨て去ることをしなかった。このため、その神の名を持つ神社がなくなっても、あるいはそれを祭っていた人々がいなくなっても、一度祭られた神の名は、多くの場合他の神社に合祀されるなどして残っている。このため祭神の解析から、古代以前の神々の分布とそれを祭った人々の動静を探ることが可能になる。

前報[1]では、主として最近の神社本庁のデータを用い宗像神の全国分布を検討した。宗像神（宗像大社たごりひめのかみ たぎつひめのかみ いちきしまひめのかみの表記で田心 姫 神・湍津 姫 神・市杵島 姫 神の三女神）には非常に多くの表記があるので、以下各神をそれぞれタゴリ・タギツ・イチキシマで代表させる。宗像神を祭る神社は沖縄県を除く全国で、3500社以上の神社本殿に祭られている。そのうち本来の宗像神信仰ではない八王子信仰社^(注1)を除外した約2900社について都道府県別の分布を検討した。宗像神がその誕生神話のように三神セットで祭られている場合は、全体の28%に過ぎない。最も多いのはイチキシマ神を祭る神社で、全体の60%を占める。その比率は関東・東海・近畿に多い。多くの神社が宗像神を祭るにもかかわらず、ムナカタ（ムナカタ）の名を持つ神社は69社と少ない。その表記には、宗像以外に胸肩、胸形、宗形、宗方などの古名を持つ社が宗像から遠方に多い。しかし宗像神のみを主祭神とする「純ムナカタ系社」は、950社以上現存する。

この集計で宗像神が特に集中して祭られていることわかった青森県津軽地方、栃木県、千葉県印旛沼周辺、中国地方山間部について歴史史料や考古学的知見などと対比して考察した結果、宗像神の全国への普及は古代以前に遡ると推定され、特に弥生文化の日本海に沿っての北上と、それに続く内陸から表日本への波及に対応するケースが多いと見られた。弥生時代後半以降古代に入っても、古くからの繋がりがあったと見られる出雲系や物部系の人々の移住を先導するようにして、特定の地域に宗像神が集中的に祭られている。このことは、古代以前の宗像海人族が単に通商に従事していたばかりではなく、人口の少ない農業適地への移住者に対する情報提供や先導など、今日の総合商社的な役割を担っていたことを示唆する。しかしそのような広域活動は、ヤマト王権がほぼ全国を掌握すると制約を受けざるを得なかったと思われる。沖ノ島祭祀の開始は、その時期に対応していると推定された。

宗像神信仰の起源と考えられる福岡県では、宗像神を祭る神社の存在比は全国の平均レベル程度であった。これは福岡県が地勢的・歴史的に広域にまたがり、その中で宗像神信仰が他神信仰と棲み分けしているためと思われる。そこで本報では北部九州諸県について旧郡単位で分布を調査し、不均一な分布の一因と思われる他神信仰との関係についても調べた。

なお前報と同様、本報でも宗像市と福津市を含む旧宗像郡域を、地域名としてムナカタと呼ぶことにする。ただし宗像大社が祭る三女神は宗像神とし、宗像神を祭る海人族を宗像海人族と呼ぶことにする。



。

2. 基礎資料と解析方法

前報と同様神社本庁調査の『平成「祭」データ』（以下『平成データ』と表記）の WINDOWS 版[2]を基礎資料とし、同ソフトの旧郡データを活用して旧郡ごとに本殿に宗像神を祭る神社の数を調査集計した。北部九州の範囲としては、福岡・佐賀・長崎の諸県に加えて、歴史的に宗像と関係が深い豊前地方を含む大分県をも加えた。この4県の旧郡名と、その範囲の変遷を表1に示す。『平成データ』の郡名は旧国郡制のものであり、松浦郡・彼杵郡・高来郡・国東郡・海部郡のような広域の郡があるのでそのままでは地域間の比較に適当でない。これらの郡は明治11年(1878)の郡区町村編制法で分割されたので、ここでは基本的にこの郡制に従って解析を行った。その各郡の位置を、図1に示す(郡境の位置は石田諭司のホームページ[3]を参考にした)。ただしこのとき新設された山本郡は国郡時代にはなく、『平成データ』では御原・御井の両郡に分かれて含まれているので、これら三郡は一括して表示した。またそのほかにも範囲が小さく相互比較に適当ではない郡があるので、各郡の全神社数が50以下の郡は原則として地勢的に繋がる隣接の郡と一括して表示・検討することにした。宗像神と他の各神との関係を探るために、主な他神についても旧郡毎にそれを祭る神社の社数を調査集計した。

前報と同様、昭和19年宗像神社発行の『宗像三神奉斎神社調』（以下『調』）[4]も必要によって参照した。このデータには不正確なところがあるが、『平成データ』に記載されていない社や、境内摂・末社を含んでいる点で有用である(前報参照)。

多くの旧郡には主として第二次大戦戦前に編纂された郡誌が存在し、戦後の地方誌にはない神社の記録が残っている。なかでも宗像・遠賀両郡の記録[5][6]は詳細であり、これらを用いて『平成データ』の不備を補った。

さらに前報に述べた明治期以降の神社変遷の影響を見るため、江戸期の資料をも参照した。筑前国には地誌が整備されており、なかでも寛政五年(1773)福岡藩主に上進された『筑前国続風土記付録』（以下『付録』）[7]には基本的に福岡藩内の全神社が収録されていて、その多くには祭神も記されている。これも必要により参照した。

表1 明治期の国郡制と各旧郡の神社数

旧国	明治11年(1878)~22年(1889)				明治29年 (1896)	全神社数	本報での 区分		
	県	郡	図1	備考					
対馬(131)	長崎県(1278)	上県				49			
		下県				82			
壱岐(150)		壱岐				81			
		石田				69			
肥前(2089)		佐賀県(1092) 明治16年 までは長崎県	北松浦		旧国では 松浦郡			244	
			南松浦					153	
			西彼杵		旧国では 彼杵郡			176	
			東彼杵					79	
			北高来		旧国では 高来郡			84	
			南高来					160	
	西松浦			旧国では 松浦郡		100			
	東松浦					223			
	小城				168				
	佐賀		旧佐嘉郡		138				
	神崎				108				
	三根	a			28				
	養父	b		三養基郡	41				
	基肄	c			32				
	杵島				120				
	藤津				134				
筑前(1420)	福岡県(3364)	志摩			糸島郡	55			
		怡土				79			
		早良				98			
		那珂		一部が 福岡区に		102			
		席田	d		筑紫郡	12			
		御笠				59			
		夜須				77			
		上座			朝倉郡	76			
		下座	f			44			
		糟屋				105			
		宗像				148			
		遠賀				174			
		鞍手				220			
		穂波				93			
		嘉麻			嘉穂郡	78			
		筑後(1336)	御原	e		三井郡(+ 久留米市)		(42)	163
			御井	g				(121)	
			山本	h				-	
竹野			i			93			
生葉					浮羽郡と 八女郡に	118			
上妻					267				
下妻	j				53				
三瀨					233				
山門					259				
三池					150				
豊前(999)	田川				182	108			
	企救				126				
	京都			京都郡	94				
	仲津				99				
	築城			築上郡	47				
	上毛				61				
豊後(1741)	下毛				173				
	宇佐				217				
	西国東		旧国では 国東郡		110				
	東国東				192				
	速見				221				
	日田				96				
	玖珠				79				
	大分				261				
	直入				126				
	大野				279				
豊後(1741)	北海部		旧国では 海部郡		148				
	南海部				229				

(カッコ内は社数合計)

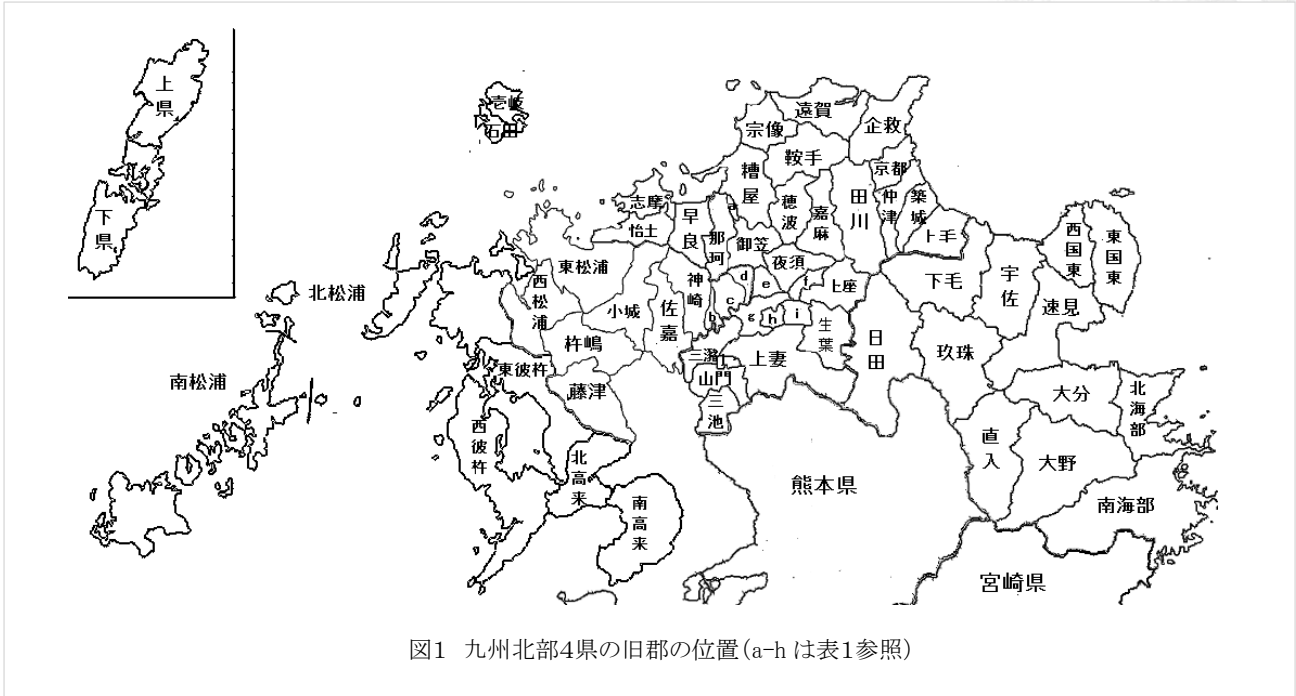


図1 九州北部4県の旧郡の位置(a-hは表1参照)

3. 神名の集積について

前報で述べたように、『平成データ』では祭神は各社からの申告のまま記載されているので、神名の表記は多種多様である。このことは、古くから祭られてきた神で特に著しい。宗像神はその典型例であり、あらゆる表記を完全に網羅することはかなり難しい。前報に掲載した宗像神の表記一覧についても、その後新しい表記を発見したので、表2に補足して再掲した。その他再検討を行った結果、全国で本殿に宗像神を祭る全神社は3535社、八王子神を除外すると2928社となった。前報で指摘したように、この手法では後に意外な表記が発見されることがあるので、この値は下限値である。しかし前報で述べたように、過去の調査との比較から見てそれほど多くの遺漏はないと考えられる。

宗像神との比較を行うため他神についても集積を行ったが、神名が多種多様に亘る神ではかなり困難な場合がある。社名から祭神の存在が推定できる八幡系神社などでは多様な表記を発見しやすいが、一般には完全な集積はかなり難しい。したがって本報で示す各祭神の社数は、今後多少増加の可能性はある。



図2に旧郡別の宗像神の分布を示す。旧郡間で社数が大きく異なることが分かる。福岡県内で見ると、宗像郡の17社はやはり大きいですが、隣の遠賀郡が20社とより多い。県内ではほかに企救・三潞郡が10社を超えている。

その他の郡、特に筑前南部と筑後の諸郡にはきわめて少なく、県内で分布が偏っている。一方、佐賀県の東西松浦・杵島郡や、大分県の宇佐・大野郡など、宗像郡と同程度またはそれ以上に宗像神が祭られている郡がある。

前報の全国分布では、三女神のうちイチキシマのみを祭る神社が全宗像神を祭る神社の60%以上を占め、特に宗像から遠方で多いことを指摘した。これに対し北部九州4県ではその比率が48%で、宗像郡では17%ときわめて低い。反対に三女神を祭る神社は、全国で22%に対し北部九州で42%と高く、宗像大社のある宗像郡では17社中三女神を祭る神社が11社(67%)と極めて高い。あきらかに宗像大社の影響によりその周辺で三女神化が進んでいることが窺われる。ところが隣り合う遠賀郡では宗像郡と対蹠的にイチキシマのみを祭る神社が20社中14社と多い。図3に『調』のデータにより三女神のうちイチキシマのみを祭る神社の郡別の社数を示した(注2)。この分布状況は、すくなくとも宗像郡と遠賀郡ではそれぞれの詳細な記録[5][6]と殆ど整合する。これによると、遠賀郡のイチキシマ信仰はかつてはより顕著であったことが分かる。境内末社もかつては独立社(詞)であったはずであるから、おそらく江戸時代まではこの合計の40社祠に宗像神としてはイチキシマのみが祭られていたはずである。

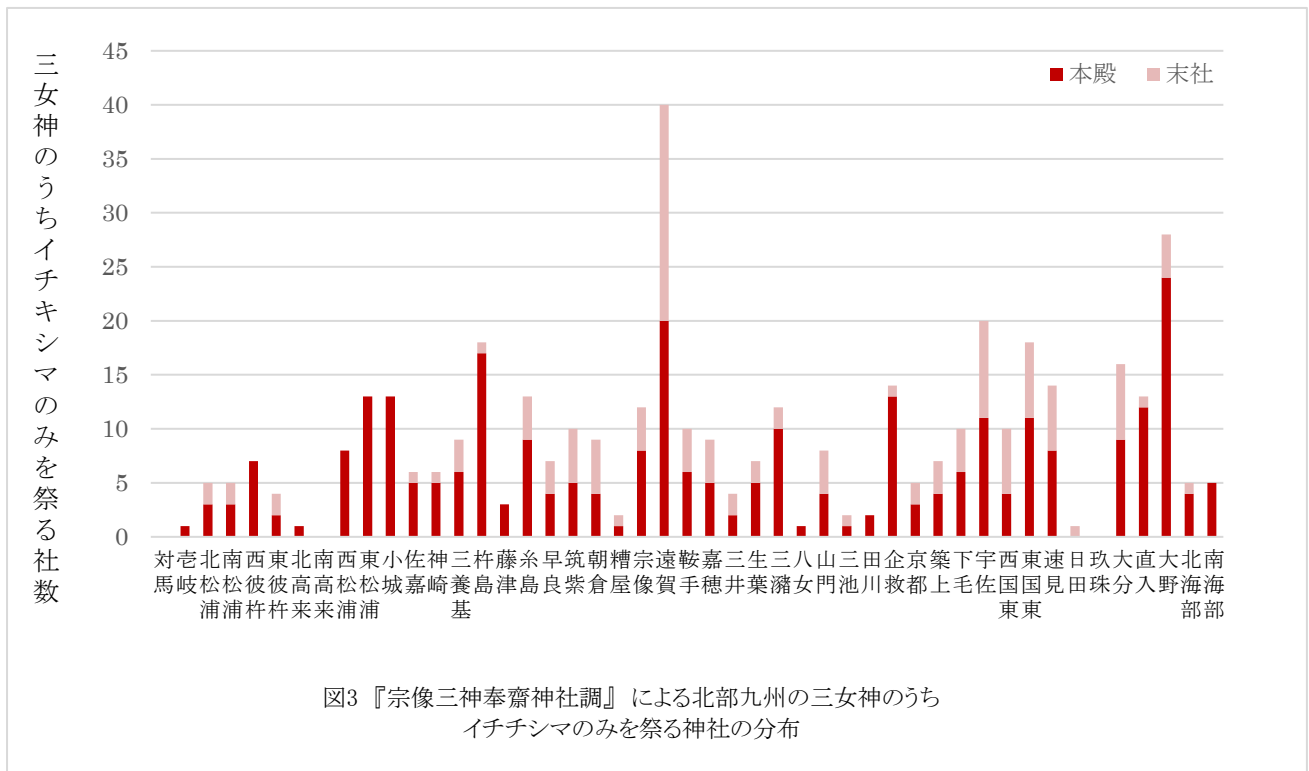
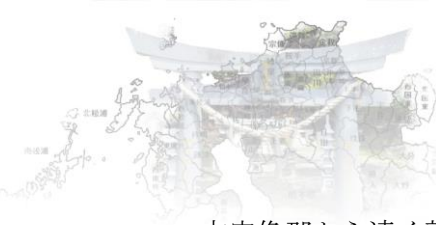
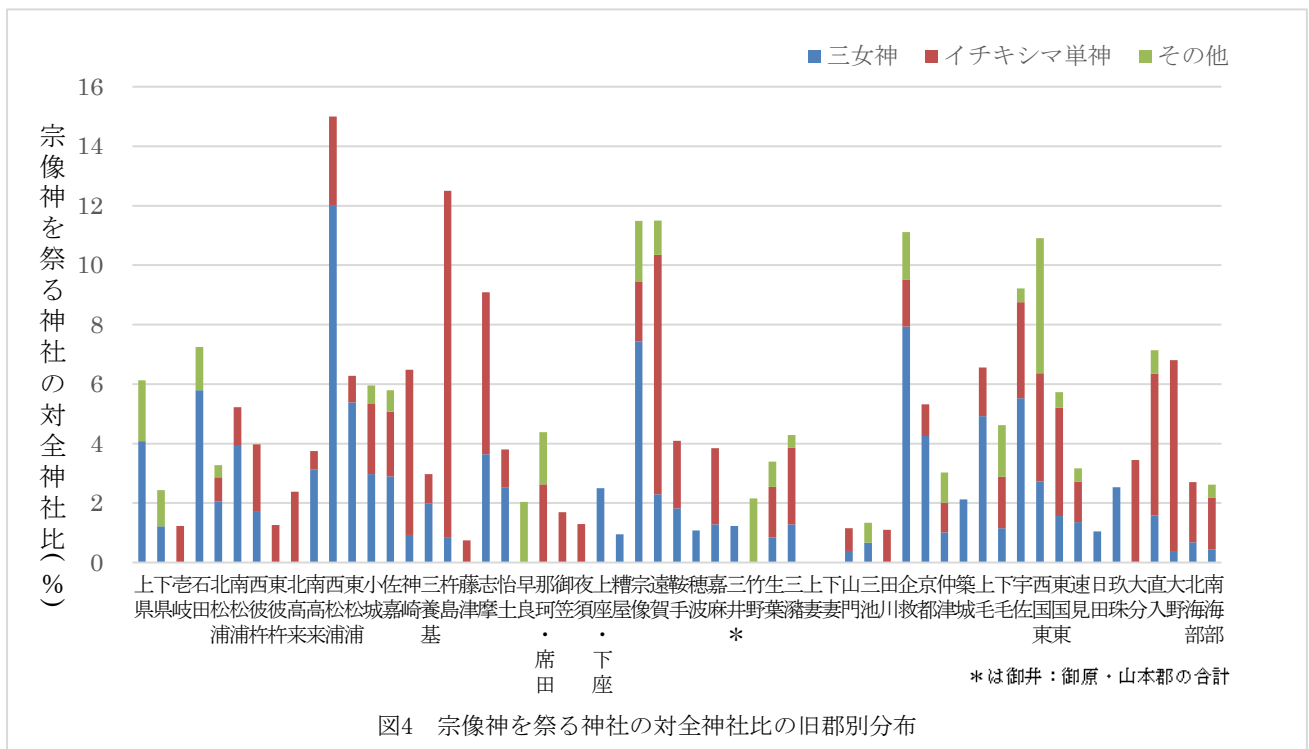


図3 『宗像三神奉齋神社調』による北部九州の三女神のうちイチキシマのみを祭る神社の分布



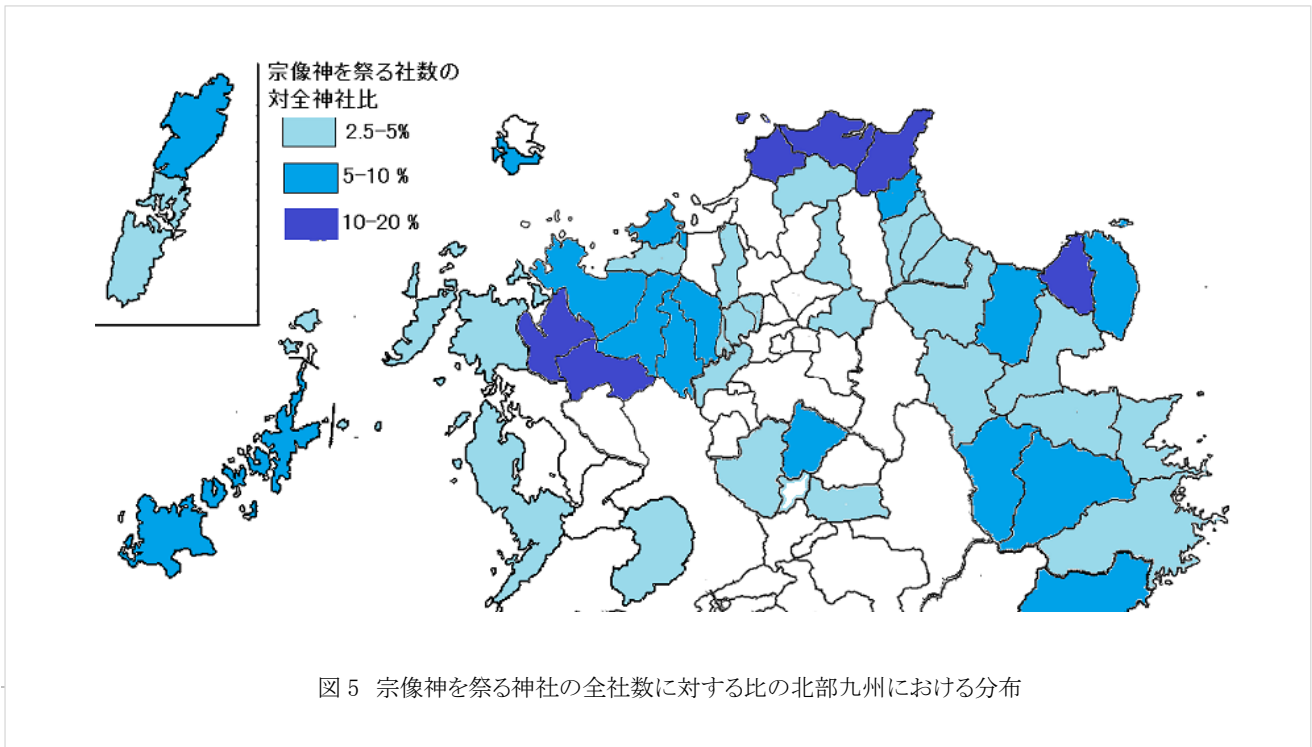
一方宗像郡から遠く離れた佐賀県杵島郡では 15 社中 14 社（『調』では 22 社中 18 社）、大分県大分郡は 9 社全て（『調』では 18 社中 16 社）、大野郡で 19 社中 18 社（『調』では 29 社中 28 社）と遠賀郡と同様ほとんどが三女神のうちイチキシマのみを祭る。このことは、宗像神がまずイチキシマ信仰として全国に広がったという前報の推定を支持するものである。特に海に面しない山間僻地の大野郡に、イチキシマが非常に多く祭られているのは注目に値する。

表 1 に見るように各郡の全社数にはかなりバラツキがあるので、宗像神を祭る神社の各郡全社数に対する比の分布を示したのが図 4 である。これによると西松浦と杵島郡は宗像・遠賀両郡よりさらに比率が高い。遠賀郡に隣接する企救郡も、この両郡と並ぶ高い比率を示している。



このような分布を、地図上で示したのが図 5 である。九州東北部の沿海 3 郡に宗像神が集中して祭られており、やはりこのあたりに信仰の中心があったことを示している。この 3 郡に続く九州東海岸に比較的宗像神の多い地域が連続しており、宇佐郡から国東半島にかけて集中する。そして内陸部の直入・大野郡でまた高まりを見せ、宮崎県の東臼杵郡が続く。ここでは宗像神の全てがイチキシマ単神である。

そして筑前中央部の比較的宗像神の希薄な地域を挟んで、佐賀県東部にこれに劣らない宗像神集中域がある。



4.2 北部九州で多く祭られる神々

上記のような宗像神の偏った分布は、他神との棲み分けの存在を推測させる。

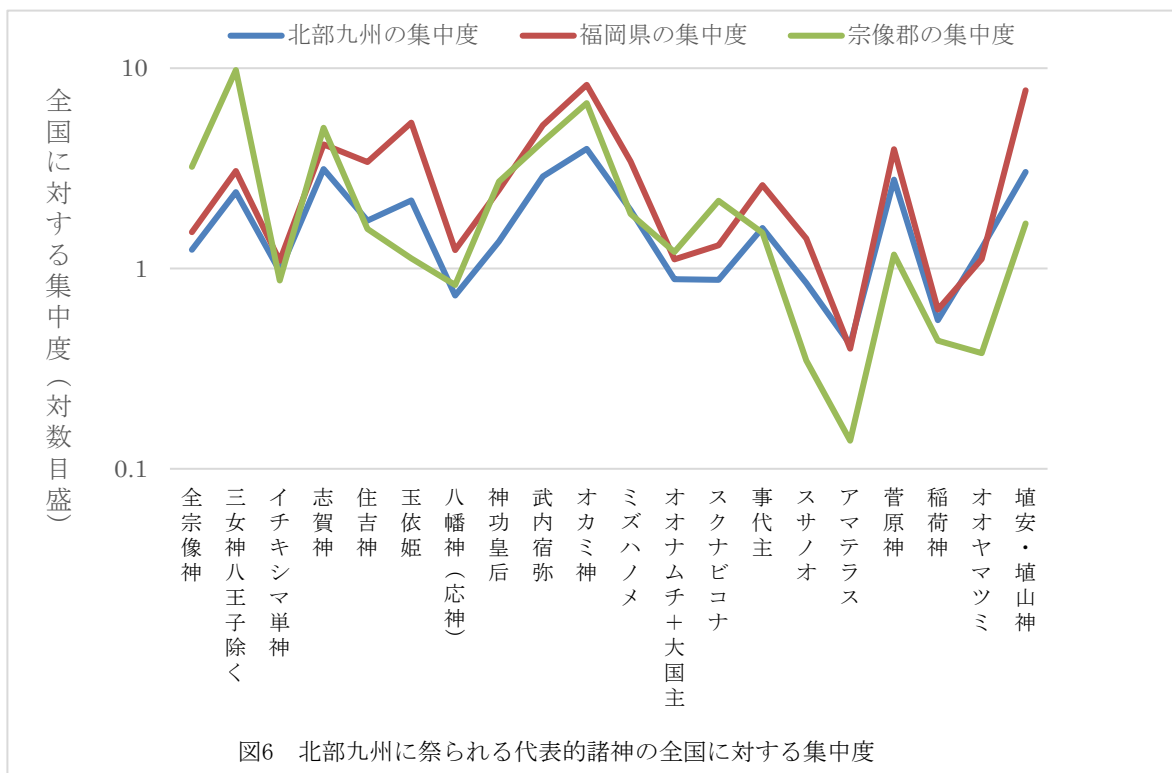
宗像神の他神との関係を、以下に統計学的手法で検討してみよう。それに先立ち、表3に北部九州四県で祭られる代表的祭神を挙げ、それらを祭る神社の北部九州および全国の総数を示す。これら祭神は、三女神以外は北部九州で総社数の5%以上に当たる150社以上が祭られている。参考までに宗像郡の値も示す。

これを見ると、北部九州では全国と大きく異なる分布を示す神々がかなり多いことが分かる。その様子をわかりやすく示すため、各神の分布の全国平均との比を、全国平均に対する集中度として同表中に示した。この集中度を、図6に対数目盛で示した。



表3 宗像神および北部九州で祭られる他の代表的神々を祭る神

神名	表記例	全国		北部九州			福岡県			宗像郡		
		神社数	対全神社比(%)	神社数	対全神社比(%)	対全国集中度	神社数	対全神社比(%)	対全国集中度	神社数	対全神社比(%)	対全国集中度
全宗像神		2928	3.7	347	4.7	1.3	123	5.8	1.6	17	11.5	3.1
三女神八王子除く		814	1.0	150	2.0	2.0	56	2.6	2.6	11	7.4	7.2
イチキシマ単神		1755	2.2	164	2.2	1.0	53	2.5	1.1	3	2.0	0.9
志賀神	綿津見・少童・豊玉姫	1375	1.7	406	5.5	3.1	154	7.3	4.2	13	8.8	5.0
住吉神	表筒男・中筒男・底筒男	1694	2.1	277	3.7	1.7	155	7.3	3.4	5	3.4	1.6
玉依姫	玉依姫	951	1.2	196	2.6	2.2	137	6.5	5.4	2	1.4	1.1
八幡神(応神)	応神天皇・誉田別・大鞆和氣	13564	17.2	937	12.6	0.7	451	21.2	1.2	21	14.2	0.8
神功皇后	神功皇后・息長足姫・大帯姫	3934	5.0	506	6.8	1.4	261	12.3	2.5	20	13.5	2.7
武内宿弥	武内宿弥・建内宿禰	745	0.9	202	2.7	2.9	104	4.9	5.2	6	4.1	4.3
オカミ神	霧・淤加美・丘見	1355	1.7	505	6.8	4.0	301	14.2	8.3	17	11.5	6.7
ミズハノメ	罔象・水波女	1994	2.5	368	4.9	2.0	184	8.7	3.4	7	4.7	1.9
オオナムチ+大國主	大己貴・大國主	6183	7.8	515	6.9	0.9	185	8.7	1.1	14	9.5	1.2
大物主	大物主	1778	2.3	199	2.7	1.2	46	2.2	1.0	1	0.7	0.3
スクナビコナ	少彦名・少名彦・少名毘古那	2446	3.1	202	2.7	0.9	86	4.0	1.3	10	6.8	2.2
事代主	事代主	2121	2.7	318	4.3	1.6	149	7.0	2.6	6	4.1	1.5
スサノオ	素戔鳴・須佐之男	9211	11.7	735	9.9	0.8	349	16.4	1.4	6	4.1	0.3
アマテラス	天照大神・天照皇大神・大日靈貴	11586	14.7	455	6.1	0.4	124	5.8	0.4	3	2.0	0.1
菅原神	菅原(道真)・天満天神	7721	9.8	2018	27.1	2.8	817	38.5	3.9	17	11.5	1.2
稲荷神	倉稲魂・宇迦之御魂	7336	9.3	381	5.1	0.6	123	5.8	0.6	6	4.1	0.4
オオヤマツミ	大山祇・大山津見	7066	8.9	841	11.3	1.3	212	10.0	1.1	5	3.4	0.4
埴安神	埴安姫・埴安彦・埴山姫	637	0.8	182	2.4	3.0	133	6.3	7.8	2	1.4	1.7
全神社数		78960		7439			2124			148		





宗像神では、イチキシマが北部九州・福岡県・宗像のいずれでも全国平均程度の分布を示すのに対し、三女神の集中度はこの順で増加する。このため全宗像神もこの順で集中度が高まる。

続く三神は、北部九州で宗像神と並んで海神として祭られることの多い神々である。玉依姫は、志賀神とともに祭られることも多いが、京都市下鴨神社の主祭神として全国の加茂系神社にも祭られ、また神武天皇の母として祭られることもある。このために志賀神とは独立に示した。いずれの海神も北部九州で多く祭られるが、特に福岡県で集中度が高く、その中でも玉依姫の集中度が高い。そのなかで宗像郡では、志賀神の集中度は三女神について高いが、玉依姫の集中度は低い。

続く三神は八幡系神社で主に祭られる神々で、主神の応神天皇は全国平均と同程度の分布であるのに対し、じんぐう神功皇后とたけしうちのすくね武内宿弥は北部九州、特に福岡県に強い分布を示す。

次の二神は、記紀神話で宗像神より先に登場する由緒の古い水神である。オカミ神（『書紀』に高たか竈おかみ・くら閼おかみ竈）とミズハノメ（『書紀』に罔象女）は、北部九州に集中して分布し、特にオカミ神は宗像郡を含む福岡県に強く集中する（『日本書紀』を以下『書紀』と略称、読みは岩波文庫版[8]を用いる）。オカミ神は、重要な神であることがこの後判明するので、注記で解説する^(注3)。

続く三神は一般に出雲系として知られる神々である。出雲の主神オオナムチ（『書紀』に大己貴神、おおくにぬしのみこと大国主命と同神とされる）の集中度は高くないが、他の二神は福岡県に多く、特にすくなびこなのみことスクナビコナ（『書紀』に少彦名命）が宗像郡に多い。

スサノオからオオヤマツミまでは、全国的に広く祭られている古代後半以降の流行神である。スサノオ（『書紀』にすさのおのみこと素盞鳴尊）は、記紀神話では出雲の重要神であるが、『出雲国風土記』では重要神の扱いはされていない。現在は後年盛んになった熊野信仰の神として祭られるケースが多い。宗像郡に少ないのはこのためであろう。全国的にポピュラーなアマテラス（『書紀』ではあまてらすおおみかみ天照大神）は、北部九州に少なく、特に宗像郡には殆ど祭られていない。これは、天皇家の祖神アマテラスは古代に一般に祭られることがなかったためと思われる。神祇世界の成立が古かった北部九州では、中世以降の伊勢信仰の影響が入りにくかったのであろう。菅原神はその由緒から北部九州に多いが、その中で宗像郡は平均的である。稲荷神（『書紀』にうかのみたま倉稻魂）を祭る社数は、全国での普及度よりかなり低い。オオヤマツミ（『書紀』に大山祇）は、宗像郡に少ないことが特徴的である。これらの特徴は、宗像郡の神祇世界が殆ど古代のうちに成立していたために、中世以降の流行神が入る余地がほとんどなかったことを示すと思われる。

『書紀』に出る土の神はにやす埴安神（埴安姫が殆どであるが、男神の埴安彦もある）と埴山神（北部九州では少なく、すべて埴山姫）は一般に同神とされ、実際相互に殆ど区別なく祭られていることが多いので、

両神を合計して扱う。この神は、北部九州、中でも福岡県の集中度が高い。宗像郡ではそれほど集中度が高くないので、それ以外の地域に集中していることが推定される。

4. 3 相関係数による他神との関係の検討

上記の各神と宗像神との相関を以下に検討する。このような複数のデータ群の関係を統計学的に示すのが、相関係数 (r) である。これは、二組の変数 (ここでは各郡でのそれぞれの祭神を祭る神社の数) の全体の平均値との差を各郡ごとに掛け合わせ、その総和を両者の標準偏差の積で割った値である。数式で書けば、

$$r = \frac{\sum(k_k - m)(y_k - n)}{\sqrt{\sum(x_k - m)^2} \sqrt{\sum(y_k - n)^2}}$$

(ただし m は x_k の平均値、 n は y_k の平均値)

となる ($x \cdot y$ が変数)。

変数同士が正比例の関係にあれば値は 1 となり、反比例の関係にあれば -1 となる。一般に、相関係数が $\pm 0.2 \sim \pm 0.4$ であれば弱い相関が、 $\pm 0.4 \sim \pm 0.7$ であれば中程度の相関が、 ± 0.7 以上 (以下) であれば強い相関があるとされている (+ は正の相関、- は負の相関)。データの数が多くなるほど、信頼性が高くなる。この検討では 57 のデータ (郡) があるので、 r が 0.22 以上であれば、正の相関関係があるという結論が誤っている確率は 10% 以下である。 r が 0.31 以上であればこの確率は 2% 以下で、かなり確実に正の相関があると言える (滋賀大学中川雅央の HP [9] による)。

負の相関については、神社数がマイナスの値になることはないので、 r が大きな負の値にはなりにくい。実際、一方の神社数が 0 または非常に少ないことが多く、その場合には相関係数算出で仮定されている直線近似とはほど遠くなる。したがって反目する神同士の有意な r の値の基準をどのあたりにしてよいかはよくわからないが、得られた相関係数を見る限り -0.15 あたりを基準にするのが適当と思われる。

図 7 に、宗像神と北部九州で祭られる他の代表的祭神との間の相関係数を図示した。宗像神は総社数の他に、社数の多い三女神を祭る神社とイチキシマのみを祭る神社とについても算出した。

同図で見ると、宗像神は二・三の神々を除き多くの他神とかなり強い正の相関を持つ傾向が認められる。また一般に全宗像神が三女神およびイチキシマ単神よりも大きい値を示す。これはイチキシマを祭っていた神社の一部が後に三女神化したと考えれば、理解できる。古い出雲神であるオオナムチ (+ 大國主) およびスクナビコナとの相関係数が大きく、前報で指摘した宗像と出雲との係わりに対応していると思われる。

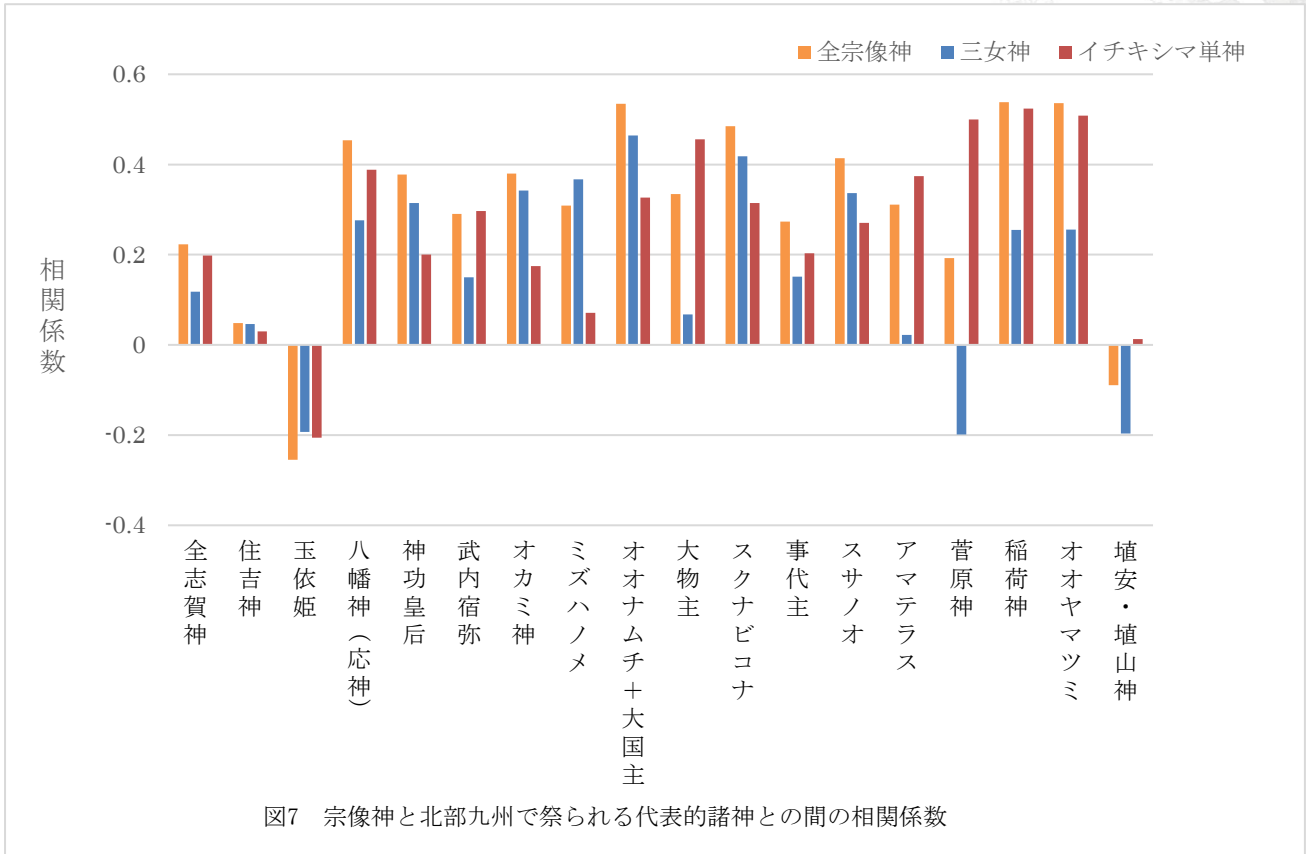


図7 宗像神と北部九州で祭られる代表的諸神との間の相関係数

海神同士では、志賀神とは正の相関がある程度見られるが、住吉神とははっきりしない。そして玉依姫とは、明確な負の相関を示す。北部九州では玉依姫が志賀神の範疇で祭られることが少なく、主に他の信仰分野で祭られていると推定できる。

玉依姫と同様宗像神と負の相関を示すのは埴安神で、特に三女神と明確な負の値を示す。菅原神も同様であるが、イチキシマが明確な正の相関を示すので、全宗像神とは正の相関に止まっている。

以上から、宗像神は多くの神とおおむね良好な共存関係にあるが、玉依姫と埴安神とは棲み分けの関係にあることが明らかになった。このような関係は、この両神と宗像神との間のみで見られるのであろうか。

図8に、玉依姫および埴安神とその他の神々との相関係数を示す。図7と対照的に、この両神は他の多くの神々と相互に反発する関係にあることが見て取れる。そして当然予想されるように、この二神間は例外的にはっきりした正の相関を示す。すなわちこの二神は共同で、他神が入りにくい独自の信仰圏を持っていたのである。もう一つのはっきりした例外は、玉依姫と神功皇后との間の正の相関である。これについては後に検討する。

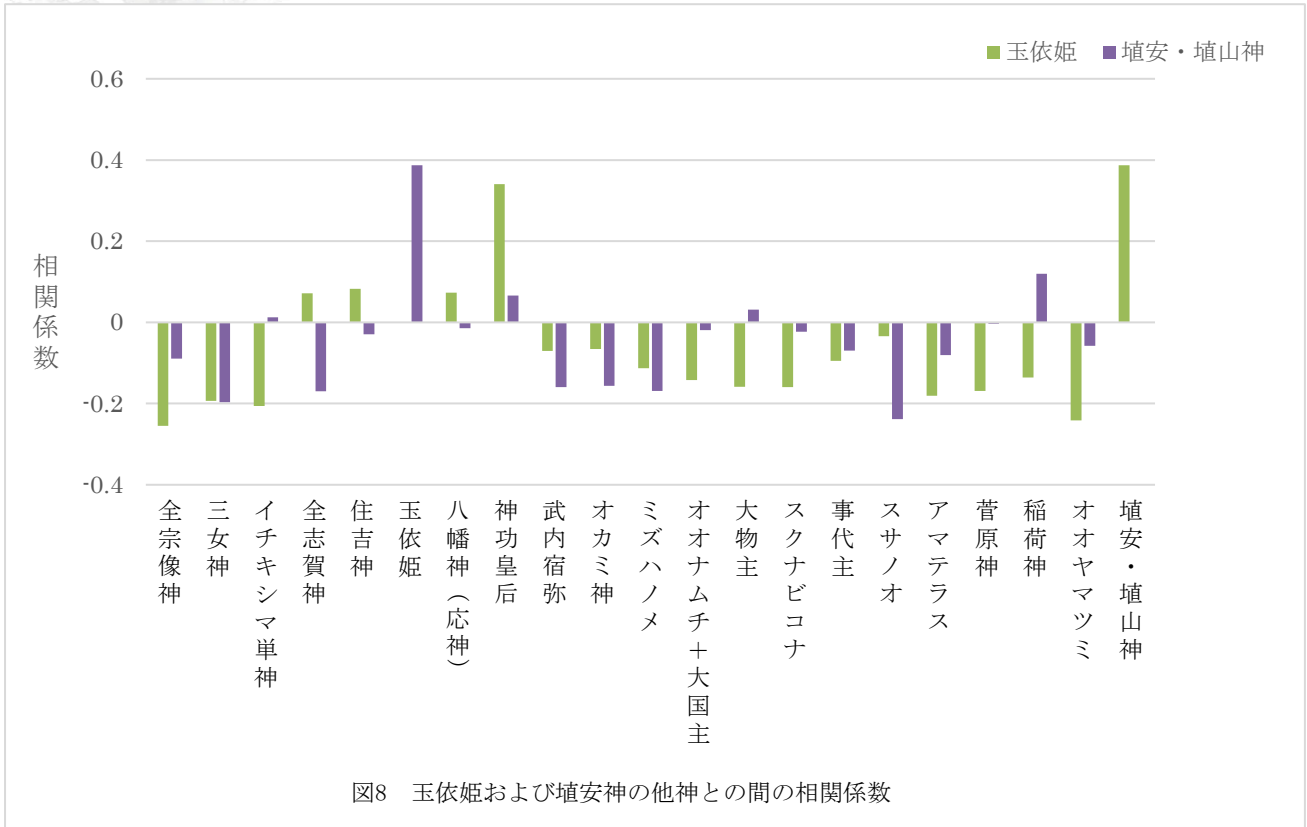


図8 玉依姫および埴安神の他神との間の相関係数

4. 4 信仰圏の対立

1) 宗像神と玉依姫との棲み分け

上記の各神間の関係を、地図上で確かめてみよう。図5で示した宗像神信仰圏に対し、同じ海神の伝承を持つ玉依姫はどのように棲み分けていたのだろうか。図9に玉依姫の北部九州での分布を、宗像神と重ねて示した（宗像神は図5の2.5-5%の領域を表示していない）。この両神の顕著な分布域は殆ど重ならず、はっきり対立した信仰域を示している。唯一の例外が壱岐島の石田郡であるが、詳細に見ると宗像神がその西部郷ノ浦地域に分布するのに対し、玉依姫は東部の原の辻遺跡周辺に分布する。興味深いのは、対馬での棲み分けである。宗像神は上県郡に多く特にその東岸に多く分布するのに対し、玉依姫を祭る神社はすべて下県郡にあり、中央部の浅茅湾沿いと、そこから西岸および東岸へ出た入江に多く分布する。浅茅湾内には弥生時代の遺跡が集中し、魏志倭人伝が記す対馬国の中心があったと考えられている。

玉依姫は、本土部では特に旧糟屋郡に集中する。多くが志賀系海神を代表する豊玉姫や少童神とともに祭られており、本来海人族が祭った神であることを示している。しかしその他の郡では、宝満山の竈門神社から広まった竈門神社や宝満神社に、多くは八幡神と神功皇后との組み合わせで祭られている（これ



が前述の玉依姫と神功皇后との間の正の相関となって現れている)。しかしその中に玉依姫一神を祭神とする社も多いので、宝満系神社は本来玉依姫信仰であって、八幡神と神功皇后は後に併祭された祭神と思われる。

筑前西部の中でも、志摩郡で宗像神が玉依姫に対して優勢なのは、宗像から杵岐や西海方面への航路の寄港地があったためであろう。

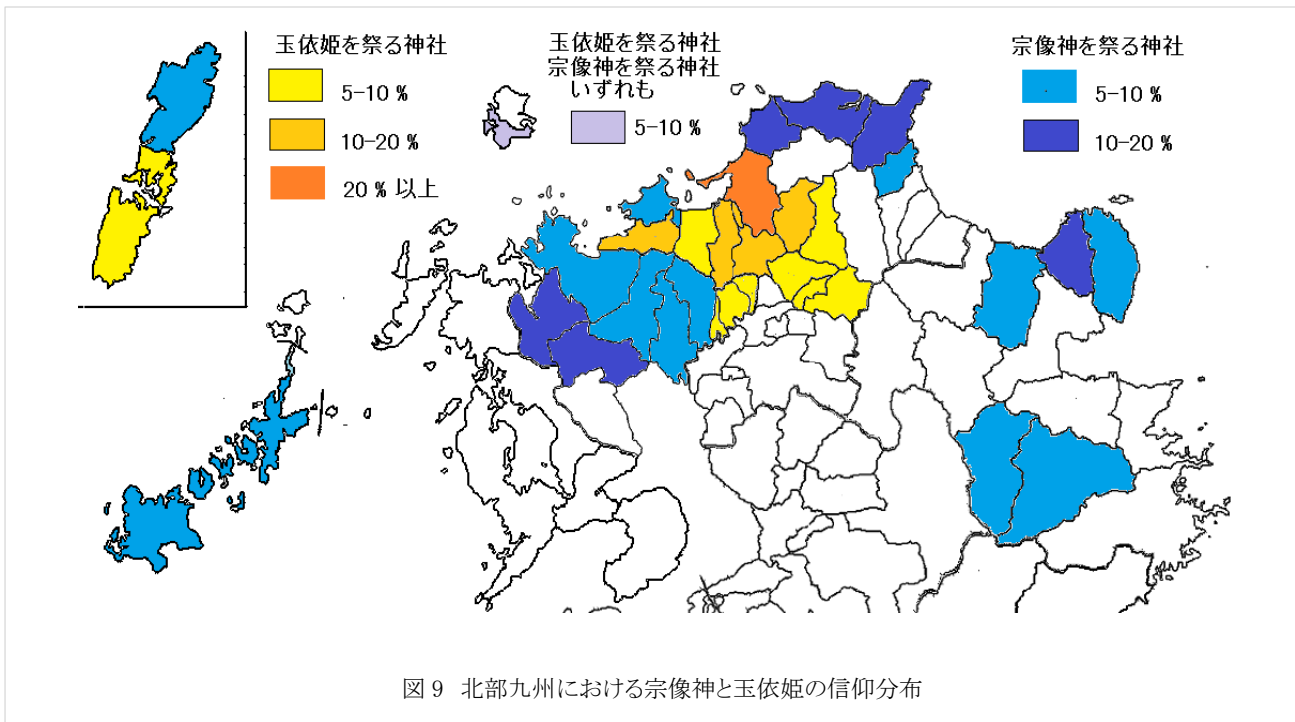


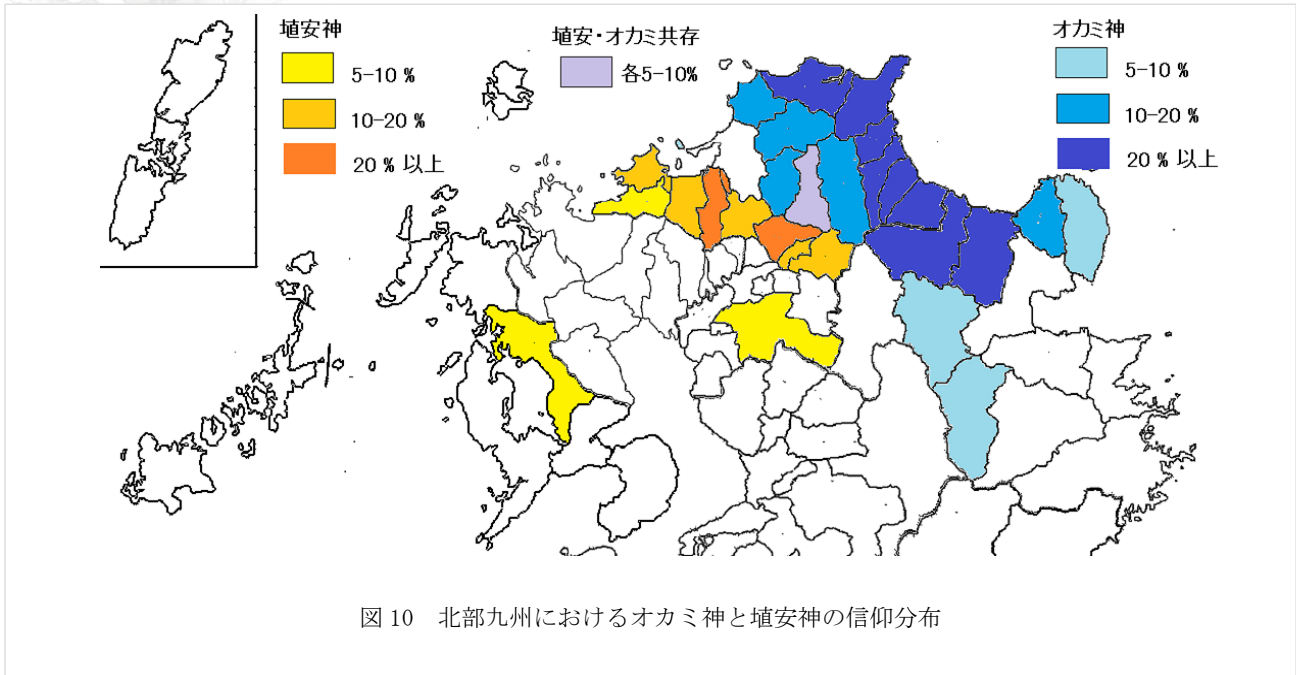
図9 北部九州における宗像神と玉依姫の信仰分布

2) オカミベルトと埴安ベルトとの対峙

次にオカミ神と埴安神の分布を、図10に示す。図9と同様、この両神ははっきりした棲み分けの関係にあることが分かる。

オカミ神は、宗像郡から始まり、国東半島および直入郡に到る連続した「オカミベルト」を示している。特に遠賀郡から宇佐郡に到る地域の分布が濃厚で、豊前地方に信仰の中心があるように見える。

一方埴安神は、糸島半島から上座郡に到る連続した「埴安ベルト」を形成している。分布の中心は、那珂郡から夜須郡の辺りにあると見られる。このベルトは、オカミベルトと接していて、ほとんど重複しない。唯一の例外は、両社が5%以上祭られる旧嘉麻郡である。



3) 江戸時代以前から存在した2つのベルト

このような神々の棲み分けは、筑前国内のみではあるが、江戸時代の『付録』にも示されている。『付録』にある石祠や杜（社殿のない社叢）を含む貴船系社数を集計し、『平成データ』による値と比較して図 11 に示した。『付録』には多くの場合祭神名が示されていないので、貴船の名がある社祠同士を比較し、『平成データ』のオカミ神数をも参考に示した。各郡で現在の貴船社の5ないし15倍、オカミ神の4から7倍と著しく大きいのが、相対的には同様の分布を示す。『付録』の社数が多いのは、社・祠の区別がはっきりしない村があるので、その合計を示したためである。

一方埴安神は、さまざまな名の神社に祭られ、しかも社名がしばしば変化しているため正確な比較は困難である。図 11 で貴船社・祠のほとんどない郡に、『付録』では天神社・地祿天神社・田神社などが多い。その多くには祭神の記載がないが、埴安神が記されている場合がある。そしてそれに対応する現存社が埴安神を祭る場合が多いので、その殆どが江戸時代に埴安神を祭っていたと思われる。たとえば「天神社」は他県ではほとんど菅原神を祭る神社であるが、福岡県では現在 57 社の天神社（地祿天神を含む）のうち 32 社が埴安神を祭り、菅原神は 8 社に過ぎない。ただし天神社のうちにはスクナビコナやミズハノメなど同様に起源の古い神を主神とする社も多く、「天神」とは上古以来の神の総称であったとも考えられる。いずれにせよ埴安ベルトでは、江戸時代以前から埴安神を多く祭ってきたことは確かと思われる。

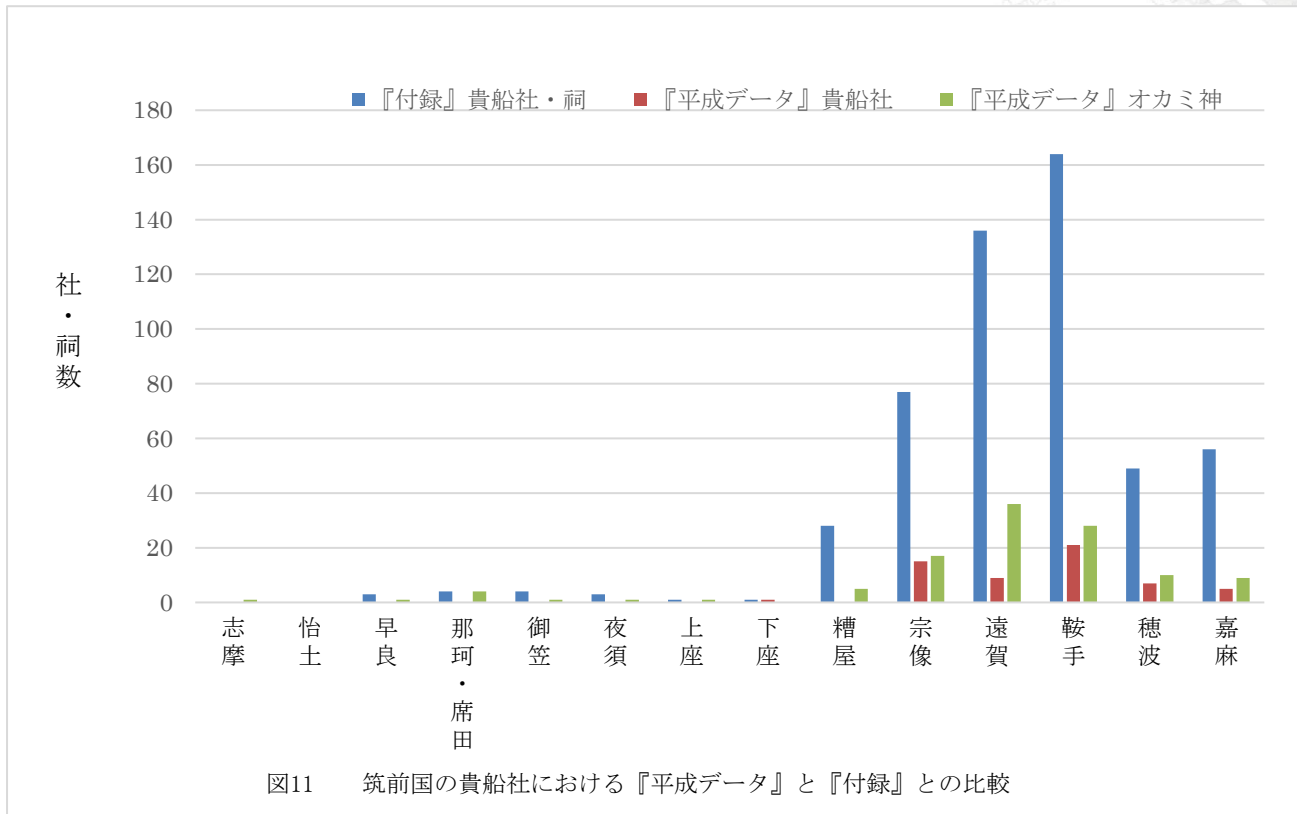
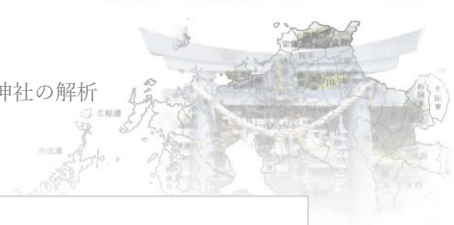


図11 筑前国の貴船社における『平成データ』と『付録』との比較

4) 埴安神の分布と弥生時代の甕棺文化圏

以上のような明確な信仰圏の対立は、文化圏の対立を示していると思われる。このような筑前西部とそれ以東の文化の対立としては、弥生時代の甕棺葬文化圏とそれ以東の地域との隔絶が想起される。

図12は、藤尾慎一郎による北部九州の弥生時代全期間の大型甕棺分布図である[10]。図10の埴安神の分布と比較すると、埴安神が佐賀県域と熊本県域に殆ど祭られていないことを除けば、両者の分布はよく一致している。二つのベルトの境界領域の嘉麻郡で埴安神とオカミ神が共存するのも、立岩遺跡とその周辺に甕棺文化が割り込んでいることと対応している。先述の玉依姫信仰がこの地域に進出していることも、これに対応する。

甕棺文化圏で埴安神が祭られていたのは、甕棺製作に当たって原料の土に特別の神威を感じ、土の神である埴安神を祭ったと考えれば理解できる。古代人が土器の原料である土に特別の呪術的意味を感じていたことは、神武東征伝説中の説話などに見ることができる。

かつて甕棺文化圏に属しない宗像以東は弥生文化の後進地と見なされていたが、田熊石畑遺跡の再発見[11]で甕棺文化圏に比肩する繁栄を誇っていたことが明らかになった。宗像から始まるオカミベルトは、この地域が甕棺文化圏と異なる精神文化の伝統を持っていたことを示している。

このように、弥生時代に起源を持つ精神文化の伝統が、祭神の継承を通じて、現代まで連綿と受け継がれてきたと考えられる。このことは、少なくとも北部九州においては、祭神分布とその解析が古代史を理解する上で重要な鍵になることを示したと言えよう。

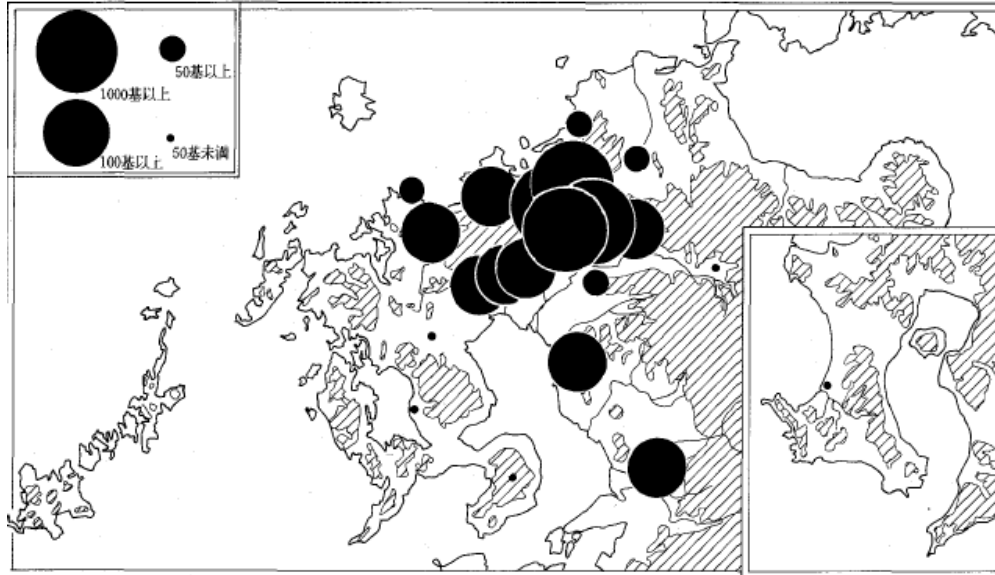


図 12 北部九州における弥生時代甕棺の出土分布 (藤尾慎一郎による)



4. 5 「海北道中」と西海の宗像神

ここで航海神としての宗像神の分布を見てみよう。図13に島嶼部を含む北部九州沿岸のおもな宗像系神社を示した。



『書紀』の「海北道中」に対応して、対馬北部東岸に宗像神を祭る神社が多い。宗像を名乗る神社は大増の宗像神社だけであるが、この宗像神はより南の佐賀から勸請されたと言っている。佐賀のわたつみ和多都美神社は、旧名を佐賀宗形宮と言ったという[12]。佐賀には有名な縄文貝塚があり、宗像海人族との繋がりが縄文以来である可能性を示す。なお大増の宗像神社(写真1)を支えている神主や氏子の殆どが比田勝氏であるので、この神社もしくはその元社がかつて良港の比田勝にあった可能性が高い。実際に、比田勝港近くの倉庫で「宗像神社」の扁額を実見した。比田勝は「日高津」のことで、東に漕ぎ出す港の意味と考えられる。これらは沖ノ島経由で直接宗像やその他の響灘沿岸地方に向かう航路に対応すると考えられ(これをムナカタルート1とする)、まさに『書紀』の「海北道中」に位置する神社群である。



写真1 対馬市大増の宗像神社

一方対馬南部にも三女神を祭る2社があり、壱岐の西海岸に対している。前述のように壱岐には南部に宗像神が多いが、郷ノ浦港の湾口にある渡良三島わたらみしまと呼ばれる大島、長島、原島はるしま(写真2)に、それぞれ島の名を社名とし、宗像三神のみを祭る三社がある。



写真2 壱岐市郷ノ浦港外の渡良三島(岳ノ辻展望台から望む)

壱岐西南部にも、原の辻遺跡に近い石田町池田西触に宗像三神を祭る田嶋神社がある。この神社は、呼子の加部島にある式内の名神大社(前報参照)の田島神社(写真3)の系列社と見られる。ここからは、東行宗像へ向かうルートが考えられる(ムナカタルート2)。この経路にも、要所に宗像系神社がある。唐津湾口の姫島にイチキシマが祭られており、博多湾口唐泊崎に護られた宮浦港には三女神を祭る古社三所神社がある(写真4)。玄界灘に浮かぶ小呂島には、三女神を筆頭祭神とする七所神社がある。この



社は、かつて宗像神のみを祭っていたことが『付録』に記されている。福岡市香椎の名島神社（江戸時代は弁才天社）も、古くから宗像神を祭ってきたことが『付録』に記される。



写真3 唐津市加部島の田嶋神社



写真4 福岡市宮浦の三所神社



田島(田嶋・多島)神社は、東・西松浦郡に12社(『調』には13社)あり、いずれも三女神を祭る。伊万里湾内に多く、ここから内陸に入るルートに参与した人々が祭った神社と見られる。図5で見たように、ここから有明海沿岸までは濃厚な宗像神分布地帯となっている。

一方西海地方にも宗像神が多く分布する。前報で見たように、長崎県は千葉県と青森県に次ぎムナカタ神社が多い。そのうち対馬以外の五社は本島部西海岸にある。平戸市田平の宗像神社は、『日本三代実録』の貞観一三年(871)と同一五年(873)に見える「宗形天神」とされている。この神社は、平戸島と九州本土を隔てる平戸瀬戸の本島側に約2km入ったところにある。この神社は、著名な里田原遺跡の範囲内にある。この遺跡は縄文晩期に始まるが、最盛期は弥生時代前期から中期までで、後期までも続いていることが最近確認された。遺物も豊富で、朝鮮半島製の初期青銅鏡多鈕細文鏡が甕棺墓から出土している。そのほかにも小型板状鉄斧、無文土器、天河石や瑪瑙の丸玉など、朝鮮半島からの直輸入と思われる遺物が多い[13]。海人族の交易中心地であったことが分かる。

ここから約3kmに、平戸瀬戸に面した縄文時代のツグメノハナ遺跡がある。ここからは、100点以上の石銚とともに多量のクジラ、イルカ、サメの骨が出土し、縄文海人の根拠地があったと見られる[14]。この石銚は沖ノ島でも多く出土しており、宗像海人族との繋がりが縄文時代に始まることを支持する。

さらに南下すると、西彼杵半島の北部、西海市中浦に宗像神社がある。さらに南下して長崎市の展望台稲佐山に登る長崎ロープウェイの乗り場のところに淵神社があるが、この主祭神が宗像三女神である。

長崎半島を回って雲仙諸峯の麓の橘湾に臨む海岸には、北から千々石町乙・小浜町富津・南串山町丙(現在はいずれも雲仙市)と、三社の宗像神社がそれぞれ海岸の小湾内に祭られている。

橘湾の奥の有喜漁港のあたりからは、わずかな山越えで諫早市宗方の谷に入ることができ、すぐ有明海につながる。この宗方にある宗方神社は現在宗像神を祭っていないが、『太宰管内志』[15]は上記『日本三代実録』の記事はこの神社のこととし、『諫早市史』もこれを採用している。有明海に入るショートカットに祭られた神社と思われる。

五島にもいくつかの純宗像系社がある。西海にもう一つの古い海の道があったと思われる。この道は中期以降の遣唐使がとった南路であるが、それ以前からあった航路ではないか。

なかどおりじま
中通島上五島町(旧新魚目町)浦桑郷に、近年まで胸肩神社が存在した。この神社は、『調』の他『全国神社名鑑』[16]にも神社庁登録神社として記載されていたが、『平成データ』にはない。その跡地に立つ石碑には、社殿が昭和62年(1987)の台風で倒壊したため、近くの祖父君神社に合祀した旨が記されていた。



福江島の岐宿には三女神を祭る古社巖立神社がある。この神社はかつて岐宿湾中の宮の小島にあったのを移したものであるが、由緒記によればこの島に祭られたのは桓武天皇の時代で、空海が入唐の際立ち寄ったとき島民から神のお告げを聞き、この島に社を建てることを勧め三女神を勧請したという [17]。このころの遣唐使は岐宿の西約 10 km の三井楽から出発していたが、岐宿はこの島北岸最大の集落であり、名も唐船の浦という深い湾があるので、空海らもここに停泊して風待ちをしたのではないか。そして三井楽にも三女神のみを祭る柏神社がある。『調』は、そのほか三井楽にイチキシマを祭る市杵島神社を載せている。

4. 6 宗像神の分布から見える古代通商路

以上述べてきた海北道中と西海の宗像神を祭る主な神社を繋ぐと、朝鮮半島からの交易ルートが浮かび上がってくる。これを図 14 に示す。沖の島を経由するムナカタルート1では、ムナカタと繋がるルートの他に、直接響灘沿岸に達するルートがあったと思われる。これは特に弥生時代後半、鳥取県の妻木晩田遺跡や青谷上寺地遺跡などから著しい量の鉄器が発見されているからである。鉄器の出土はさらに東に向かい、兵庫県や京都府の北部に鉄器製造基地がつけられる。このような多量の運搬物を運ぶ場合は、ムナカタに寄航せず対馬暖流を利用して沖ノ島から一気に下関市西海岸を目指すことが多かったと思われる。この沿岸には朝鮮半島の土器など多くの渡来人の痕跡が見られる。

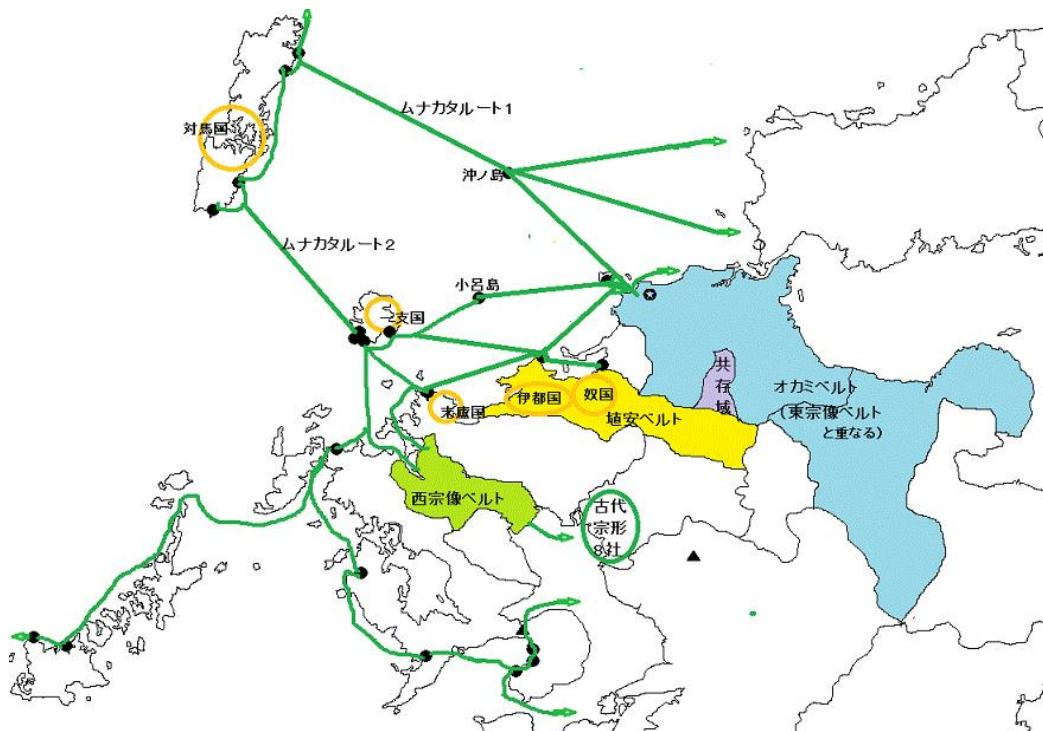


図 14 祭神分布から推定される北部九州沿海および関連する交易ルート



山口県は明治末期の神社合祀（前報参照）の影響を強く受け、残念ながら純宗像系の神社が殆ど残っていない。しかし下関市武久にはかつて宗像神社があったと記録されていて、ここの武久浜遺跡の石棺からは中国の半両銭が出土している。また弥生時代初めから宗像の影響を受けてきた角島にも、2社の厳島神社があったことが、『調』に記されている。ここは山陰へ向かう絶好の寄港地であったと思われる。

ただし朝鮮半島へ向かう逆コースは、海流に逆らうので手漕ぎでの直接の船行は困難であったと想像される。したがって沖ノ島への最短距離のムナカタから出発することが多かったと思われるので、ムナカタの重要性が失われることはなかったであろう。

一方対馬南部の宗像神を祭る2神社は、いずれも良港に面していて、壱岐西岸郷ノ浦の渡良三島に近い。これが壱岐を経由するムナカタルート2の中心航路であったと思われる。ここからは、必要により上記石田郡南部や小呂島、三所神社のある宮浦などを経由してムナカタへ向かったと思われる。一方松浦半島の12社の田島神社や図5の「西宗像ベルト」地帯は、伊万里湾から有明海へ出る交易ルートの存在を推定させる。渡良三島は、伊万里湾に直行するルートや、西海や五島方面への起点として絶好の位置にある。西海からは高来半島を迂回するか、諫早市宗方で低い峠を越えるかで有明海へ出るルートの存在も推定される。

『魏志倭人伝』に登場する国々のうち所在についてはほぼ異論のない5国を図上に示したが、そのうち本土部の伊都国と奴国は埴安ベルトの中にある。このベルトが甕棺文化以来のものであれば、このベルトは邪馬台国時代にもあったことになる。そうすると、『魏志倭人伝』に出る不彌国以降のいくつかの国々も、おそらくこのベルト内にあったのではないかと想像される。ただし投馬国と邪馬台国はいずれも大国であるので、この両者を埴安ベルトの中に収めるのは難しいかも知れない。これ以上『魏志倭人伝』の国々の所在についての議論をこの小論中に容れることは難しいので、別報に譲ることとする。

ムナカタルート1は対馬の寄港地を選べば邪馬台国連合との相互干渉はないと考えられるが、ムナカタルート2を形成している宗像系神社もこれらの国々の中心部をできるだけ避けているように見える。壱岐で宗像からは反対側の西岸に根拠地があるのは、原の辻遺跡を中心としたと思われる一支国中心部を避けたためであろうが、一方伊万里湾へ入るルートや西海や五島へ向かうルートの起点としては絶好の位置にある。



4. 7 宗像神信仰域についての考察

1) 分裂している宗像神信仰域

図5に見たように、宗像神信仰の強い地域は北部九州東部の東宗像ベルトと西部の西宗像ベルトとに分かれている。前者については、前報で見たように弥生文化の東方への伝播に宗像海人族が果たした役割を示すものと考えられる。オカミ神などとの分布の重なりも、渡来系の人々の拡散と結びつけて考えることができる。

しかし北西九州における宗像神の広い分布は、このような考えでは説明できない。その中でも、宗像神が特に集中しているのが、佐賀県の伊万里湾から有明海へ到る西宗像ベルトである。この西松浦郡と杵島郡が作る回廊は、その南の宗像神が殆ど見られない東彼杵郡および藤津郡と対蹠的である。特に杵島郡では宗像神を祭る15社のうちイチキシマのみを祭る神社が14社と圧倒的で、この地域が古くからイチキシマ信仰を持っていたことを思わせる。この回廊は、前述の田島神社群が示唆するように、伊万里湾へ入る海上交易ルートをも有明海方面に繋げるものと考えられる。すなわち、宗像神を祭る宗像海人族が、海路だけではなく、これに繋がる内陸交易路にも関与していたことを物語ると思われる。このことは前報で、中国地方など各地で見られることを指摘した。

この内陸ルートは、対馬一壱岐を経由する国際交易ルートを、有明海の対岸筑後地方から熊本県方面へ繋げることが主な目的ではないか。次項に述べる古代宗形社があった地域も、そのターゲットの一つであったと思われる。熊本県の西北部にも、図5に見るように宗像神を祭る神社が多い。その中心菊池郡の菊池市宗方に、宗方八幡宮がある(ただしこの神社は、諫早市の宗方神社と同様、現在は宗像神を祭っていない)。

2) 古代記録との対比

前報で紹介したように、古代筑後地方に宗像神を祭る神社が多く存在したことが記録に残る。天^{てんぎょう}慶七年(944)成立の『筑後国神名帳』[18]に、筑後7郡のうち御原・御井・三瀧・上妻の4郡に宗形の名を冠した神社が計8社も見える(図14参照)。そしてそこには、宗形神以外の海神が全く記されていない。宗形神の起源が古代以前に遡り、他の海神はこの頃殆ど祭られていなかったことが分かる。

ところが、『平成データ』には、現在筑後地方にムナカタの名を冠する神社は全く登録されていない。上記4郡には現在宗像神を祭る神社が12社あるが、上記の8社とは必ずしも対応しない。たとえば『筑後国神名帳』では御原郡に宗形神、宗形若草神、宗形御弁天社の3社が記されるが、『平成データ』には宗像神を祭る神社が全くない。海神としては住吉神のみ7社登録されているので、あるいは祭神が交替したのであろうか。

現在この4郡には、合計で志賀神が52社、住吉神が65社、玉依姫が6社も祭られ、それらの多くはそれぞれの神を表す社名を持つ。少なくとも筑後国については、国内神名帳が編まれた時期以降に大幅な信仰世界の変化が起こったようである。

この古代筑後の宗形神は、一部の歴史家の云うように、宗像神のルーツが筑後であることを意味するものではない。上記の筑後宗形神の神階(神社に授けた位階)は、従五位下が1社であとはこの当時の神階としては最低の正六位上である。この時期には、公式記録から見て筑前宗像郡の宗像神社は少なくとも従一位にはなっている。発祥の地の社であれば、それなりの神階にあってしかるべきであろう。現に残っている他諸国の神名帳の中で、ムナカタ神は上野國で正四位(下)、尾張國で従二位と正四位下、備前國で正四位下と従四位上、安芸國で正二位(以上)二社と従三位のように、すべて四位以上の神階が記されている[18]。おそらくより格下の神社は省略されていたと思われる。筑後国のように低位階の神社まで記せば、おそらくどこの国にもおびただしい数のムナカタ神が祭られていたと推定される。このことは、ムナカタの名を冠した神社が、現在宗像神を祭る神社の41分の1しかないことから推測される(前報参照)。この古層の宗像神信仰は、前報で指摘したようにイチキシマ信仰であったと思われる。これはイチキシマのみを祭る神社が有明海を挟んで筑後と相対する杵島郡に14社(かつて18社)と多く、また大分県大野郡のような山間部でも18社(かつて28社)に祭られていることから支持される。

このように考えると、本来宗像神(イチキシマ)の分布には図5のような大きな空白域はなくて、沿海地方や内陸水運(一部陸行を含む)の盛んだった地域に洩れなく祭られていたに違いないのである。その中に独自の神信仰を持つ人々が入り込み、伊都国や奴国のような「クニ」の連合を作り結果として宗像神を祭る人々が排除されたものと思われる。そしてこれらの国々は専用交易路を構築したので、これに参加する海人をも専属化したのではないか。そしてその祭る神の名も、対馬や壱岐の交易の重要中継地で祭られている玉依姫などに変えられたのであろう。対馬や壱岐でもそれら諸国の交易に参加していなかった地域では、海人が引き続き宗像神を祭り、相互に干渉がないように交易を続けていた。これが図13・14に見るような宗像神を祭る神社の配置として残ったと思われる。

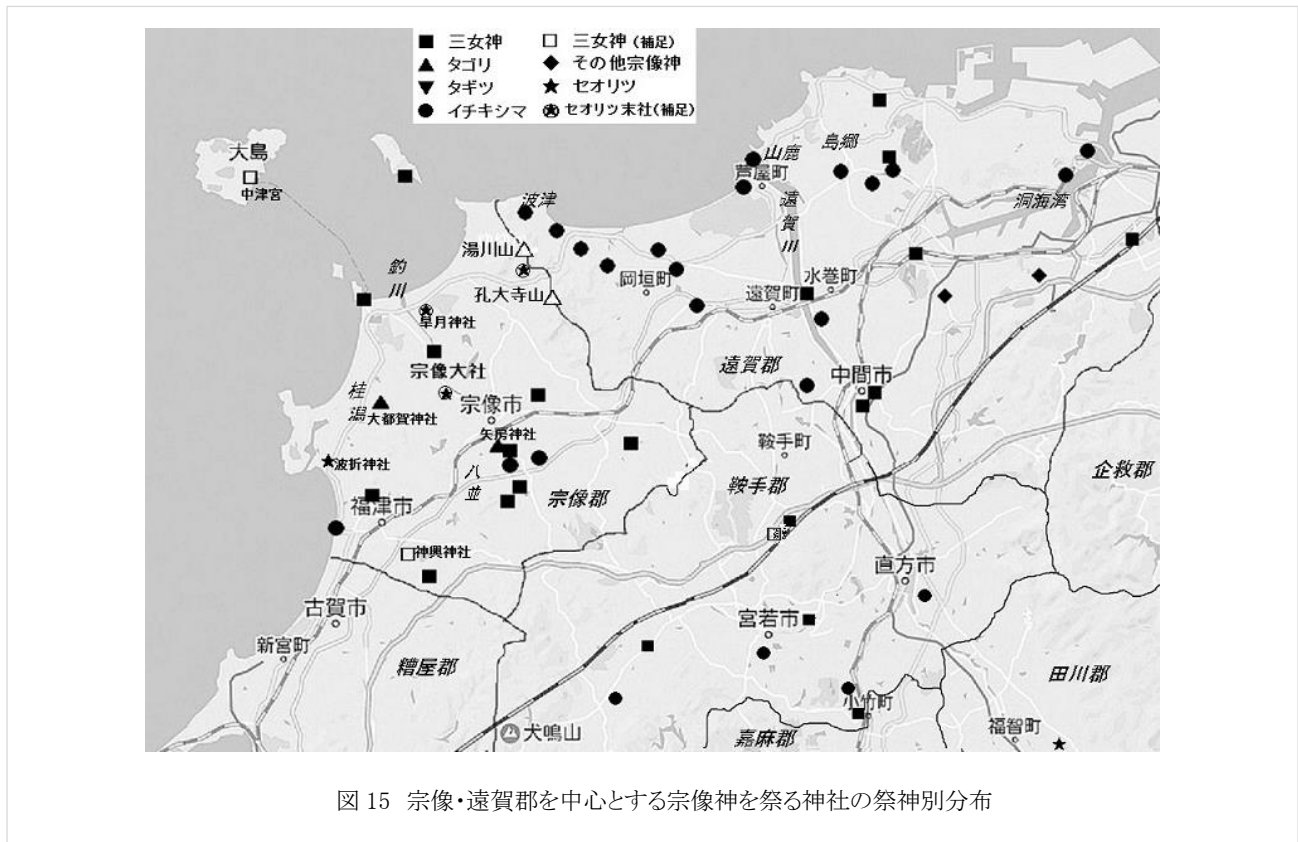


4. 8 宗像神信仰中心地域の検討

1) ムナカタ—遠賀地域

前述のように、宗像神信仰が顕著に残る地域は北部九州の東西に分かれる。ここでは宗像神信仰の成立過程を探るため、その発祥の地域と考えられている東部地域について、祭神内容の詳細を検討する。

図 15 はムナカタ—遠賀地域について宗像神を祭る神社の分布を、祭神別にみたものである。宗像郡では、沿岸部よりも釣川の中流域からその支流域に多く分布する。これは多くの古社の起源が入り海の発達していた上古代に遡ることを示唆している。



これまで見たように宗像郡では三女神を祭る神社が多いが、タゴリのみを祭る神社が 2 社ある。沖ノ島祭祀開始との係わりが議論される 4 世紀後半の東郷高塚前方後円墳のすぐそばに、オオナムチとタゴリを祭る古社矢房神社がある^(注 4)。この神社は田熊石畑遺跡とも至近距離にあるが、その遺跡内にかつてオオナムチを祭る示現神社があった(現在は約 500 m 西に移動)。これら遺跡がある八並川(釣川の支流)の谷には、オオナムチと共にタゴリとの間の子神味耜高彦根命あじすきたかひこねのみことおよび下照姫命したてるひめのみことが 3 社の原神社で祭られる。

タゴリとオオナムチは、かつての桂瀨に面した福津市奴山の生家大塚前方後円墳のすぐそばおおつか大都加神社にも、宗像君徳善など古代宗像を支配した宗像君一族と共に祭られている。沖ノ島祭祀に参画し、後に

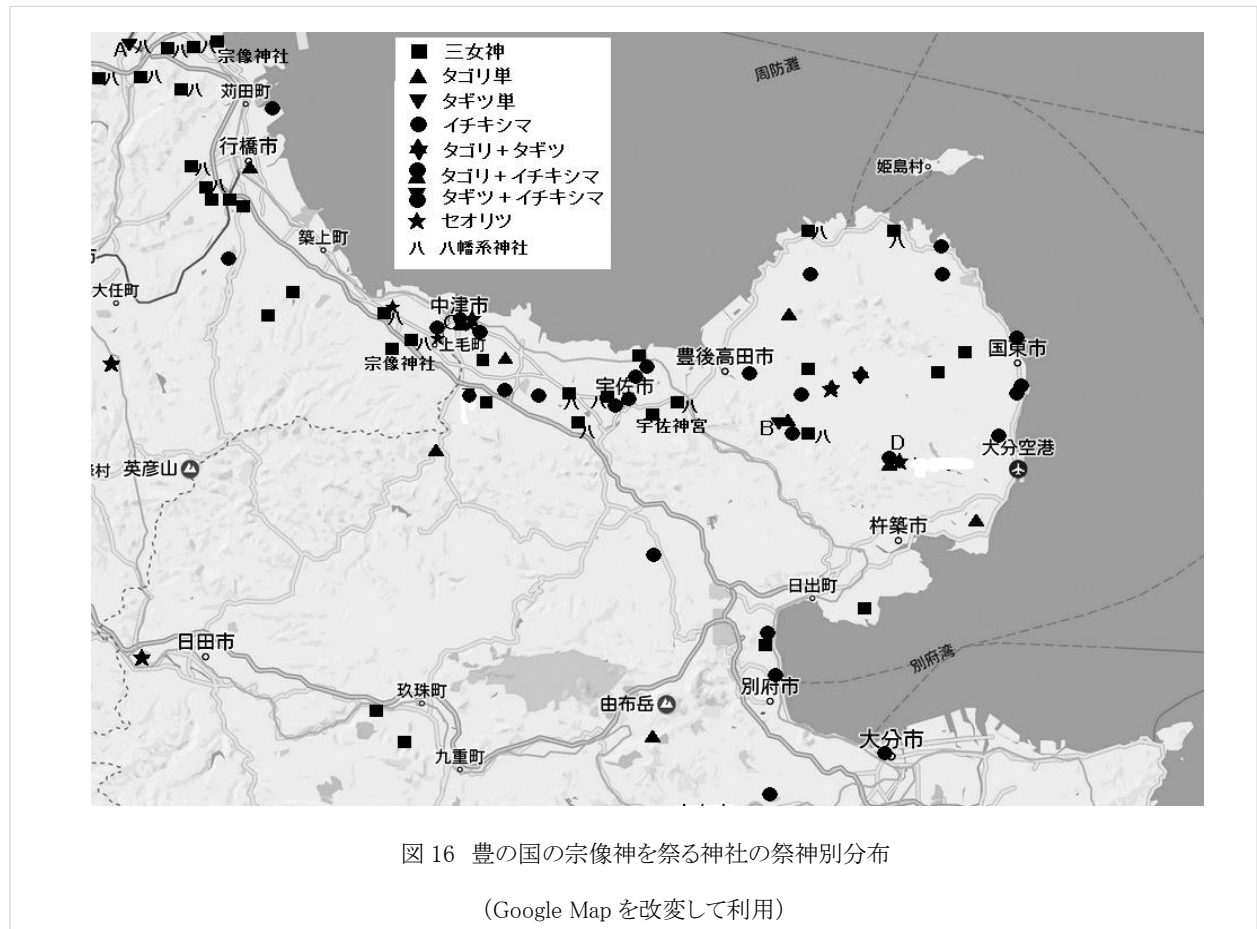
はその祭祀を中心となって継承したと考えられている宗像君は、出雲系の血を引く氏族であつたらしい(次報に詳述予定)。出雲大社瑞垣内の筑紫社の祭神タゴリが、宗像大社でも祭られるのは当然である。

一方タギツは単独では祭られていないが、次項でタギツとの関連を指摘する瀬織津姫(他の表記もあるので以下セオリツ)が津屋崎の古社波折神社に主祭神として祭られている。『宗像郡誌』によると他に3社の境内社に祭られている。うち釣川河口に近い辻八幡社内の皁月神社は、かつて宗像神社の頓宮があつたと記録される隣接地にあつた神社で、現在でもその跡地で祭りが行われる。宗像大社との繋りの深さを感じさせる。

一方遠賀郡域では、イチキシマのみを祭る神社が、宗像郡との境界山地の東麓に沿って多く、遠賀川中流域や若松区西部にも多い。このような分布は、後に図18で示す古遠賀湾および岡垣町の入り海、および深く入り込んで遠賀川河口と繋がっていた古洞海湾の沿海に沿っている。いかにも海人の祭る神にふさわしい立地である。古洞海湾と続く水路で囲まれた現在の北九州市若松区は古くは恩賀島おかしまと呼ばれていた。その中のかつての島郷村にもイチキシマを祭る神社が多い。

2) 周防灘沿岸部

図16に上記地域と並んで宗像神が多く分布する周防灘沿岸部の詳細を示した。





この地域の特徴は、宇佐神宮の影響で宗像神が八幡系神社に多く祭られていることである。現在の宇佐神宮と同様三女神を祭る場合が多いが、Aで示した小倉南区の古社旧県社の蒲生八幡宮は、宗像神としてタギツのみを祭る。このことは、江戸時代の『豊前国志』[19]や「蒲生社来由略記」[20]でも同様で、この神社に八幡神が勧請される以前から女神が祭られていたとも記されている。Bで記した豊後高田市の二宮八幡社は、その名にもかかわらず八幡神（応神天皇）がなく、タギツのみが祭られている。これらから、八幡神が普及する以前にこの地域には姫神信仰が広まっていた、その神はタギツと考えられていた時期があったことを示唆する。宇佐神宮では八幡神以前に女神が祭られていたことは宇佐神宮発行の『宇佐神宮由緒記』にも書かれており、このことは定説になっているようである。

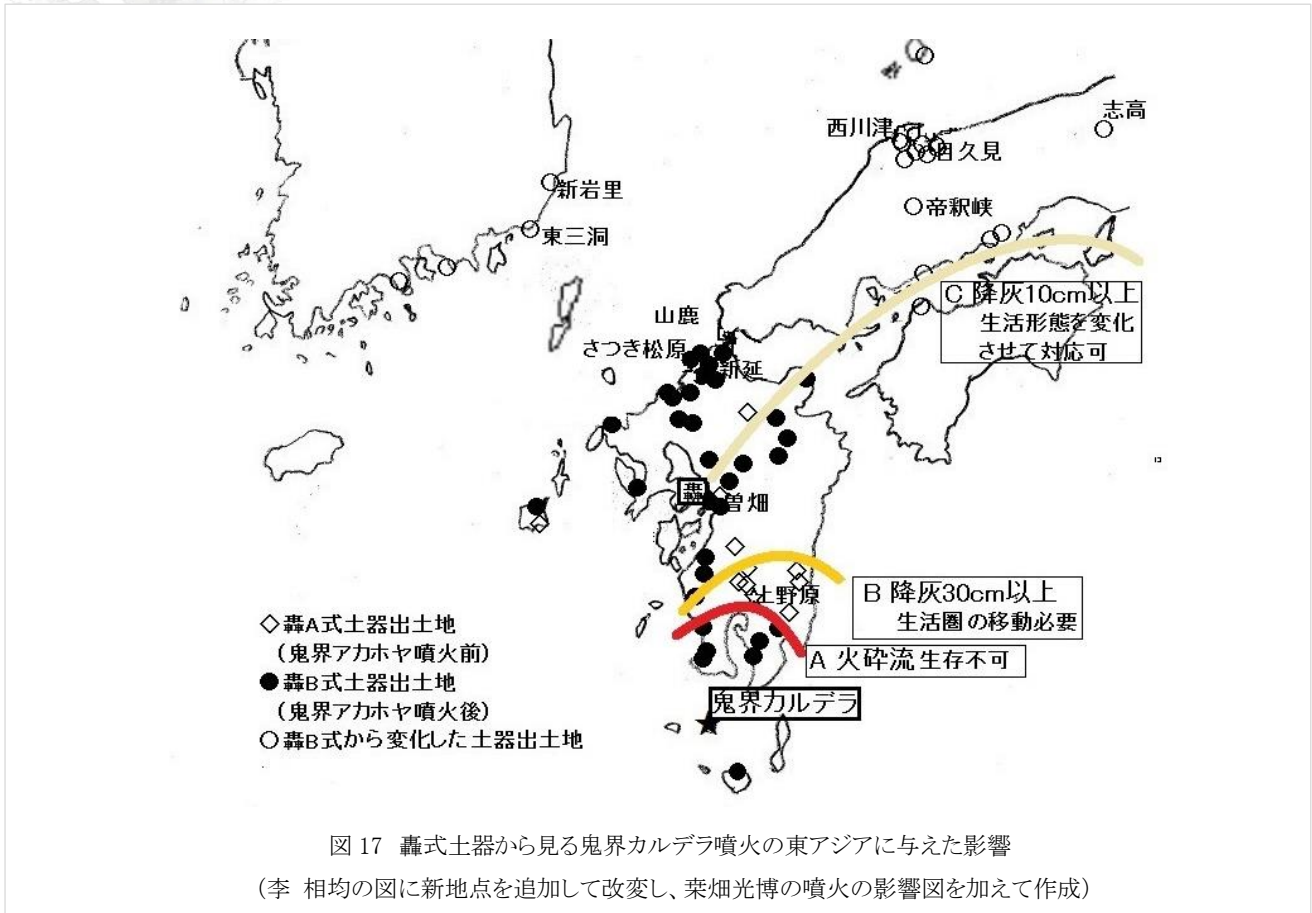
一方図中にCで示した中津市の古社くらはしはま闇無浜神社には、宗像三女神のタギツの代わりにセオリツが入っている。同様の例は滋賀県野洲市（旧中主町）の長澤神社、大阪府千早赤坂村の建水分神社、鹿児島県出水市の巖島神社（この神社は『平成データ』にはないが鹿児島県神社庁に登録されている）などにあって、いずれも比較的辺地にあることから、かつてタギツがセオリツの名で祭られていたという推測を補強する。記紀神話以来タギツが宗像神として定着した後でも、辺地ではかつてのセオリツの名が残っている所があったと解釈できる。図中Dで示した杵築市（旧大田村）の歳神社は三女神のタギツの代わりに「織津姫」という神を祭るが、これが瀬織津姫の脱字によるものとする、これと同様のケースである。上記闇無浜神社は豊の国の古名を持つ神「豊日別」を祭る由緒の古い神社なので、神名変更に従わなかったとも考えられる。このセオリツ→タギツの祭られかたは、ムナカタのセオリツ神が三女神成立の一つの要素であり、その女神が豊の国起源である可能性を示唆する。

イチキシマのみを祭る神社は宇佐以東に多い。特に国東半島沿岸の港附近に多く、対岸の伊予地方への出発地に祭られた神であることを推測させる。別府市から大分市にかけてもこの傾向が続く。

4. 9 宗像神の起源についての考察

1) 鬼界アカホヤ噴火の縄文文化へのインパクト

有名な霧島市の上野原遺跡に見るように、縄文時代早期の南九州にはかなり高度な文化が発達し、丘陵上などで狩猟採取生活を営んでいた（以下主として栗畑光博[21]による）。この生活環境を一変させたのは、約7300年前に起こった九州島南端と屋久島との間の海上で起こった鬼界カルデラの噴火である（図17）。硫黄島（鬼界ヶ島）はその火口壁の一部である。その火山灰は風に運ばれて遠く韓国南部や東北地方南部にまで達した。古くから南九州で知られていたアカホヤと呼ばれてきた赤っぽい地層が、この噴火の火山灰によることが明らかになっている。



この噴火の時期に九州で多かった土器が轟A式で、同図に見るように主に南九州山間部中心に分布する [22]。これは熊本県宇土市の轟貝塚から名付けられた。これらの遺跡は鬼界アカホヤ噴火以降消滅し、これ以降九州の遺跡は北部に多くなる。植生が壊滅的打撃を受けた南九州から多くの移住者があったと見られる。九州の土器は噴火以降轟A式から変化した轟B式が中心となり、急増した貝塚などから多く出土する。陸上での狩猟採集が困難になったため、多くの人が魚介類の採集に依存した生活に変わったと見られる。九州海人族の誕生である。

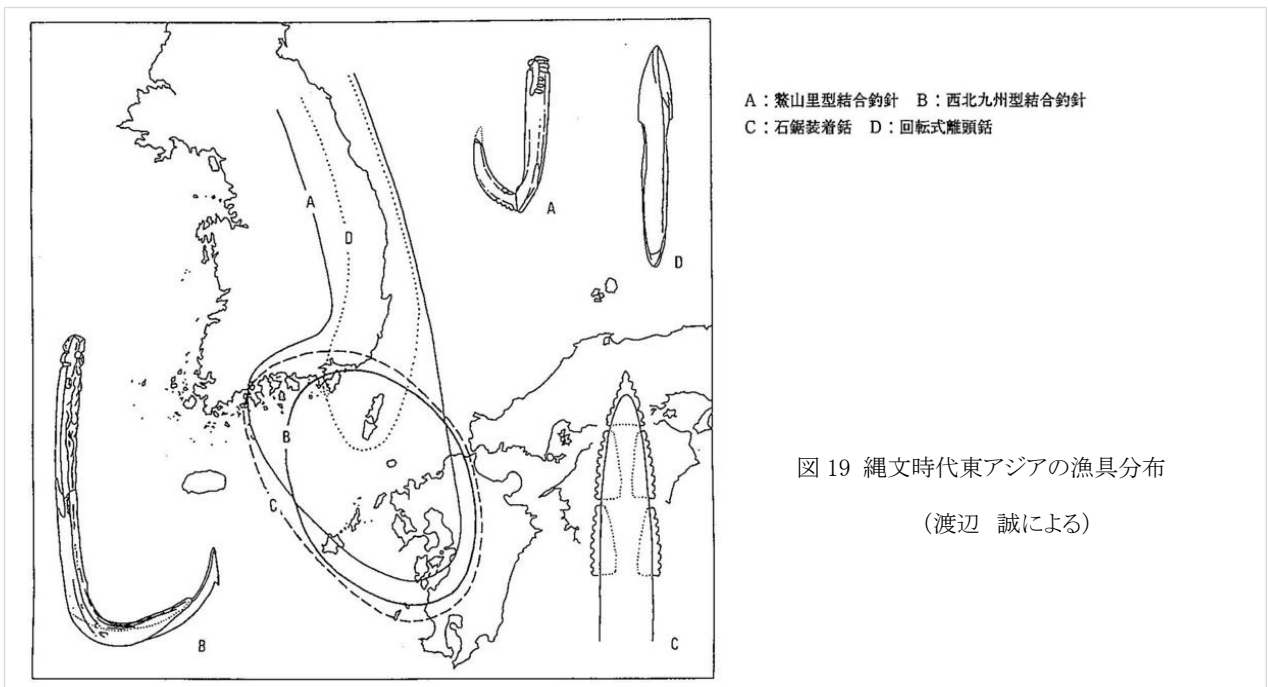
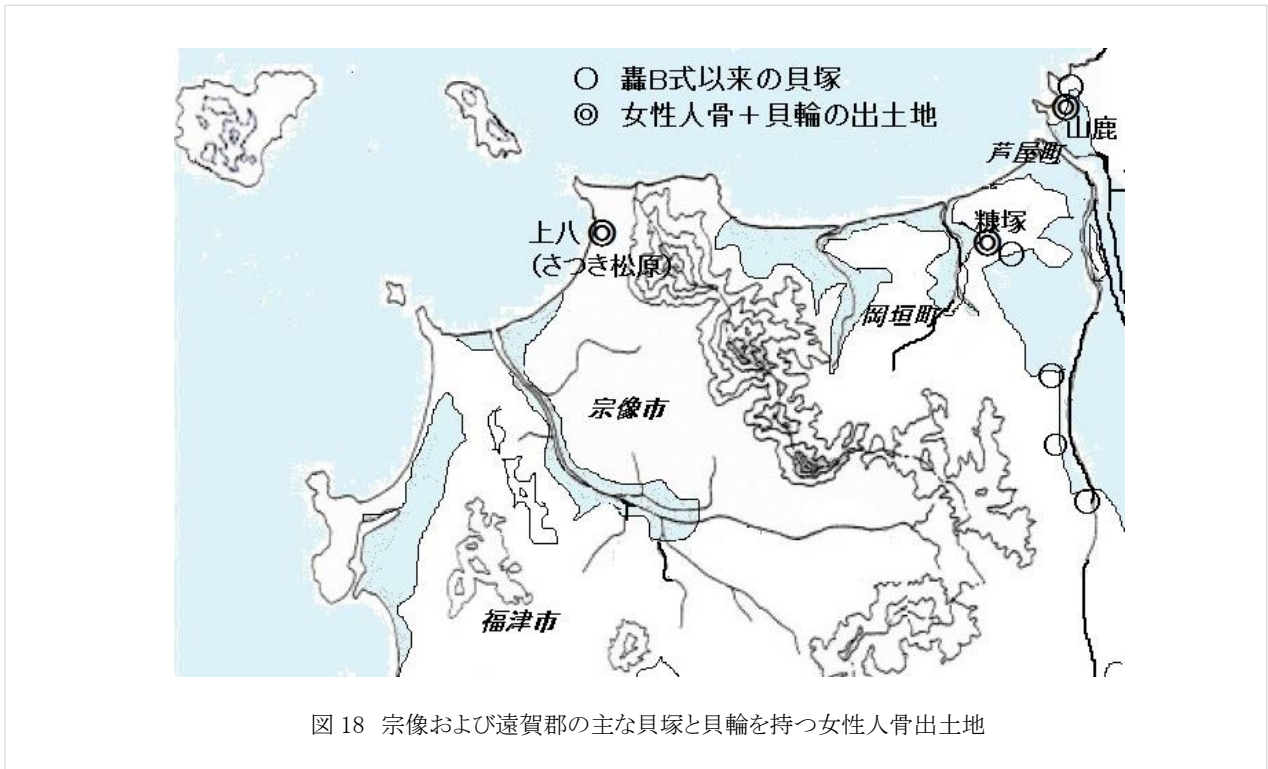
この頃気候が温暖化し、遠賀川中・下流域には大きな「古遠賀湾」が出現していた。多くの貝塚が、この内陸水面に沿って形成された。図 18 に、そのうち縄文時代晩期まで続く主な貝塚を示した (芦屋町史 [23] などによる)。隣接する宗像市上八のさつき松原海岸からも、最近轟B式土器が出土したので、この頃から同一文化圏に属していたと考えられる。

轟B式土器の影響は、九州を出てさらに山陰から山を越えて瀬戸内地方へ、また海を渡って朝鮮半島南部へ到達する。地理的に見て、北部九州の海人族がこの文化伝播に関与したと考えられる。

図 19 に、縄文時代の漁撈文化の国際的な繋がりを示した [24]。北部九州と朝鮮半島南部の海人が、共通の漁業技術を持っていたことが分かる。同図の石銚 (C) は、沖ノ島でも多量に出土している。上記



さつき松原遺跡と沖ノ島では轟B式に次ぐ縄文時代前期後半の曾畑式土器が出土しているが、この土器は図14に示した釜山市の東三洞貝塚などからも出土している。ムナカタと沖ノ島がこの国際交流文化圏内にあることが分かる。この図中のオサンリ（鰲山里）型結合釣り針は、松江市の西川津遺跡や鳥取市の青谷上寺地遺跡など顕著な山陰の弥生遺跡からも出土しており、このような海人の交流が弥生時代にも引き継がれ、さらに東方へ拡散したことを示している。



2) 女性による祭祀の伝統

福岡県芦屋町の山鹿貝塚から出土する土器は、前記の轟B式に始まり、曾畑式、中期の船元式、阿高式などから、後期中津式や鐘崎式など、さらに弥生時代直前の晩期後半に至るまで、約3000年に亘って続いている。この場所が、縄文海人族にとっていかに重要であったかがわかる[25]。

なかでも注目されるのが、後期の層(約3500年前)から出土した18体の人骨とそれに伴う出土品である。このうち数体の女性は豊富な装身具を伴っていた。とくに、ほとんど同時に埋葬されたと思われる2体の成人女性は、それぞれ19個および26個の貝輪を腕にはめていた(写真5)。山鹿貝塚では全7体の女性人骨が多数の貝輪を着けていた。これに対して男性の人骨は、ほとんど装身具を伴っていなかった。これはこの時期の東日本とは大きく異なる。東日本での縄文人では装身具を着けていたのがほとんど男性に限られていたのに対し、西日本では女性がつける比率が高かった[26]。南九州から北上した縄文人は、もともと女性を尊ぶ風習を持っていたらしい。



写真5 縄文時代の芦屋町山鹿貝塚出土の貝輪を着けた女性人骨(「芦屋歴史の里」で撮影)

岡垣町^{やはぎ}の矢矧川流域の糠塚の榎坂貝塚(図18)からも、29個もの貝輪をつけた女性の人骨が発掘された[27]。これら貝塚のように多数の貝輪を伴った例は、他地方にはない。先に紹介した宗像市さつき松原遺跡からわずか300mほど鐘崎寄りにある鐘崎^{こうじょう}(上穴)貝塚からも、女性の人骨とともに3個の貝輪が見つかっている。

それぞれ土器様式の名となったことで有名な、轟貝塚と阿高貝塚からも、貝の腕輪を着けた女性の骨が出土している。女性が貝輪を着ける慣習が中・南九州から来たもので、土器の北上に伴っていたことが推測される。



貝輪は、岡山県の船元貝塚でも出土している。山鹿貝塚から船元式土器が出土していることからわかるように、縄文時代中期以降北部九州では瀬戸内地方との交流を示す遺物が多くなっている。沖ノ島でも中期には瀬戸内地方など宗像以東の土器が多く、船元式土器も多数出土している[28]。前期以来の海人による交流の伝統が縄文時代中期以降も受け継がれていたことを示す。

宗像海人族が女神を祭ることの起源は、このような縄文海人族の伝統を受け継いだものではないか。神に仕え、神の託宣を受けた古代の巫覡(かんなぎ)は、卑弥呼の例のように、女性であることが多い。日本神話の最高神天照大神(あまてらすおおみかみ)も、書記本文ではまず大日靈貴(おおひるめのむち)と書かれているように、元々は位の高い巫女(みこ)と考えられていたらしい。時代は下るが、現在でも台湾や中国沿海部を中心に信仰を集める漁業・航海の守護神媽祖(まそ)は、宋代に実在した官吏の娘であったが、海洋気象や海難事故を予測する能力を身につけ、多くの人を海難事故から救ったという。

山鹿貝塚に葬られていた貝輪をつけた女性も、おそらくこのような巫女であったであろう。前記春成の著書によると、このような貝輪は幼いときにつけたものらしく、ふつう取り外しができなかったと考えられる。したがって労働もできず、少女の頃から特別な存在として育てられていた。そのような巫女で特に予知能力の優れたものは、やがて神と崇められるに至ったであろう。

任東権によると[29]、韓国東海岸の漁村に祭られている海神は、ほとんど女神であるという(一方西海岸では男性の海神を祭る)。このような信仰の習俗の分布も、図19の漁具の分布と符合している。海神としての女神信仰は、このような縄文時代以来の日韓古代海人族の共通習俗を母体としていると思われる。

女性の巫女は、最近まで南島(琉球列島)で健在であった。南島では、祖霊の祭りをノロ・ヌルまたはユタと呼ばれる巫女が執り行ってきた。沖縄ではピラミッド形の巫女の組織があり、最上位の巫女は聞得大君(きこえおおきみ)と呼ばれ、斎場御嶽(せーふあうたき)で行われるその即位式は、御新下り(うあらう)と呼ばれ国王の即位式をしのぐ重要な式典であったという[30]。各所にある御嶽(うたき)は、もともと男子禁制であった。

現在でも奄美大島などで農耕儀礼として行われている女性による平瀬マンカイという儀式は、本来巫女による海上の安全を祈るものであったであろう。このような南島の信仰文化は、縄文以来の古代海人族の習俗を残していると言えよう。

3) イチキシマ信仰の故地

以上見てきた北東部九州の遺跡や遺物から見える縄文海人族の伝統は、ムナカタがその範囲に含まれるとしても、その中心は遠賀川河口付近にあるように見える。大河である遠賀川の流域がその中心になるのは、きわめて自然である。しかしそれでは、宗像神に直接繋がらない。

先に見たように、旧郡別に見ると宗像神は17社の宗像郡に比べ遠賀郡で20社とより多く祭られる。そして遠賀郡ではイチキシマのみを祭る神社が14社と多い。図3に見たように、遠賀郡のイチキシマ信仰は明治初期の時点ではより顕著であった。このことは、イチキシマ信仰の故地が遠賀郡にあるのではないか、という疑いを抱かせる。前報で考察したように、宗像神のうちで最も起源の古いと思われる神はイチキシマであり、その語源は「齋く島」と考えられる。これは上記山鹿貝塚の貝輪を着けた高級巫女のイメージと重なる。

平安時代中期成立の辞書『和名類聚抄』中の「国郡郷考」は、遠賀郡の郷名中に「宗像郷」を記している[31]。これについては隣の宗像郡の郡名が混入したというのが定説のようである。しかしこれまで述べた宗像神の分布から見ると、ここに宗像郷があってもおかしくはない。同書で遠賀郡中の郷は、山鹿郷、宗像郷、内浦郷うつら(現在の岡垣町西部海岸沿いの同名地に比定されている)の順に挙げられていて、宗像郷を山鹿郷と内浦郷の間の岡垣町の主要部から芦屋町西部とすればつじつまが合う(図15参照)。ここにはイチキシマが特に多く多く祭られている。

このようなことから、「むなカタ」という地名の示す範囲が、ムナカタ(旧宗像郡)からもっと東に広がっていたのではないかと疑問が浮かび上がる。果たしてこのような「大ムナカタ」が存在したのだろうか。この疑問を解くためには、「むなカタ」という地名の由緒についての考察が必要である。

4) 地名ムナカタの語源

ムナカタは、ユニークな地名である。地名辞書で全国を調べても、ここ宗像と関わりのなさそうなムナカタは見つからない。ほとんどは、ムナカタの名を持つ神社があったため名付けられた地名である。

ムナカタには、はじめから宗像という字が当てられていたわけではない。宗像という表記は、「記紀」にはない。神代紀第六段本文には胸肩、応神紀と『古事記』には胸形、雄略紀には胸方と書かれている。『書紀』天武二年(673)には、胸形君の名が登場する。これが『続日本紀』になると、すべて「宗形」になる。大宝二年(702)の『正倉院文書』に筑前国島(志摩)郡と豊前国仲津郡の住民に「宗形部」の人が記されている。和銅四年(711)～霊亀二年(716)の『長屋王家木簡』にも、「宗形」と書かれている。



「宗像」の初出は、『肥前国風土記』および『筑前国風土記』（逸文）である。律令制が確立した時期の和銅六年(713)に「好字令」が發布され、国・郡・郷の名前を見栄えのよい字二字で書くように定められた。これは風土記編纂の勅令に含まれていたもので、風土記ではこの表記が採用された。そして延喜式えんぎしき（延長五年=927年に發布された律令の施行細則）内の神名帳じんみょうちょうに宗像郡宗像神社と書かれ、以降これが定着したようである。

しかしその『延喜式神名帳』にも、下野国の一社と伯耆国の一社は胛形神社と書かれている（胛は胸の古形）。前者は現在の栃木県小山市の胸形神社で、後者は鳥取県米子市にある宗形神社とされる。前報で見たように、胸肩など古名をとどめている神社が各地に多数現存する。前述のように最近まで五島にも存在した。

このように古文献や古社の名に胸のつく表記が多いことは、ムナカタの名が胸に由来していることを示唆する。ムネ（古音ムナ）と読む胸・棟・宗は本来同根のことばである。意味はこの順序で抽象化しているので、古さもこの順序と考えてよいであろう。胸をムナと読む胸板・胸ぐら・胸毛・胸算用などは今でも普通に使われる。ムナがもともと胸の意味で使われていたことがわかる。

ムナカタの語源については多くの説があるが、いずれにも難点がある（注5）。このなかで胸に着目したのが、人類学者で考古学・民俗学に詳しかった金関丈夫の「海人族の刺青説」である[32]。中国の史書『魏志』中の有名な「倭人伝」には、「今倭の水人、好んで沈没ぎょこうして魚蛤を捕らえ、文身はらしたもて大魚水禽を厭う。後やや以て飾りとなす。」[33]とある。はじめは潜水中の危険に備えて刺青したが、いまでは飾りのためにしているというのである。胸という字には文から変わった×が入っている。文字を発明した殷の人は、胸に文の刺青をしていたという。文は竜や蛇のウロコの形である。

宗像大社から大島・沖ノ島への玄関口こうのみなと神湊を見下ろす丘の上に、宗像で唯一の装飾古墳である桜京古墳（国史跡）がある。この横穴式石室の壁面に残る文様が、魚のウロコを表すとされる三角文である[34]。この近くには海人の生活の跡を示す浜宮貝塚があるので、この古墳を含む多くの古墳群は海人族の墓域と考えられている。

ただしこの説には、日本語の語法として致命的な問題がある。それは、具象語の後におかれた「カタ」は、人形にんぎょう（人形）・船形ひとがた・クワガタふなかつた（鍬形）など多くの例が示すように、前に置かれた具象語の形を指す表現だということである。三角のウロコ紋の入れ墨であれば、「鱗形」などと言うはずである。

「むなかつた」は「胸のような形」という意味以外には考えられない。では胸の形をしたものとは何か。

古代の地名は、多くその地形から来ている。ムナカタの場合ユニークな地形は、「宗像の四つ塚」であろう。その中でも高い湯川山(標高 471 m)と孔大寺山(標高 499 m)の2山は北東海上に突き出ている、北部九州の海岸線は宗像でほぼ直角に折れ曲がる。したがって、この2山は東西いずれの海上からも遠くから望むことができ、航海者の絶好のメルクマールになっている(写真6)。海岸に突き出たこのような二山の並びは、意外にも他地方にはほとんど見付からない。

a) 福岡市志賀島展望台(湯川山の南西約 32km)から望む



b) 北九州市藍島(湯川山の東北東約 28km)より望む



写真6 東西両方向の海上から見た宗像の四つ塚

やや低い湯川山が海側にあるため、斜め海上から見るとこの2山はほぼ同じ高さに見える。ムナカタとは、この2山を女性の胸の盛り上がりとした地名ではないか(ややごつごつした乳房ではあるが)。山や丘などの盛り上がりや女性を胸にたとえるのは、古代人らしく具象的で、素直な発想である。海人仲間にはこれ以上わかりやすい地名はなかったであろう。ムナカタの名が全国に広まったのも、うなずける。ムナ(ムネ)に当てる漢字が歴史的に胸→棟→宗と変わったのも、「高いところ」という意味が抽象化して行った過程を示す。

この推定が正しければ、重要な推論が導かれる。古代ムナカタの範囲は、湯川山と孔大寺山の西側のかつての宗像郡だけではなく、この2山を同様に仰ぎ見る東側をも含んでいたのではないかと推定される。少なくとも遠賀郡の西部、遠賀川河口付近までが、その範囲に入るのは当然である。これを今後「大ムナカタ」と呼ぼう。

この推定は、古代の「遠賀郡宗像郷」の記録と符合するだけでなく、宗像神、なかでも図15などに見たイチキシマを祭る神社の分布をよく説明する。



4. 10 三女神の起源と沖ノ島祭祀の意義（予備考察）

三女神のうちイチキシマが最も古層の神であるという前報の推定は、本報でも裏付けられた。イチキシマはおそらく始め縄文海人族が祭った神であり、その信仰発祥の地は大ムナカタ、そのなかでもムナカタの4つ塚の東から遠賀川の下流域にかけての地域と推定される。

残る二神の起源についてはさらに歴史的検討が必要で詳細は次報に譲るが、ここで大まかな輪郭を述べておく（この二神の神名が沖ノ島の自然を表したものという説明がよく行われているが、これには大きな難点がある^(注6)）。

タゴリは、出雲の主神オオナムチと婚姻して二児をなしたという前報で紹介した説話からわかるように、出雲との繋がり強い神である。ムナカタにタゴリを主神として祭り出雲神との繋がり深い2社があることを先に述べた。

これに対してタギツは、単独で祭られることが少なく、出自が掴みにくい。

北部九州では、周防灘沿岸の2社でタギツが単独で祭られている（図16）。いずれも八幡系の神社であるが、その1社の由緒はタギツが八幡神勧請以前の古い神であったとする。一方中津市の古社に三女神のうちタギツが瀬織津姫（セオリツ）に置き換えられた形で祭られていて、このようなケースは他にも2例ある。このことは、この二神は本来同神であって、どちらかが名を変えたという推測を生む。

セオリツは津屋崎の波折神社にも祭られていて、古くは他にも3社が祭っていたことを先に述べた。一方江戸時代の『筑前国続風土記付録』は、この「波折宮」の祭神を貴船神と書く。これについて福岡藩の国学者青柳種信^(注7)が書いた同社の由緒書には、「当社に祭るところの神は瀬織津姫大神 また木船神とも称え申す」とある[35]。ここにセオリツと貴船神（木船神）＝オカミ神との接点が現れる。セオリツをタギツと同神とすると、タギツとオカミ神との関係が浮かび上がる。このことは、先に見た北部九州東部でのオカミベルトと宗像神信仰域との重なる理由を説明する。

宗像神社に伝えられた古文書の一つ鎌倉時代成立とされる『宗像大菩薩御縁起』[36]には、「貴船大明神」が大宮司館^(注8)に安置されていると書かれている。宗像神社は、オカミ神との繋がりが深かったのである。次報では、これら諸神の間関係をさらに掘り下げたい。

三女神の素性が明らかになれば、なぜその誕生を語る誓約（うけい）神話が創られたのか、そしてその神話と沖ノ島祭祀との接点が明らかになってくると思われる。

注

(注1) 東海地方など遠方で異常に宗像神を祭る比率の高い諸県の社名には、八王子または八柱^{やばしら}を名前に持つ神社が多く見られる。これらの神社の全てが、記紀神話で天照大神^{あまてらすおおみかみ}と素盞鳴命^{すさのおのみこと}（『古事記』に須佐之男、以下スサノオ）とが行った誓約の際に三女神と共に出生した五男神を共に祭っている。すなわち、この八柱または八王子とは、誓約で生まれた八神の意味なのである。この八王子は、本来祇園信仰の祭神牛頭天王^{うけい}の八人の王子の意味であった。明治神祇制度で神仏の分離が強制され、牛頭天王も殆どがそれと習合していたスサノオに名を変えられた。そしてその子神の八王子も、誓約で生まれた八神にすり替えられた。従って、三女神を祭り八王子または八柱を名前に持つ神社は、本来の宗像神信仰社ではないことが明らかである。異なる名を持つ神社でも、三女神五男神がセットで祭られている場合は、牛頭天王の子神の八王子であった場合が殆どと考えられる。

(注2) オカミ神は京都市北部山中の貴船谷にある式内大社貴船神社の祭神であるので、一般に貴船神とも呼ばれ、全国の貴船神社が同社から勧請されたと考えられることが多い。しかし同社が記録に現れるのは弘仁九年（818）のことで、オカミ神はすでに『書紀』に現れていた。平城京時代朝廷の雨乞いまたは止雨の祭りはもっぱら吉野川上流の丹生川上神社に向けられていたが、平安京遷都後新京にも祈雨の祈願を行う社が必要となったため吉野からオカミ神を勧請したのが始まりである。『平成データ』で集計すると、全国の貴船系神社（キブネまたはキブネと読まれる名を持つ神社）は528社で、そのうち福岡県157社、大分県99社と、この二県で48%を占める。一方京都府内には貴船神社が他に存在しないので、ここが信仰発祥地とは考えにくい。オカミ神を祭る神社は全国に1327社あり、うち福岡県が272社、大分県が199社、愛媛県が151社で、この3県で全国の47%を占める。明らかに起源が福岡県から大分県の辺りにある神と考えられる。

(注3) 『調』は第2次大戦中の行政単位で集計されているが、市制が布かれている地域もかつて属していた郡中を含めて図示した。郡名とその範囲は『平成データ』で用いているものと異なる点があるが、同等の郡間で比較すると図2などで見た傾向とは大きく異ならない。

(注4) 『平成データ』には矢房神社の祭神をアマテラス、オオナムチ、タゴリと記すが、宝暦十年(1760)の置き札によると、アマテラスの名はなく田心姫命・大己貴命の順となっている[37]。タゴリが本来の主神であったと考えられる。

(注5) ムナカタの語源についての諸説のひとつのグループは、地理や地形からの説明である。

この中には、海の方という海方^{うなかつ}から変わったという説、またかつて内海になっていた釣川沿いや、旧津屋崎町に干潟が発達していたことから来たという、^{むなかつ}「空潟」説などがある。

しかしこれらはどこにでもある地形で、ムナカタの地形の特徴をよく示しているとは思えない。「空潟」にしても、先史時代には日本全国、ことに日本海沿岸の各地に、砂州で仕切られた潟が各所に発達していた。これらは皆その後「空潟」の状態を経て、川を残して陸地化している。宗像市の両隣の古賀市と岡垣町にも、それぞれかつては宗像と同様深い入り江があり、さらに遠賀川流域にははるかに大きな潟があった。宗像を「空潟」の代表とする必然性はない。



それに「空潟」という言葉は、古代には使われたことがないようである。もともと「潟」とは、水が満ちていないところだからである。万葉集巻六にある山部赤人の有名な歌

「若の浦に 潮満ち来れば 潟を無^{あしべ}み 葦邊をさして 鶴鳴き渡る」九一九

(岩波文庫版による)を見ればこのことは明らかであろう。

水のない状態を特に強調するときには「干潟」という言葉があるので、「空潟」などという言葉は不要なのである。潟には、芦などの草が生えているのが普通であるから、「空潟」という表現はあまり適切ではないからであろう。

「むなし」という言葉自体が、それほど古いものではないらしい。『日本語源大辞典』(小学館)によると、この語の初出は奈良時代の『続日本紀』であり、語源は「身無し」であるという説がきわめて有力である。組み合わせ語から転じて抽象化したものであるから、それほど古いことばではなく、古墳時代以前に遡ると思われるムナカタの地名に、使われたはずがない。

水がないことを強調するならば水無潟というべきで、これがムナカタの語源であるという説もある。しかし、この言葉も使われた例はないようである。それに、このような三語以上を組み合わせた言葉が、上古から使われたとは考えられない。六月の古語の水無月も、もとは水な月、すなわち水の月であったものが後に当て字されたものとされる。

もうひとつのグループは、古文書に根拠を置くものである。これは、西海道風土記逸文の「宗像太神天より崎門山に降りまししとき、青蕪玉を奥宮の表に置き、八尺蕪紫玉を中宮の表に置き、八咫鏡を邊宮の表に置き、この三表を以て神軀の形と成して、三宮に納め置きて即隠したてまつりき。よつて身形郡という。後人改めて宗像という。」(以下訓注は『宗像神社史』[38]などによる)による身形説と、西海道風土記逸文の他の一伝にある「天神の子四柱あり。兄三柱神弟大海命に教えて曰く、汝命は吾等三柱の御身の像と為りて此の地に居るべし。(中略)故に号して身像郡という。」による身像説とがある。しかしこれらも、どの神にでもあり得る話で、宗像に固有の地名の語源になるとは思えない。上記逸文が奈良時代の風土記成立当時の文章に間違いがないとしても、一般に風土記の地名・神名等の縁起はこじつけと考えられるものが多く、多くは語源として信用できない。

(注6) タゴリの意味については、『宗像神社史』は古事記が多紀理毘賣と表記するのを本来の読み方とし、タコリはタギリ(滾り)で、「水の逆巻き湧きあがる様をのべたもの」として、激しい海の波が「滾る」さまとする。しかし、この説明には問題がある。

古語ではタギリはタギツ(激つ)から出た言葉であり、タギツと同じ意味である。同じ意味を持つ神名が、並んで挙げられているのは不自然である。そして「たぎつ」は、万葉集に13の用例が挙げられているが、そのすべてが吉野川などの川の瀬で水がたぎる様を詠んだもので、海の波のさまに使われたことはない。「たぎる」という語は、平安時代以降の文献に始めて現れ(『角川古語大辞典』)、「湯が滾る」というように転化した意味で用いられる。上古には「波が滾る」という用例はない。

『書紀』では、田心はおおむねタコリと清音の読みが付されている写本が多く、特に『日本書紀私記』のある写本には万葉仮名で「多去利」と記されているという(『宗像神社史』)。この表記は、清音でしか読めないことが明らかである。



岩波文庫版『書紀』[8]も、音をタコリと記す。「^{たぎ}滾り」には清音の形はないので、仮にタコリがタキリの交代形であるという説(岩波版『書紀』の注)が成り立つとしても、「タギリ」にはつながりそうもない。

一方正木喜三郎[39]は、神代紀第六段の第三の一書に田霧と書かれていることをよりどころに、これを「多霧」の意味とし、対馬暖流が暖かい水蒸気をあげ、寒い中国からの季節風にあって、日本海特有の霧を発生させる様の神格化という説を唱えた。しかし古語辞典にある限りでは、「た」が漢語の「多」の意味で使われることはない。漢語を重ねた造語が行われるのは、後世のことである。この点からこの説には無理がある。タゴリは全国の神社で少なくとも15通りの表記で記されているが、多霧と表記した例は全くない。田霧も少なく、ほとんどが宗像と関わりの少ない遠方の地域にある。これは『書紀』の上記の一書の表記にならったものと思われる。福岡県には全くなく、九州では大分県に一社あるのみである。

またさらに、沖ノ島周辺は決して霧の発生が多い海域ではない。『海洋気象講座』[40]によれば、日本海北部は年間霧日数が北海道南東岸(53~91日)や本州北部太平洋岸(22~39日)に続き13~41日と多いが、日本海南部は10~15日以下で、日本列島をめぐる海域の中ではもっとも霧が少ない。理科年表(岩波書店)で2000年まで30年間の年間霧日数の統計をみると、沖ノ島に近い厳原(対馬)では16日ときわめて少ない。私も数回沖ノ島に渡っているが、霧に遭ったことはない。漁師や釣り人からもそのような話は聞いたことはない。沖ノ島を遠望しても、特にそのような印象を受けたことはない。

以上の諸説は、『古事記』がタゴリを「^{たぎりびめ}多紀理毘売」と表記していることに影響されているものであろうが、神代紀では本文と第一および第二の一書が田心姫である。第三の一書のみが田霧姫と表記していて、数から見ても三対一である。『古事記』は神代紀を見て書かれた可能性が否定できず(次報で詳述予定)、タゴリ(またはタコリ)が本来の神名であった可能性が高い。

(注7) 『付録』の続編『筑前国続風土記拾遺』[41]の著者。同書にも津屋崎の浪折神社の主祭神に貴布祢明神を記すが、一方で上の岳(現在の宗像市田野向田野)にあった浪折神社の筆頭祭神を瀬織津姫命としている。この神社は現在田野石川の依嶽神社の境内末社となっている。

(注8) 天元二年(979)の太政官符で宗像に大宮司を置くことが許可され、以降宗像大宮司家が天正一四年(1586)第79代氏貞の死まで続く。



参考文献

- [1] 矢田 浩, 『宗像神を祭る神社の全国分布とその解析 —宗像神信仰の研究（1）—』, むなかた電子博物館紀要, 7号, pp.202-237, 2016.
http://www.d-munahaku.com/culture/kiyou/files/2015/09_kiyo2015.pdf
- [2] 神社本庁, 『全国神社祭祀祭礼総合調査 平成「祭」データ』, 1995.
- [3] 石田諭司, <http://www.tt.rim.or.jp/~ishato/index.html>.
- [4] 宗像神社, 『宗像神社史料第二輯 宗像三神奉齋神社調』, 宗像神社, 1944.
- [5] 伊東尾四郎, 『宗像郡誌』, 臨川書店, 1986（復刻）.
- [6] 遠賀郡教育会『遠賀郡誌』, 臨川書店, 1986（復刻）.
- [7] 川添昭二他校訂, 加藤一純・鷹取周成, 『筑前国続風土記付録』（上）（下）, 文献出版, 1977-1978.
- [8] 坂本太郎他, 『日本書紀（一）』, 岩波文庫, 2004.
- [9] 中川雅央, <http://www.biwako.shiga-u.ac.jp/sensei/mnaka/ut/rtable.html>
- [10] 藤尾慎一郎, 『国立歴史民俗博物館研究報告』, 21集. 1989.
- [11] 宗像市教育委員会, 『概報 田熊石畑遺跡』. 2009, 『国史跡 田熊石畑遺跡』, 2014.
- [12] 『峰町史』. P.1473, 1993.
- [13] 田平町教育委員会. 『里田原遺跡(田平町文化財調査報告書第9集)』
- [14] 正林 護, 『日本の古代遺跡 42 長崎』, 保育社, p.167, 1989.
- [15] 伊藤常足, 『太宰管内志下』. 文献出版, p.225. 1989.
- [16] 三浦 讓, 『全国神社名鑑』, 全国神社名鑑刊行会, 1977.
- [17] 岐宿町, 『岐宿町郷土誌』, p.204. 2001.
- [18] 神道大系編纂会編, 『神道大系 神社編 総記（上）』, 神道大系編纂会, 1986.
- [19] 高田右近, 『豊前国志』, 1865.
- [20] 神道大系編纂会編, 『神道大系 神社編 44』, 神道大系編纂会, 1982.
- [21] 栗畑光博, 『火山噴火が狩猟採集社会に与えた影響』九州大学学位論文, 2014.
- [22] 李 相均, 『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』, vol.12, pp.113-168, 1994.
- [23] 『芦屋町史』, 芦屋町, 1991.
- [24] 渡辺 誠, 『目からウロコの縄文文化』、ブックショップマイタウン、p.56, 2008.
- [25] 芦屋町教育委員会, 『山鹿貝塚』, 1972
- [26] 春成秀爾, 『古代の装い』, 講談社, p.64, 1997.
- [27] 渡辺正気, 『日本の古代遺跡 34 福岡』, 保育社, p.144, 1987.
- [28] 岡崎 敬, 『宗像沖ノ島』, 宗像大社復興期成会, 1949.
- [29] 任 東権, 『玄界灘の島々』, 小学館, p.105, 1990.
- [30] 岡谷公二, 『原始の神社を求めて』, 平凡社新書, 2009.
- [31] 日本歴史大系第41巻『福岡県の地名』, 平凡社, p.86, 2004.
- [32] 金関丈夫, 『発掘から推理する』, 岩波現代文庫. p.154, 2006.
- [33] 石原道博, 『魏志倭人伝他三編』, 岩波文庫, 2006.
- [34] 宗像市教育委員会, 『桜京古墳』, 2007.
- [35] 『津屋崎町史 資料編上』, 津屋崎町, p.412, 1996.



- [36] 神道大系編纂会, 『神道大系 神社編 49 宗像』, 神道大系編纂会, pp. 6-21, 1979.
- [37] 宗像市史 史料第3巻』, p. 520, 1999.
- [38] 宗像神社復興期成会, 『宗像神社史上』, 宗像神社復興期成会, 1961.
- [39] 正木喜三郎, 『宗像の歴史と伝承』, 岩田書院, 2004.
- [40] 福地章, 『海洋気象講座』, 成山堂書店, 1975.
- [41] 広渡正利他校訂, 青柳種信. 『筑前国続風土記拾遺(中)』, 1993.

宗像三女神と沖ノ島祭祀の始まり(上)

—宗像神信仰の研究(3)—

静岡理工科大学 名誉教授

矢田 浩

概要 宗像沖ノ島の神信仰の歴史の変遷とその背景を、記紀神話・歴史史料・祭神解析・考古学的知見などから総合的に検討した。

宗像海人族が縄文時代以来祭ってきた市杵島姫を沖ノ島の神とする信仰は、近世に到るまで根強い。

田心姫は弥生時代初めからのムナカタと出雲との深い繋がりを象徴する神であるが、弥生時代後半朝鮮半島の鉄が山陰に直接流入し始めた時期に、そのルートの中間にある沖ノ島との繋がりが強まったようである。古墳時代はじめ頃出雲の主神直系の子孫がヤマトからムナカタに入り宗像氏の祖となるが、この頃以来鉄に飢えていた畿内に鉄が多量に流入する。これは南朝鮮諸国と結んで宍道経由の交易路を確立していた博多湾岸諸国に対抗する瀬戸内海経由の貿易の大動脈が確立されたためと思われ、沖ノ島祭祀はその重要な中継地で誓約の祭りとして始まったと思われる。誓約神話はそのことを象徴的に示すが、その中で交易路を管理する宗像氏ゆかりの田心姫が三女神の筆頭となったのは当然と思われる。

湍津姫はムナカタとの直接の接点は見えないが、祭神分布の解析などから、かつてヤマト王権の重要神であった瀬織津姫と同神の可能性がある。この神はムナカタでも重要な位置の4社に祭られてきた。三女神には、ヤマト王権側の代表として加わったものと思われる。詳細な経緯は別報で考察予定である。

1. はじめに

平成29年(2017)5月6日、文化庁は、同年の審査を目指す日本の世界遺産候補「『神宿る島』宗像・^{むなカタ}沖ノ島と関連遺産群」について、登録の鍵を握るユネスコの諮問機関イコモスの評価結果を公表した。イコモスは沖ノ島とそれに付随する岩礁についてのみ「記載が適当」とし、資産名を「『神宿る島』沖ノ島」に変更するよう勧告した[1]。

イコモスは沖ノ島の世界遺産としての価値を、「独特の地形学的特徴をもち、膨大な数の奉獻品が位置もそのままに遺存する祭祀遺跡が所在する沖ノ島総体によって、この島で行われた500年にもわたる



祭祀の在り方が如実に示されている」とする。しかし実際には殆どの奉獻品が取り出されていて現場にはない。それにもかかわらず「古代祭祀の記録を保存する類まれな「収蔵庫」と評価された理由は、それら神宝の殆どが厳格な学術的態度で調査・記録・保存され、その「真実性が証明され」ているからである。

一方九州本土部の宗像大社辺津宮をはじめとする 4 資産については、「自然崇拜に基づく古代の沖ノ島信仰と現在の宗像大社信仰に継続性が確認できない」とし、「なぜ、どう信仰が変容したのか、説明が不十分」と指摘した。

この勧告は図らずも、日本の神信仰についての一般的な認識の曖昧さと、学術的研究の不足を厳しく衝いた形となっている。

第二次大戦までは、明治以降の国家神道観によって日本の神についての認識が歪められ、冷静な客観的議論が十分行われにくかった。敗戦後は、神国思想の徹底的排除を図った占領軍の政策のために、本来日本固有の文化である神信仰の研究は低調に推移してきたように思われる。

本報では、その認識が喫緊に問われている沖ノ島の神について、神話の解析、歴史史料の分析、考古学的物証、それに本研究で進めてきた祭神解析などを総合して、沖ノ島と宗像大社で祭られてきた神についてその実像を追求し、その知見に基づき三女神と沖ノ島祭祀との繋がりを探る。

なお本報では、前報と同じく旧宗像郡（現在の宗像市と福津市）をムナカタとし、遠賀郡と鞍手郡のそれぞれ一部を含んだ広域の範囲を大ムナカタとする。

本研究の第一報[2]では、主として最近の神社本庁のデータを用い宗像神の全国分布を検討した。前報で示したように、宗像神（宗像大社の表記で田心たごりひめのかみ 姫神・湍津たぎつひめのかみ 姫神・市杵島いちきしまひめのかみ 姫神の三女神）には非常に多くの表記があるので、以下各神をそれぞれタゴリ・タギツ・イチキシマで代表させる。宗像神を祭る神社は沖縄県を除く全国で、3500 社以上の神社本殿に祭られている。そのうち本来の宗像神信仰ではない八王子信仰社を除外した約 2900 社について都道府県別の分布を検討した。宗像神がその誕生神話のように三神セットで祭られている場合は、全体の 28%に過ぎない。最も多いのはイチキシマ一神を祭る神社で、全体の 60%を占める。その比率は関東・東海・近畿に多い。このように多くの神社が宗像神を祭るにもかかわらず、ムナカタ（ムナガタ）の名を持つ神社は 69 社と少ない。その表記には、宗像以外に胸肩、胸形、宗形、宗方などの古名を持つ社が宗像から遠方に多い。しかし宗像神のみを主祭神とする「純ムナカタ系社」は、950 社以上現存する。



この集計で宗像神が特に集中して祭られていることわかった青森県津軽地方、栃木県、千葉県印旛沼周辺、中国地方山間部について歴史史料や考古学的知見などと対比して考察した結果、宗像神の全国への普及は古代以前に遡ると推定され、特に弥生文化の日本海に沿っての北上と、それに続く内陸から表日本への波及に対応する場合が多いと見られた。弥生時代後半以降古代に入っても、古くからの繋がりがあったと見られる出雲系や物部系の人々の移住を先導するようにして、特定の地域に宗像神が集中的に祭られている。このことは、古代以前の宗像海人族が単に通商に従事していたばかりではなく、人口の少ない農業適地への移住者に対する情報提供や先導など、今日の総合商社的な役割を担っていたことを示唆する。しかしそのような広域活動は、ヤマト王権がほぼ全国を掌握すると制約を受けざるを得なかったと思われる。沖ノ島祭祀の開始は、その時期に対応していると推定された。

宗像神信仰の起源と考えられる福岡県では、宗像神を祭る神社の存在比は全国の平均レベル程度であった。これは福岡県が地勢的・歴史的に広域にまたがり、その中で宗像神信仰が他神信仰と棲み分けしているためと思われる。

そこで第2報[3]では北部九州諸県について旧郡単位で分布を調査し、不均一な分布の一因と思われる他神信仰との関係についても調べた。

宗像神は宗像郡から豊前・豊後に到る東部地域と、松浦半島から有明海に到る西部地域とに高密度で祭られている。両地域の間には玉依姫と埴安神を祭る神社が集中するベルト地帯があり、宗像神およびその東部分布域に高密度で祭られる水神 おかみ 龍神のベルト地帯とは統計学的に有意な棲み分け関係にある。これら分布域の起源は、弥生時代に遡ると推定された。九州北方海域の宗像神分布から、朝鮮半島から日本列島に到る古代通商路として、沖ノ島を経由するムナカタルート1と、壱岐を経由するムナカタルート2（佐賀県經由有明海方面と西海方面へも分岐）が推測される。三女神のうち市杵島神は、特に高密度で祭られている遠賀郡域にルーツがあるように見える。このことから地名ムナカタの語源についての新説を提出した。他の二女神のルーツについても予備的考察を行った。



2. 宗像神誕生神話の解析

2. 1 従来の研究

これまでの宗像神についての最も詳細な研究は、『宗像神社史（上）・（下）』[4]である。これには宗像神に関する殆ど全ての史料が網羅されており、まず第一に準拠すべき文献である。ただしその編纂は第二次大戦中に始まっているので、従来の神道史観の影響を多少受けている。そして編纂目的からの制約で、宗像神社（現宗像大社）の社説との整合性を考慮しているところがある。本報ではこのような制約のない立場から議論を行いたい。

『宗像神社史』以降の研究では、正木喜三郎の『古代・中世宗像の歴史と伝承』中の論文がまず挙げられる。また最近では亀井輝一郎がこの問題を論じている[6][7]。しかしいずれも文献史学の立場からのみの研究で、十分解決に近付いているとは言い難い。

2. 2 誓約神話の分析

三女神誕生を含む誓約神話（以下「ウケイ」）は大変奇妙な物語である。『日本書紀』神代紀によりその第六段本文の概要を、前段である第五段本文の概要とともに、巻末^(注1)に示す。この第六段は、主人公の神の^{あまてらすおおみかみ}一柱天照大神（読みは以下岩波文庫版[8]を採用：以下アマテラス）が皇室の祖神であるばかりではなく、三女神と共に生まれる五男神のうち^{まさかあかつかはやひあまのおしほみのみこと}一柱正哉吾勝勝速日天忍穗耳尊（以下オシホミ）が天皇家の直接の祖先となっている点で、いわゆる「記紀神話」の中でもきわめて重要な意味を持つ。

この段は、その悪行により天上界を追放されることになった^{すさのおのみこと}素戔鳴尊（以下スサノオ）が、姉のアマテラスに会いに行くことで始まる。そしてスサノオの赤心を疑うアマテラスに対し、①スサノオによる「ウケイ」の提案と清心の条件提示→②両者の^{ものざね}「物根」の交換→③アマテラスによる三女神の化成とスサノオによる五男神の化生→④三女神と五男神の交換という複雑な過程をたどる。

神代紀第六段には本文の他に三つの一書が併記されていて、それぞれ本文とは多少の異同がある。その違いを、表1に示す。神代紀にはそのほかに第七段の第三の一書に「ウケイ」が記述されている。

一方『古事記』に記される「ウケイ」神話は、神代紀の各書とはかなり異なる点がある。特に事前の清心条件提示がない点が不審である。これでは「ウケイ」を行う意義がはっきりしない。そして事後に^{たおやめ}「手弱女を得た」と喜び、勝ちを宣言する。表1に示すように、神代紀の各書では全て事前にスサノオが男子を生めば勝ちという提案がなされていて、その結果その長子の名に正哉吾勝勝速日という長い尊称



が附く。これは第六段の第三の一書に明記されているように、男子を産んだスサノオの勝ち名乗りである。『古事記』ではスサノオが女神を得たにもかかわらず男神にこの勝ち名乗りの尊称を付けたのは、全く意味をなさない。

表1 記紀の誓約神話の諸伝比較

書	日本書紀神代紀					古事記 (参考)
	第六段本文	同 第一の一書	同 第二の一書	同 第三の一書	第七段第三の一書	
親女神の名前	天照大神	日神	天照大神	日神	日神	天照大御神
清心証明の条件と提案者	スサノオが男を生む (スサノオ)	スサノオが男を生む (日神)	スサノオが男を生む (スサノオ)	スサノオが男を生む (日神)	スサノオが男を生む (スサノオ)	事前提示なし
親女神の嘸んだ物	スサノオの剣	自分の剣(3本)	スサノオの曲玉	自分の剣(3本)	剣(自分の?)	スサノオの剣
生まれた女神と順序 (鎮座地)	田心姫	瀛津嶋姫	市杵嶋姫命…遠瀛	瀛津嶋姫命(市杵嶋姫命)	省略	多紀理毘賣 (奥津島比賣) …胸形奥津宮
	湍津姫	湍津姫	田心姫命…中瀛	湍津姫命		市寸島比賣 (狭依毘賣) …胸形中津宮
	市杵嶋姫	田心姫	湍津姫命…海浜	田霧姫命		多岐都比賣… 胸形辺津宮
その帰属	スサノオ	日神	省略	日神?(葦原中国へ)	記載なし	スサノオ
その理由	スサノオの者根	記載なし	省略	なし	スサノオの事前の言葉	スサノオの物實
スサノオの嘸んだ物	天照の御統	自分の統の瓊	天照の剣	自分の統の瓊など	自分の統の瓊など	天照の御統
生まれた男神と順序	正哉吾勝勝速日天忍穗耳尊	正哉吾勝勝速日天忍骨尊	天穗日命	勝速日天忍穗耳尊	正哉吾勝勝速日天忍穗根尊	正哉吾勝勝速日天之忍穗根命
	天穗日命	天津彦根命	正哉吾勝勝速日天忍骨尊	天穗日命	天穗日命	天之菩卑能命
	天津彦根命	活津彦根命	天津彦根命	天津彦根命	天津彦根命	天津日子根命
	活津彦根命	天穗日命	活津彦根命	活津彦根命	活目津彦根命	活津日子根命
	熊野櫛樟日命	熊野忍踏命	熊野櫛樟日命	燖速日命	燖速日命	熊野久須毘命
その帰属	天照大神	後では日神	記載なし	日神	日神	天照大御神
その理由	天照の御統	なし	記載なし	日神が事前に宣告	スサノオが奉る	天照の物實
勝ちの条件(事後)	—	—	—	—	—	手弱女を得る
うけいの判定(スサノオから)	記載なし	勝つ験を得る	省略	「正哉吾勝ちぬ」と云い長子の名につける	清心で満足	自らわれ勝ちぬと云う
三女神の降した所	記載なし	筑紫の洲	記載なし(上記三宮?)	葦原中国の宇佐嶋	省略	記載なし(上記三宮?)
三女神を祭る氏族	筑紫の胸肩君等	記載なし	省略	筑紫の水沼君等	記載なし	胸形君等
その他		日神の神勅(道中)		海北道中(道主貴)		



2. 3 神話に見る沖ノ島の神

表1から、沖ノ島に祭られる神が特定できるだろうか。第六段本文には、三女神の誕生順のみが現在の宗像大社の三女神の順序の通りに記され、鎮座地の記載はない^(注2)。第一の一書も誕生順のみであるが、^{おきつしま}瀛津嶋姫、^{いっきしまひめのみこと}湍津姫、田心姫の順になっている。瀛津嶋姫は、第三の一書に「瀛津嶋姫命亦の名は市杵島姫命」と書かれているので、イチキシマであることは間違いない。第二の一書にのみ鎮座地が記されていて、イチキシマを「遠瀛^まに居^{かみ}します者なり」とし、タゴリを「中瀛^まに居^{かみ}します者なり」、タギツを「海浜^まに居^{かみ}します者なり」とする。瀛津嶋とはもちろん沖つ島と同義で、沖ノ島の古語であるが、第一・第二・第三の一書はいずれも沖ノ島に祭られている神をイチキシマとすることで一致している。ただしタゴリとタギツとについては三書で異同があり、特に第三の一書はタゴリに当たる女神を田霧姫と記している^(注3)。

このように類似した複数の異説が存在することは、この神話の成立がかなり古く、伝承の過程で多少変化してきたことを示すと思われる。また第六段本文が成立した時点でも。ある程度の修正が加えられたとも考えられる。そのような変化の過程を追うことが可能であろうか。

2. 4 「ウケイ」神話の変遷過程

「ウケイ」神話の変遷過程を推定する鍵が、その前段（神代紀第五段）の本文にある。それは、「ウケイ」神話の主人公の一柱であるアマテラスの呼称である。

アマテラスらの親神である^{いざなぎのみこと}伊弉諾尊と^{いざなみのみこと}伊弉冉尊が夫婦になって日本の国土を次々に産んだあと、「次にこの国や自然の^{きみたるもの}王者をうまなければ」と言って日神を産んだ。これを「大日^{ひのかみ}靈貴と号す」とある。これに付記して、一書では天照大神、また一書では天照大日靈貴というように記されている。『古事記』はアマテラスを天照大御神と書くが、これは天照大神への尊崇がさらに進んだ段階を示すと考えられる^(注4)。これらからアマテラスの呼称は、日神→大日靈貴→天照大神→天照大御神と変化したと考えることができよう。

大日靈貴は、一般に「太陽神を祭る、位の高い巫女」と解釈されている。すなわちアマテラスは、本来氏族神である太陽神を祭る巫女であった。そのうちの特別に尊崇された巫女が神格化して天照大神となったと考えられる。

表1では、第六段第一と第三の一書が親女神を日神としており、これらが最も古い形を残した伝承と思われる。この二つの一書ではイチキシマが沖ノ島の神であることで一致しており、他の二女神についてはその鎮座地を明示しない。おそらくこれが本来の祭祀の姿であったのであろう。第二の一書で三女



神にそれぞれの鎮座地を記したのは、おそらく宗像神祭祀が田嶋と大島でも実施されるようになったためであろう。

ところで第六段本文で鎮座地を記さず出生順のみを記したのはなぜか。これは三女神の序列、すなわちそれぞれの神を祭る氏族間の序列を明確にするためと考えることができるのではないか。この問題は、三女神の起源を議論した後で考えることにする。

以上のように神話の解析からは、沖ノ島の神ははじめイチキシマであったと考えられる。その後「ウケイ」神話が形を整え三女神の序列が確立すると、すでに里宮としての辺津宮、その中間の仲津宮での祭祀が始まっていたので、三女神を3カ所の祭場に当てはめる考え方が生まれたと思われる。

3. 沖ノ島祭祀に到る三女神の道

3. 1 イチキシマ

なぜ沖ノ島の神がイチキシマとされていたのか。それはイチキシマが、縄文時代以来宗像海人族の祭ってきた神であるからと考えられる。本研究の第二報で見たように[3]、沖ノ島には縄文時代から豊富な遺物が発見されており、地理的な位置から見てもムナカタの海人が頻繁に渡島していた場所と考えられる。実際に沖ノ島からは、ムナカタと共通の土器が多く見られる。さらに朝鮮半島南部でもそれらの土器が発見され、ムナカタの海人が古くから沖ノ島を経由して朝鮮半島と文化交流していたことが推定される。

弥生時代に入ってもこの交流が続いていたことは、沖ノ島で発見されていた弥生時代中期の銅矛が、韓国馬山湾口の架浦洞遺跡（位置を後出図 8 に示す）で発見された埋納品の中の銅矛と同時期に埋納されたことから推定される[9]。武末純一は、同遺跡がその位置から見て航海安全のための祭祀の可能性が高いことを指摘している。同氏は、沖ノ島の銅矛もおそらく同様な祭祀の存在を示すもので、「地域的な対外交渉の沖ノ島での実態と、沖ノ島に対する地域的な信仰の存在を示す」とする。

このような祭祀が、遅くとも弥生時代にすでに始まっていたことが、沖ノ島祭祀の伏線となったと思われる。そのころから祭られてきた神は、上述のように神代紀第三の一書に「瀛津嶋姫命亦の名は市杵島姫命」と書かれたイチキシマと考えられる。

前報[2][3]で見たように、イチキシマは三女神としてではなく単独で全国 1700 社以上で祭られており、その分布は九州以外でも広島県や関西・関東・東海などの遠隔地でも顕著である。このことが古代の宗像海人族の広域活動に由来すると考えられることを実例により指摘した。ムナカタから沖ノ島経由で朝鮮



半島に繋がる古代文化交流路にも、沖ノ島の神イチキシマを祭る宗像海人族の関与があったことは疑いないであろう。

3. 2 タゴリ

1) 出雲と往来する女神

タゴリは、神話や祭神分布から出雲の神、特に大国主と同神とされる大己貴神（以下オオアナムチ、^{おおあなむちのかみ}前報までは慣用のオオナムチとした）との親和性が強い。『古事記』に、「この大国主の神、宗像の奥津宮^{おくつみや}に坐す神、多紀理毘賣^{たきりびめめと}を娶して生める子は阿遲鉏高日子根神^{あちすきたかひこねのみ}。次に妹高比賣命^{いもたかひめの}。亦の名は下光比賣命^{したてるひめの}。」（岩波文庫版[10]の訓注による）と記され、9世紀後半成立とされる『先代舊時本紀』[11]にもオオアナムチがタゴリを娶り味鉏高彦根命^{あじすきたかひこねのみこと}（阿遲鉏高日子根神と同神、以下アジスキ）と下照姫命（下光姫命と同神、以下シタテル）を生んだと記される（この両子神はいずれも『書紀』にも記されているが、母神が明記されていない）。また8世紀成立とされる『播磨国風土記』[12]にも「奥津島比売命」（表1参照）が「伊和大神」（オオアナムチと同神と考えられている）の御子を孕んだ」旨の記述があるので、古代に広く信じられていた神婚説話と思われる。

第一報で見たように、全国でタゴリを単独で祭る神社は151社で、栃木県の61社以外は少なく、北部九州には16社しかない。旧郡単位で見ると、2社が祭るのは、宗像と豊前の下毛、豊後の西国東のみである。なお以下神社の祭神は、断らない限り前2報と同じく神社本庁の『全国神社祭祀祭礼総合調査（平成七年）』[13]（以下『平成データ』）による。イチキシマを単独で祭る神社が多い遠賀郡には、全くない。

前報に述べたように、宗像市東郷の矢房神社がオオアナムチとタゴリを祭る^(注5)（写真1、以下神社の位置は図1を参照）。そのわずか200m西に、宗像市内最大の前方後円墳東郷高塚古墳^{とうごうたかつか}（全長64m）が、沖ノ島祭祀開始とほぼ同時期の4世紀第三4半期に築かれる。弥生時代中期の日本最多級の武器形青銅器を出した田熊石畑遺跡も、西500mの距離にある。その遺跡の範囲内には、もとスサノオとオオアナムチを祭る示現神社^{じげん}があった[15]（現在は南西400mに移動している）。



写真1 宗像市東郷の矢房神社

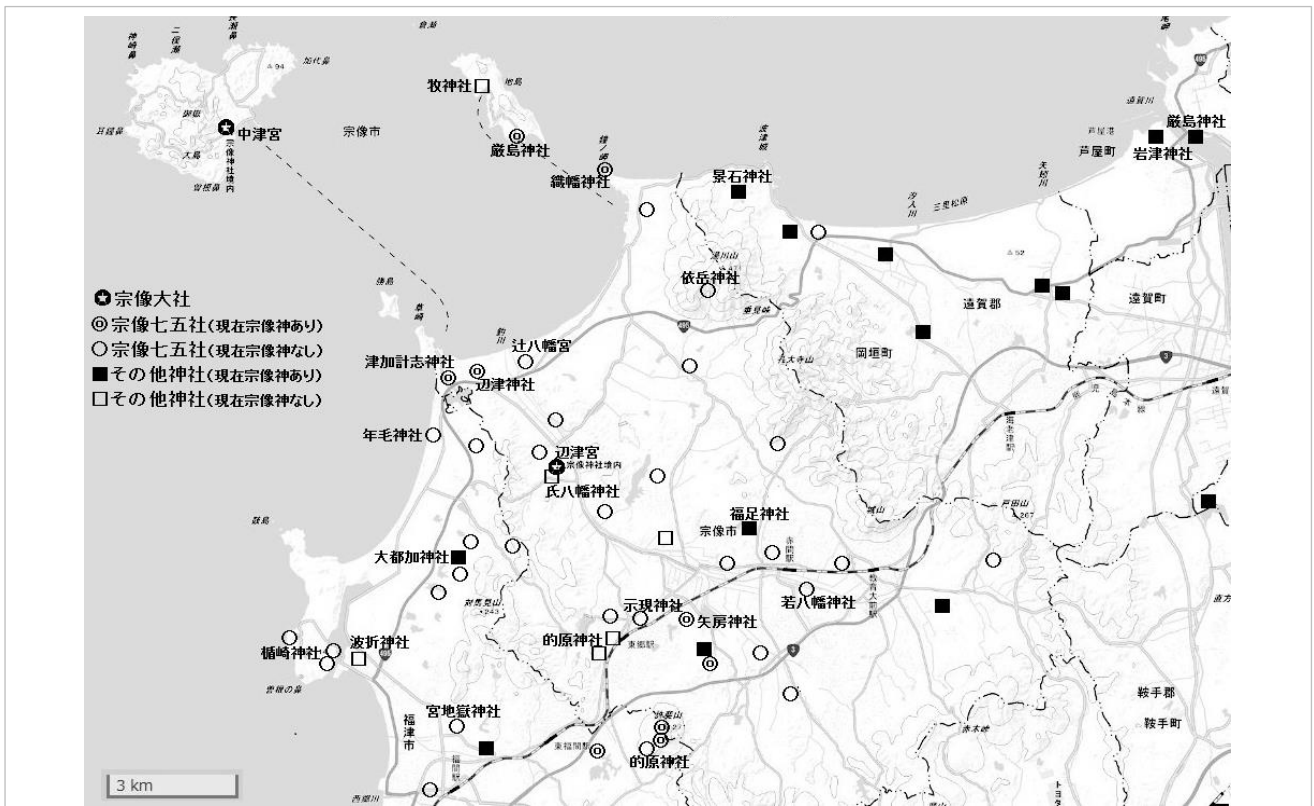


図1 本文の記述に関連するムナカタの神社の位置(国土地理院地図を利用)

* 七五社は『宗像神社史』の比定に基づき、現在独立社のみを表示



東郷と田熊の北辺を流れる釣川の支流八並川の谷には、オオアナムチとアジスキおよびシタテルの上記父子三神を祭る的原神社が3社もある（写真2）。このように現在も宗像市の中心部である八並川の谷とその釣川への合流部は、宗像での出雲勢力の橋頭堡であったと思われる。



写真2 福津市八並の的原神社

タゴリを単独で祭るムナカタのもう一つの神社は、福津市津屋崎古墳群中の^{ゆくえ}奴山生家の生家大塚古墳（5世紀後半、現状全長73m）に隣接する大都加（大塚）神社である（写真3）。この神社はその名からこの古墳の被葬者を祭った神社と思われる。祭神は上記のオオアナムチ・タゴリ・アジスキと、阿田賀田須命・宗像君阿鳥主命・宗像君徳善主命・宗像君鳥丸主命・宗像朝臣秋足主命・難波安良女命である（注6）。『新撰姓氏録』（注7）には右京の宗形朝臣と河内国の宗形君がいずれも「吾田片隅命之後也」と書かれる。一方大和国の「和仁古」の欄に阿太賀田須命が大国主六世孫と書かれるので、上記阿田賀田須命はオオアナムチ直系の子孫であることがわかる（阿田賀田須命・吾田片隅命・阿太賀田須命は同一神）。



写真3 福津市奴山生家の大都加神社

その後裔である宗形（胸肩・宗像）君を冠する大都加神社の祭神のうち、徳善は天武天皇に嫁して
たけちのみこ 高市皇子を生んだ あまこのいらつめ 尼子郎女の父として『日本書紀』に名を残す。また鳥丸と秋足はそれぞれいずれも
宗像郡大領で『続日本紀』に出る宗形朝臣鳥麻呂と『類聚国史』に出る宗形朝臣秋足であることは間違いない（詳細は『宗像市史』史料編第1巻[17]参照）。難波安良女も『類聚国史』に秋足の妻で貞節を賞された難波部安良女と対応する。これらは天平元年（729）から天長5年（828）の間に正史に名を残している人々である。

このように、古代の宗像郡を支配していた宗像君一族の人たちは、実際にオオアナムチとタゴリの血を引く人たちと考えられていたことが分かる。タゴリが「ウケイ」で生まれた三女神の筆頭となっているのは、このためであろう。

一方出雲にもタゴリが大事に祭られている。杵築神社（出雲大社）の境内摂社 かむたまのみこ 神魂御子神社は、延喜式の時代には独立社であった[2]。この摂社は現在筑紫社と呼ばれ、出雲大社の瑞垣内摂社で最も高い扱いを受けている[18]（写真4）。その祭神がタゴリである。出雲が大陸との交流・通商に当たって最も重視していた筑紫を、宗像神のタゴリで代表させていたことになる。『日本書紀』崇神紀の60年に、天皇



が出雲大神の宮の神宝を見たくて使いを遣わしたところ、出雲臣の遠祖出雲振根が筑紫に行っていて会えなかったという記事がある。出雲のトップが頻繁に筑紫（おそらくムナカタ）に赴いていたことが窺われる。



写真4 出雲大社瑞垣内の諸社 左手前がタゴリを祭る筑紫社

同社の海への玄関口に当たり、朝鮮半島に向かって日本海に突き出した日御碕にある日御碕神社にも、^{ひのみさき}境内摂社宗像神社にタゴリのみが祭られている。『式内社調査報告』ではこの神社（延喜式では御碕神社）の主祭神がアマテラスとスサノオ、配祀が三女神五男神となったのはそれほど古く遡らないようであり、^{みさきの}『出雲国風土記』に美佐伎社と書かれた神社の祭神は、もとはこの摂社の神タゴリだったのではないか。

『宗像郡誌』[16]によると、吾田片隅命はそのほかにも宗像大社ゆかりの2社に祭られていた。宗像大社背後の「宗像山」中腹の氏八幡（氏八満）社は、宗像大宮司家の祖神など大社ゆかりの神を祭る神社である。吾田片隅命はその神社帳の祭神に記され、かつての^{なかどん}中殿神社の祭神であったとする。中殿は、花田勝広の調査で、5世紀頃宗像大社附近で最初に祭祀が営まれた場所と推定されている[19]。



現在神湊の市街地の南に鎮座する古社津加計志神社も、江戸期の神社史料では阿田賀田須命を祭るとされている[4]（現在は三女神）。この神社はかつて神湊港背後の草崎半島山麓にあり、そこに辺津宮の旧社もあった。現在でもその旧社には頓宮が置かれている。

以上のように、吾田片隅命が宗像君ばかりではなく、その後の宗像大宮司家からも祖神とされ、宗像神社の祭祀の対象になってきたことが分かる。

2) 宗像君の祖先はいつ頃ムナカタに来たか

宗像君の祖と考えられる阿田賀田須命は、いつ頃ムナカタに来たのだろうか。これを推測できる説話が、『日本書紀』崇神紀にある。

崇神天皇の6年国内に災害等の凶事が多発しその理由を占ったところ、大物主が崇神の夢に出て我が子大田田根子おおたたねこに大和の三輪山で祭らせるよう言った。そこで大田田根子を探し求め、和泉の陶邑すえむらで見つけて大物主を祭らせ、さらに他の国内諸神を祭らせてようやく国内が落ち着いたとある。『先代舊事本紀』[11]によれば、大田田根子はスサノオの九世の孫（同時にオオアナムチの八世の孫）で、出雲族の本流を継いでいる。その先代となるスサノオ八世の孫は阿田賀田須命である。ところで『舊事本紀』および三輪氏に伝承されていた系図[20]によると、阿田賀田須命は大田田根子の父ではない。大田田根子の父は、阿田賀田須命の弟の健飯加田須命たけいかにたすのみこととなっている。古系譜では一般に長子が各世の「孫」になっているので、これはきわめて珍しい例である。

『日本書紀』と『舊事本紀』によれば、天皇家は神武以来安寧天皇まで三代に亘って出雲本宗家直系の孫の妹を皇妃にし、第四代の懿徳天皇いとくも出雲直系の天日方奇日方命の妹が生んでいる。物部氏が外戚として王権内で勢威を恣にする以前には、出雲氏がヤマトで強い勢力を持っていたことは間違いない。阿田賀田須命の母の名が大倭国民磯姫おおやまとのくにであるので、このときまでは出雲本宗家直系の子孫がヤマトにいたのであろう。それなのになぜ阿田賀田須命の子孫がスサノオの系譜に書かれず、甥の大田田根子が九世の孫と書かれているのか。

その理由は、阿田賀田須命が畿内から退去したためではないか。さらに想像すれば、大和王権は隠然とした勢力を持ち続けている出雲系氏族の力を削ぐために、本宗家の一族を地方へ追いやったのではないか。大田田根子の所在が分からず和泉でやっと探し出したのも、それで理解できる。これに対する出雲系の人々の不満の表面化とその解決が、この説話群の意味ではないのか。

崇神の在位時期については定説がないが、第16代の応神天皇が5世紀初めまで在位したことはほぼ確かなので、第10代の崇神は逆算して3世紀後葉から4世紀初頭に在位したと考える人が多いようであ



る。そうすると、阿田賀田須命がムナカタに来たのはその頃になる。阿田賀田須命を祭る神社は、全国で大都加神社の他には天理市の和爾坐赤阪比古神社のみであるので（赤阪比古とは阿田賀田須命のこととされる）、阿田賀田須命はヤマトからまっすぐムナカタに来た可能性が強い（注8）。ちなみに和爾坐赤阪比古神社には阿田賀田須命の他にイチキシマが祭られており、ここにもムナカタとの繋がりが窺われる。

3) 阿田賀田須命はなぜムナカタに現れたのか

ヤマトで姿を消した阿田賀田須命が、なぜ忽然とムナカタに現れたのか。それは弥生時代からのムナカタと出雲との古い縁があったためであろう。

津屋崎港の背後に、在自^{あらし}という変わった地名がある。これは平安時代中期成立の辞書『和名類聚抄』中の「国郡郷考」に、宗像郡 14 郷の一つ「荒自郷」として現れる古い地名である[21]。上記 14 郷中に「アラ」が入る名が、荒自の他にも荒木・大荒・小荒がある。これらの「アラ」は、古代韓国の阿羅加耶^{あらかや}（安耶国・阿那加耶などとも書かれる）から来ているのではないかと思われる（注9）。

阿羅は倭国とのつながりが深く、『日本書紀』にしばしば登場する「任那日本府」^{みまな}も阿羅に置かれていたと考える人が多い。従って阿羅からは古くから多くの渡来人が来日している。出雲の主神オオナムチも、大きい「アナ」の貴（むち＝貴人）の意味とされ、これを直訳したのが大国主と考えられている。「ナ」には国の意味があるからである。津屋崎港は、阿羅からの渡来人の上陸が多かった港だったのではないか。

実際に津屋崎には、オオナムチを祭る神社が多い。津屋崎地区に 20 社ある神社のうち、6 社がオオナムチを祭る。『宗像郡誌』によると、かつては 9 社が同神を祭っていた。オオナムチは第 1 報で見たように全国 6000 社以上に祭られているが、このような局所的な集中は稀である。

4) 出雲との繋がりを示す物証

多くの考古学的証拠も、古くからのムナカタと出雲の繋がりをしめす。そのひとつは、弥生時代前期後半から中期はじめにかけての日本海沿岸の遺跡から出土する土笛である。この土笛は、中国の戦国時代の書物に記述があることから中国起源の祭祀用楽器と考えられ、陶埴^{とうけん}という難しい名前が付いている。現在全国 26 の遺跡で合計 111 個見ついている。分布の中心は図 2 に示すように出雲地方で、松江市内の西川津とタテチョウの二遺跡から併せて 38 個も出土している[23]。ムナカタが出土の最西端で、宗像市の光岡長尾遺跡と福津市の香葉遺跡で完形のものが出土している。大陸との繋がりに、ムナカタに上陸しそこから東に伝播したことが明らかである。陶埴を用いた祭祀も、同時に伝わったであろう。



たくまつがうら

より古い証拠としては、宗像市の弥生早期から前期にまたがる田久松ヶ浦墳墓遺跡で見出された、独特の墓葬形式がある。ここでは墓穴の中に木棺を置いたあと、棺を覆うように石の固まりを積み上げている。原俊一らは、この「松ヶ浦タイプの石槨墓」が韓国で発見されているこの時期の石槨墓（棺の周りを石で囲った墓）とよく似ていると指摘し、朝鮮半島南部から直接もたらされたものと考えた[24]。このような「配石墓」は、山口県の響灘沿岸の武久浜、梶栗浜、吉母浜、中ノ浜と続く弥生前期の墳墓遺跡にも見られ、さらに東進して島根県の大社町（現出雲市）原山遺跡と鹿島町（現松江市）堀部第1遺跡に現れる。特に後者では、調査された31基の墓が全てこのタイプで、遠賀川系土器が供献され、上記の陶埴も出土している[25]。

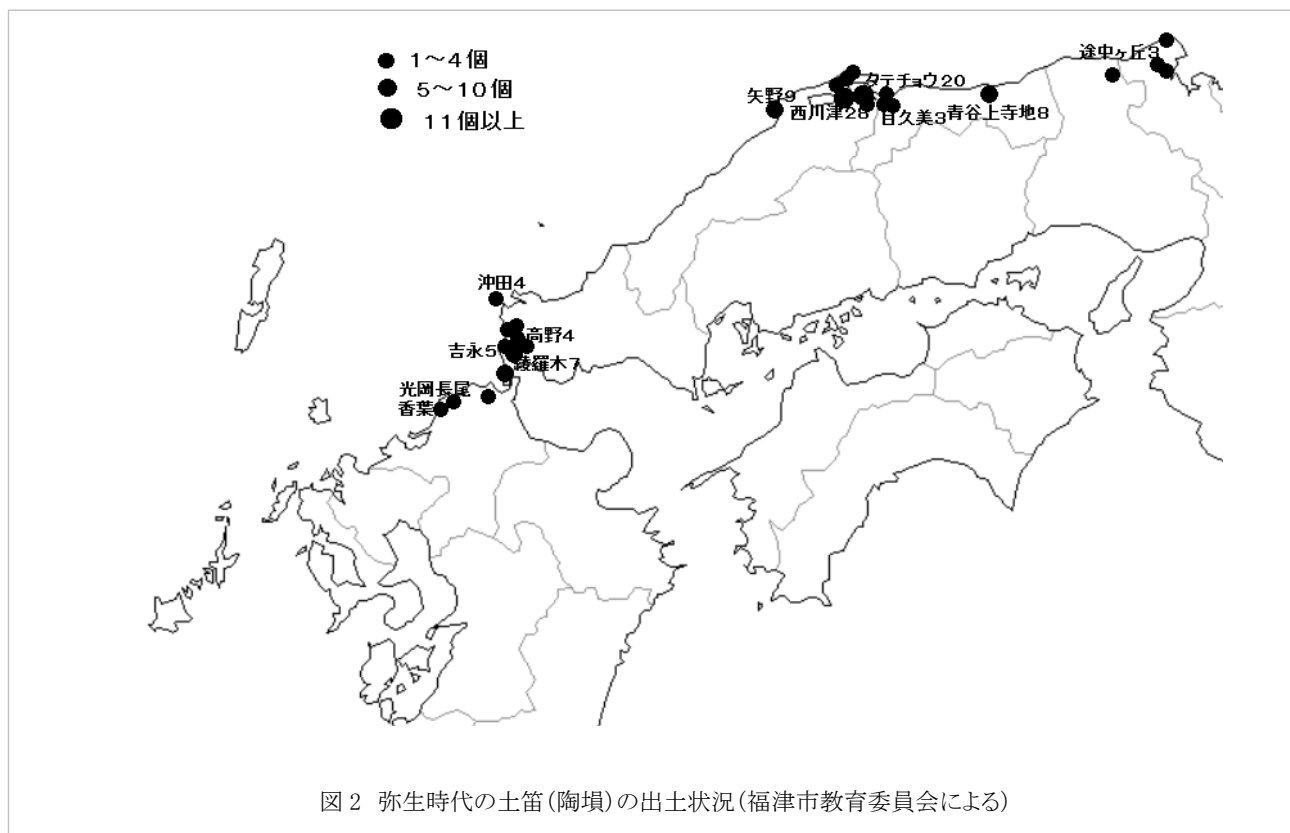


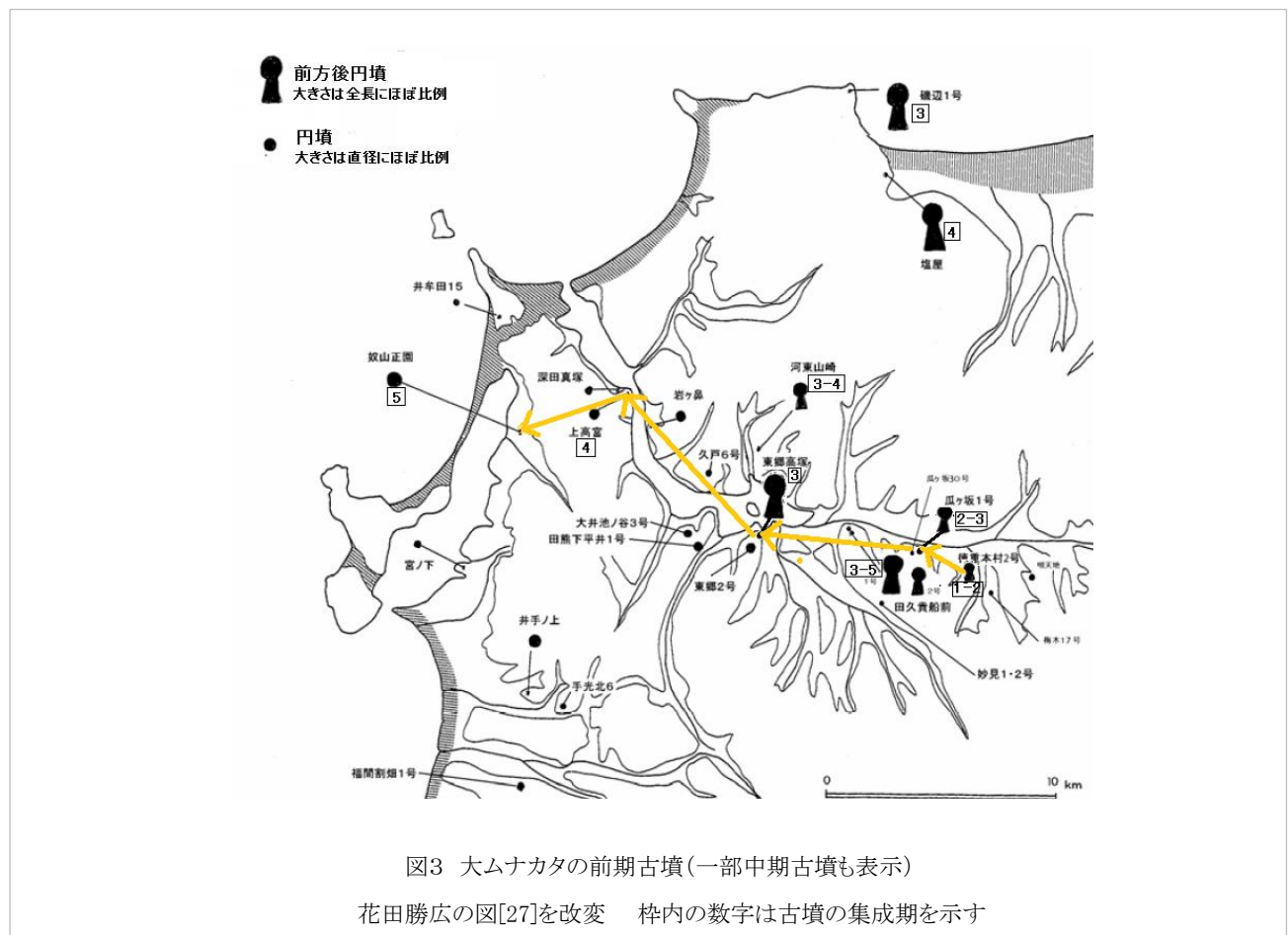
図2 弥生時代の土笛（陶埴）の出土状況（福津市教育委員会による）

この遺跡では朝鮮半島の松菊里系土器も見付かっていて、朝鮮半島からの渡来間もない人々が入植していたらしい。福津市の今川遺跡や田久松ヶ浦遺跡は、弥生時代早期から前期に朝鮮半島の松菊里文化の影響を直接受けた文物が出土するので、渡来人が他地域を経由することなくこれら遺跡に到達していたと考えられている（注9）。そのような渡来人の一部が、ムナカタに定住することなく出雲に向かったことが示唆される。ムナカタは、朝鮮半島からの渡来人の一時的寄留地としての役割を果たしていたらしい。その後の移動には前報で見た縄文時代以来のムナカタ海人族の広域活動で蓄積された情報が、大いに活用されていたであろう。



出土物などから見て、ムナカタを經由した渡来人の最大の最終入植地が出雲であったことはほぼ間違いないであろう。その出雲開発のリーダーは『出雲国風土記』に「天の下所造らしし大穴持命」^{あま つく おおあなもちのみこと} [26] と書かれたオオアナムチであった。強力なリーダーを持つ出雲族は、渡来人材のリクルートや、半島との交易のために出先機関をムナカタに置いていたと思われる。そこにかんりの実力者を置いていたことは、武器形青銅器 15 本を出した弥生時代前半の田熊石畑遺跡から分かる。このような遺物は、ムナカタのような狭い後背地しか持たない地域首長の持てるものではなく、交易拠点とその背景となる大勢力の存在を想定して始めて理解できる。田熊石畑遺跡出土の玉類は、東日本を含むかなり広い範囲の石材で作られており、広域流通システムの存在が推定されるという (研究報告[15]中の大賀克彦の論文)。

このような山陰地方との繋がりは、古墳時代に入っても続いていた。図3に示すように、古墳時代前期に鈎川に沿い下流に向かって前方後円墳が次々に築かれる (この図で集成期とは、古墳の年代を大まかに示した数で、3 世紀後葉から 4 世紀の前期古墳が 1-4 期、5 世紀の中期古墳が 5-8 期に当たる)。4 世紀半ばの田久瓜ヶ坂 1 号墳 (全長 31m) の壺棺に用いられた二重口縁壺が山陰系で、その他前出の東郷高塚古墳出土の破片も含め宗像出土の二重口縁壺はすべて山陰系の特徴を有するという [28]。





東郷高塚からさらに釣川を下った宗像大社背後の通称宗像山山頂に上高宮古墳（4世紀後葉、円墳 23m）が築かれるが、これは現在の辺津宮祭祀との繋がりが推測される（注10）。前述の氏八幡神社はこの山の東麓にあり、この古墳の主を祭る神社であったと思われる。ここから「名児山越え」古道を抜けたところに、津屋崎古墳群の先駆けとなる奴山正園古墳（5世紀初頭、円墳 28m）が築かれる[29]。この2古墳に共通するのは、いずれの主体も大ムナカタに多い石棺墓であり、鏡や鉄製の武器・農耕具など、古墳の規模に似合わぬ大量の豪華な副葬品を伴っていることである。両古墳から多量の玉類が出土したが、なかでも勾玉が前者で20個、後者で15個も出ている。詳しく調査されている後者では、瑪瑙製4個、翡翠製・硬玉製2箇など多様な石材を用い精巧に作られているものが多く、当時の産地として出雲以外は考えられない[30]。

この頃から新羅の古墳で大量の日本製の玉類が出土するが[22]、一方上記2古墳ばかりではなく畿内などの古墳で大量の鉄製品が出土するようになる。宗像大社周辺が沖ノ島祭祀で開かれた交易ルートの中継地として機能していたことを示すと思われる。それを司っていたのが出雲系の人々であり、宗像ではオオアナムチと共にタゴリを祭っていたらしい。

3. 3 タギツ

タギツを単独で祭る神社はタゴリよりさらに少なく、全国で69社に過ぎない[2]。うち新潟県が11社と目立ち、石川県の6社が続く。北部九州4県には4社しかなく、福岡県では小倉北区に1社あるだけでムナカタには全くない。

ところが前報[3]で見たように、三女神のタギツの代わりに瀬織津姫（他の表記もあるので、以下セオリツとする）が入っている神社が、中津市の古社くらなしはま瀬織津比咩神社など4社ある。

セオリツは、記紀神話に出ないため一般にはポピュラーな神ではない。しかし神道の最も基本的な祝詞のりとの一つである「大祓詞」では、皇祖神に続いて登場するきわめて重要な神である（注11）。

大祓詞は、あらゆる罪を祓え流し人々に和解をもたらす趣旨で、いかにも日本的な祈りの言葉である。セオリツは、罪を祓え流す神々の最初に、「たかやま ひき すえ高山・低山の末より、はやかわさくなだりに落ちたぎつ速川の瀬にま座す瀬織つひめ（原文は瀬織津比咩）という神」（武田祐吉の訓読[31]による）と出る。

上の大祓詞の文言にあるように、セオリツは滝と関係が深いと思われる女神である。実際にセオリツは、滝または急流のある場所に祭られていることが多い（注12）。



一方タギツにも、水が逆巻き流れるイメージがある。実際に「滝（瀧）津姫」という名の神を祭る神社が 35 社あるが、そのうち 27 社では三女神のうちのタギツの位置に入っている。タギツの別表記として間違いないと思われるので、前報[2]ではこれらをタギツの表記の一つとしている。群馬県高崎市の瀧宮神社、石川県穴水町の瀧津神社、島根県平田市の垂水神社などの例では、明らかにタギツが滝に祭られた神であったことを示す。このようにタギツとセオリツはきわめてイメージの近い神々である。

県ごとに見ると、タギツとセオリツは互いに排他的でほとんど混在しない。上記の新潟・石川県に挟まれながらタギツを単独で祭る神社が 1 社もない富山県に、セオリツを祭る神社が 11 社もある。滝を名に持つ社を見ても、新潟県では六社がタギツを祭神とするが、セオリツを祭る社はない。逆に、岩手県の 4 社、福島県の 3 社、兵庫県 of 2 社はセオリツを祭るが、これらの県ではタギツのみを祭る社がない。

以上のことから、タギツとセオリツが本来同神であり、いずれか一方が名を変えたのではないかという推測を生む。大祓詞は記紀より成立が古いと思われるので^(注11)、記紀の最終編纂までの間にセオリツがタギツに変わった（あるいは変えられた）と考えることができる。

1) タギツは大祓詞から生まれたか

上に示した大祓詞のくだり、瀬織津比咩を修飾する、さく^{はやかわ}なだり、落ち、たぎつ、速川、瀬の各語句が、セオリツを祭る神社の名前になっていることがしばしばある。上に述べた滝（瀧）にちなむ 24 社のほか、たとえば、新潟県新津市の佐久^{さくなどの}那殿神社、滋賀県大津市の佐久^{さくなど}奈度神社、鳥取市の桜^{さくらだに}谷神社、長崎県西海市（旧西海町）の佐久^{さくなし}奈止神社（以上さく^{はやかわ}なだりから）、香川県まんのう町（旧琴南町）の落合神社、先に述べた京都市北区の岩戸^{おちがわ}落葉神社（式内の墮川神社との説がある）と大森東町の大森賀茂神社（式内の墮川御上神社に比定される）、石川県氷見市の速^{はやかわ}川神社、鳥取市青谷町の利^{はやかわ}川神社、高知県越智町の深瀬神社、福岡県添田町の瀬成神社などである。

これらと同様に、先に述べた滝にちなむ神社、石川県穴水町の滝津神社（祭神滝津姫）や福井県永平寺町（旧上志比村）の多伎津神社（祭神多伎津姫）の社名も、同様に大祓詞から採られたと考えられる。そしてこれらの神社の祭る神の名は、その社名に因んだものと思われる。

このようなことから、大祓詞で瀬織津比咩を修飾する「たぎつ」から、湍津姫の名が出てきたのではないかと考えられる。すなわち、タギツを祭神とする滝（瀧）に因む名を持つ神社は、何らかの事情でもとの神名（おそらくセオリツ）が変えられたとき、大祓詞の「瀬織津比咩」の直前の語「たぎつ」を取って神名をタギツ（タキツ）としたのではないか。その仮定が正しければ、変更の時期は、大祓詞創始の 669 年以降で、日本書紀の編纂が終わった 720 年までの期間ということになるであろう。「ウケイ神話」も、最終的にはその期間内に形を整えたことになる。



なぜそのような神名変更が行われたのか、その背景に何があったのかについては後述する。

4. 沖ノ島の神の変遷

4. 1 中世文書に見る宗像神配置

宗像神社には、平安時代に始まり江戸時代に到る膨大な量の古文書が残されており、重要文化財となっている。その一つ鎌倉時代末期成立とされる『宗像大菩薩御縁起』[32]は、大部分が中世的な縁起談であるが、一方で当時の宗像神社の伝承や状況をかなり詳しく記録しているため貴重である。

ここには、現行社説と同じく、タゴリが息御島（沖ノ島）に、タギツが大嶋に、イチキシマが田嶋に鎮座している旨が始めて記されている。しかし一方、田嶋の惣社には

第二者 湍津姫 居左間 本地釈迦如来

第一者 田心姫 居中間 本地大日如来

第三者 市杵嶋姫 居右間 本地薬師如来

と祭られていて（小神を省略）、田心姫がここでも主神となっている。そして中殿は左間大日如来・中間釈迦如来・右間薬師如来、地主は左間大日如来・中間薬師如来・右間釈迦如来とローテーションされている。一方でこの三宮は「第一大神宮・第二大神宮・第三大神宮」とも書かれているので、それぞれ現在の辺津宮の本殿・第二宮・第三宮に相当していることが分かる。田嶋の神についてのこの食い違いが、その後の諸史料の混乱の基になっている。

『正平二三年 宗像宮年中行事』では（正平二三年は1368年）、田嶋宮の三神の配置は簡略化されて

一 第一大神宮 田心姫一所

一 第二大神宮 湍津姫一所

一 第三大神宮 市杵嶋姫一所

と書かれている[33]。

そして息御島と中御島の神が、それぞれ第一大神宮本社と第二大神宮本社と記される。すなわち沖ノ島の神は辺津宮の本殿の神（田心姫）と同一なのである。辺津宮での祭祀開始は沖ノ島祭祀よりも新しい



ことははっきりしているので^(注13)、辺津宮は沖ノ島の「里宮」であったと考えられる。そうであれば辺津宮が沖ノ島と同一神を祭るのは当然と思われる。

いずれの史料においても、田嶋の第一大神宮（惣社）における三神の配置は、現在の辺津宮における配置とは異なっている。

4. 2 近世以降の宗像神配置説の変遷

江戸時代初め神道思想の普及に伴い多くの史料が編纂されたが、この中で宗像神について注目すべき解説がある。一つは、徳川（水戸）光圀の命で編纂された『神道集成』（脱稿 1670 年）[34]で、その冒頭の「神代歴代系図（日本紀）」の三女神の項で、田心姫命に「筑前国宗像郡胸肩神社」、湍津姫命に「豊前国宇佐郡宇佐宮」、市杵嶋姫命に「安芸国佐伯郡伊都伎嶋神社」とそれぞれ付記されていることである。宗像神社の代表神がタゴリと考えられていたことが確認できる（問題はタギツと宇佐宮であるが、次報で検討の予定である）。これと同様の記述が、坂内直頼の『本朝諸社一覧』（1645）や白井宗因の『神社啓蒙』と『神社便覧』（1664-1674 成立）にも現れる[35]。

福岡藩の儒者による三風土記は、いずれも辺津宮（田嶋神社）ではタゴリを第一神とし、タギツを第二神、イチキシマを第三神とする。しかし沖津宮に関しては、中世文書の混乱を引き継いでいる。

『筑前国続風土記』[36]は、奥の島の神を田島の神職はイチキシマとするが、奥津島の社職がタゴリを第一とすると紹介している。『筑前国続風土記付録』[37]は、社家の祭るところとして、前者の説を正としている。『筑前国続風土記拾遺』[38]は、この件に触れていない。

遠賀郡芦屋町に、イチキシマのみを祭る岩津神社がある。『遠賀郡誌』[39]によると、この神社は寛保二年(1742)の芦屋町の大火をきっかけにその救済を宗像の沖津神社に立願したところ、豊漁が続き願を達したので報賽のため創建したという。この時点でも、沖ノ島の神は依然としてイチキシマと考えられていたことが分かる。そしてこの神社は、正確に沖ノ島の方向を向いて祈るように建てられている。

宗像神社が明治3年(1870)政府に提出した明細帳には、辺津宮の祭神が『宗像大菩薩御縁起』の惣社と同じ配置で記されていた（ただし大菩薩名は除かれ神名のみを記す）[4]。その後神祇関係者に『古事記』の信奉者が多かったためか、『古事記』の祭神配置と神名に影響されることが多く、混乱を来してきた（詳細は『宗像神社史』参照）。

昭和32年に至ってやっと現行の『日本書紀』に基づく神名に復帰したが、辺津宮本殿の祭神は中世以降の第一宮（惣社）と異なりイチキシマとなっている。『宗像神社史』は、これは中世の第一宮が現在の



本殿とは異なり、沖津宮・中津宮・辺津宮の「惣社」であったからとしているが、それでは現在の第二宮（タゴリ）と第三宮（タギツ）の主神が中世の伝承と異なることは、説明できない。

以上のような祭神の混乱は、『日本書紀』神代紀第六段本文の三女神の序列を、同段第二の一書や『古事記』の記述に「釣られ」て、祭神と三宮との対応と読んだことに原因があると思われる。それはすでに『宗像大菩薩御縁起』に始まっていた。

5. 祭祀の方向から見える沖ノ島の神

5. 1 古絵図に見る中世の社殿配置

田島の辺津宮は弘治三年(1557)の大火で第一宮が消失し、その後延宝三年(1617)の福岡藩による境内摂末社整備で第二宮・第三宮とその他小社が移動させられたので、中世までの社殿は全く残っていない。しかし二・三の古絵図が残っているために、中世までの社殿配置の概況を推定することができる。図4は、その一つ宗像大社神宝館に保存展示されている「宗像千貫寫田島社頭古絵図」[4]により、仏教関係施設を省略し神社社殿のみを概略トレースして示したものである。

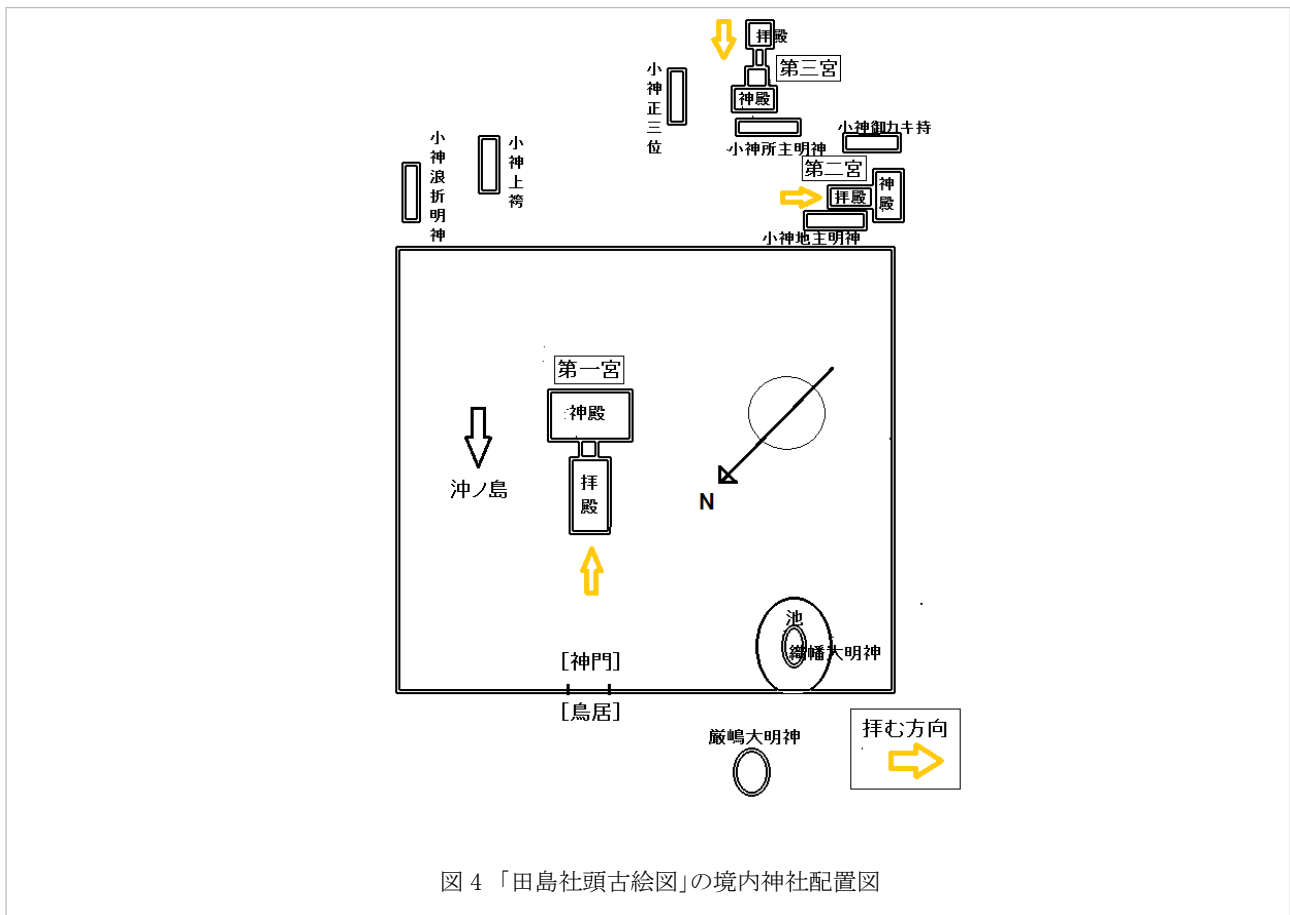


図4 「田島社頭古絵図」の境内神社配置図



この図を見ると、第一宮の位置と向きは現在と変わらないが、第二宮と第三宮は全く異なる方向を向いていることが分かる。これはそれぞれの宮で、異なる対象を拝んでいるためと考えられる。この中でイチキシマを祭る第三宮は、まさに沖ノ島の方向を向いて祈る配置となっており、イチキシマが本来の沖ノ島の神というこれまでの検討結果を裏付けている。それでは他の二宮はなぜこのような向きに建てられていたのだろうか。

5. 2 中世の第一宮と第二宮が祈る対象

図 5 に宗像大社周辺の地図に前図の中世の三宮は位置を重ねて示す。この範囲内では、第二宮と第三宮の祈る方向に特別に崇拝の対象となるものが見当たらない。上高宮古墳は、いずれとも方向が合致しない。そこでより遠くの対象を図 6 で探った。



図 5 古絵図の田島三宮の祈る方向にある近傍の神社・古墳

図 3 の 3 宮配置を google 地図上に転写



図6 古絵図の田島三宮の祈る方向にあるムナカタの神社・古墳
国土地理院地図を利用

第一宮の祈る方向に最も合致するのは、タゴリとオオアナムチを祭る矢房神社である。出雲系の遺跡として紹介した東郷高塚古墳や田熊石畑遺跡、光岡長尾遺跡などもほぼこの方向にある。矢房神社は、東郷高塚古墳を向いて祈る配置となっているので、その被葬者を祭る神社ではないかと考えられる。前述のように、この古墳の被葬者は出雲系の胸肩君の首長のいずれかであった可能性がある。時期的には胸肩君の祖吾田片隅命（阿田賀田須命）の可能性が強い。出雲系のタゴリを主神としていた旧第一宮で、出雲系の胸肩君の祖の墓を向いて祈るのは十分考えられることである。上高宮古墳のある「宗像山」からは、東郷の辺りを望むことができる。かつては東郷高塚古墳も見えたはずである。

ただし第一宮が沖ノ島の方角をも重視したことは、山野善郎が指摘するように[40]、本殿が背面中央に扉を開く特異な構造になっていたことでも分かる。これは現在の本殿にも踏襲され、賽銭箱も置いてあった（平成の大造営後は撤去されている）。大社の神職も、本殿背面から中津宮を通して沖津宮まで三宮



宗像三女神と沖ノ島祭祀の始まり（上）
—宗像神信仰の研究（3）—

を一度に拝むことができると説明していた。これが田島での祭祀の、本来のあり方であろう。田島は東郷から沖ノ島へ向かう直線上にあるので、あるいは田島での祭祀がこの「信仰線」上で始められたとも考えることができる。

一方旧第二宮からの祈りの方向には、まず前述の大都加神社と、生家大塚古墳がある。しかしこれら出雲系の胸肩君の一族が残したと思われる古墳と神社と、タギツとの間に接点が見えてこない。なお新原奴山古墳群の中核部はこの線からやや外れるので、可能性はさらに薄いであろう。

さらに延長すると、津屋崎の波折神社（写真5）に到達する。この主祭神はセオリツであり、セオリツがタギツの元の名とすると、タギツの方向を示すことになる。津屋崎方面は田島からは望めないが、田島の西方の名見山などに昇れば見通すことができる。



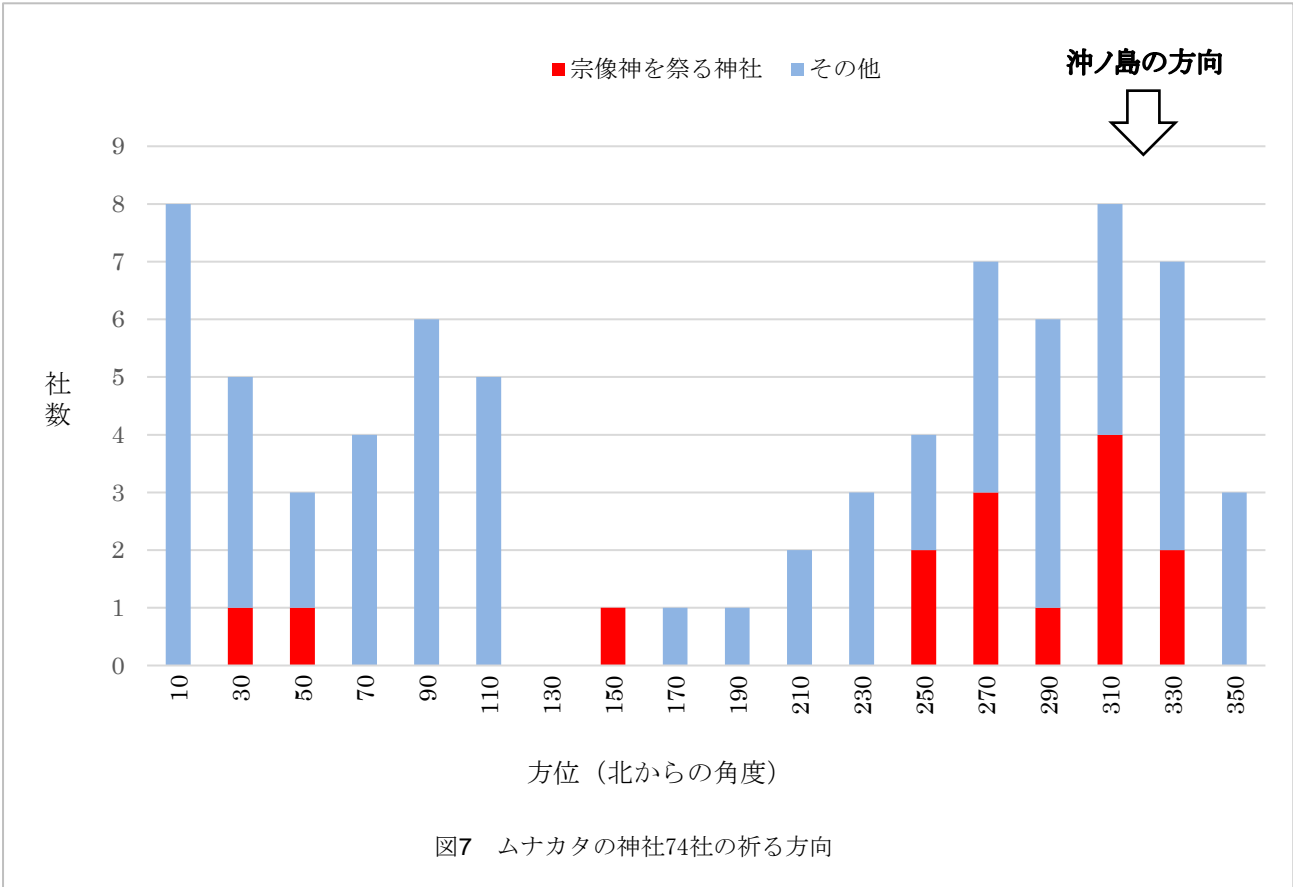
写真5 福津市津屋崎の波折神社

5. 3 宗像の神社の祈りの方向

ムナカタ全体では祈りの方向はどうだろうか。図7にムナカタの主な神社74社の方位の調査結果を示す。社殿が改築等で向きが多少ずれることなどを考慮し、20度刻みで分布を示した。記録や現場の物証



などで本殿の方向が明らかに過去より大きく変化していると思われる神社については、かつての祈りの方向を示唆する物証がない限り除外した。



明らかに、北から西にかけての方向、すなわち海に向かって祈る神社が多く、過半数の39社である。中でも、ほぼ沖ノ島の方向（辺津宮で約320度）に当たる310度から330度の間に15社が集中している。全国的には古社に夏至・冬至の日の出・日の入りの方向を向いて祈る神社が多く[41]、後には中国思想の影響で東西南北を向く神社が多い中で、このような分布は異例と言えよう。

宗像市地島の巖島神社はほぼ正確に沖ノ島を向いて祈る（以下神社の位置は図1参照）。この神社は現在同島の泊にあり三女神を祭るが、『正平二三年 宗像宮年中行事』[33]に「市杵島姫社 白浜」とあり、かつて同島の中央部白浜にあってイチキシマを祭る神社であったらしい。地島では、白浜の牧神社、西岸の海に面して立つ石祠の竜宮社など、殆どがほぼ正確に沖ノ島を向いて祈る。地島が沖ノ島への最終出発地であった歴史が長いことを示していると思われる。



航海の難所鐘崎の織幡神社の現社殿の祈る方向は沖ノ島の方向よりやや北に振るが、同社宮司は旧参道がかつてほぼ正確に沖ノ島の方向を向いていたという。この神社は中世以来宗像神社の摂社の筆頭とされ、宗像5社の筆頭であった。延喜式にも宗像神社と共に大社として名を連ねている。現在は武内宿弥など宗像神以外の祭神が多いが、歴史的・地理的に見て本来沖ノ島信仰の社であったと思われる。

かつて草崎半島中腹にあったと伝える旧津加計志宮も、現在神湊港を見下ろす高台にある大社の頓宮がこれに向かい合って作られたと考え、沖ノ島を向いて祭っていた可能性が強い。この神社は、江戸の三風土記がいずれも祭神をイチキシマとしている（現在は三女神）。この神社の祭神と祈る向きからも、沖ノ島の神が本来イチキシマであったことが示唆される。

また前述のオオアナムチ・タゴリなど宗像君の祖と諸首長らを祭る大都加（大塚）神社も、ほぼ沖ノ島を向いて祭る。宗像君が沖ノ島祭祀に関わっていたことを示す傍証の一つと言える。

内陸部では、須恵の三女神を祭る古社福足神社はほぼ沖ノ島を向くが、この神社は『筑前国続風土記付録』『筑前国続風土記拾遺』のいずれもイチキシマを祭るとし、イチキシマを祭る岡垣町波津の景石神社との繋がりが述べられている。湯川山から響灘に突き出た尾根上にある景石神社は、沖ノ島を望む絶好点であるが現在の社殿はその方角を向いていない。

宗像神を祭らない神社でも、勝浦の年毛神社や田久の若八幡神社など沖ノ島の方角を向いて祈る神社がある。この二社はいずれも宗像七五社^{（注14）}のうちであり、かつては沖ノ島の神を祭っていたと思われる。

6. 総合考察

6. 1 イチキシマ信仰とタゴリ信仰

神代紀第六段で本文より古い伝承を残す第一と第三の一書は沖ノ島の神をイチキシマとしており、ムナカタの古社の祭神と祈る方向から沖ノ島の神をイチキシマとする信仰が根強く残ることと対応している。

前報で考察したように、縄文時代からムナカタの海人は危険を冒して沖ノ島へ、さらに対馬経由で朝鮮半島に渡っていたと考えられる。縄文時代後期のムナカタの三つの貝塚から厚葬の女性人骨が見つかっていて、海岸で航海の安全を祈る巫女と推定される。イチキシマはそのうちで神格化されたものと考えられ、渡海の重要な寄港地である沖ノ島でも祭祀の対象となっていたと考えられる。沖ノ島で発見された弥生時代前半の銅剣は、いわゆる「沖ノ島祭祀」以前から祭祀が行われていたことを示唆する。

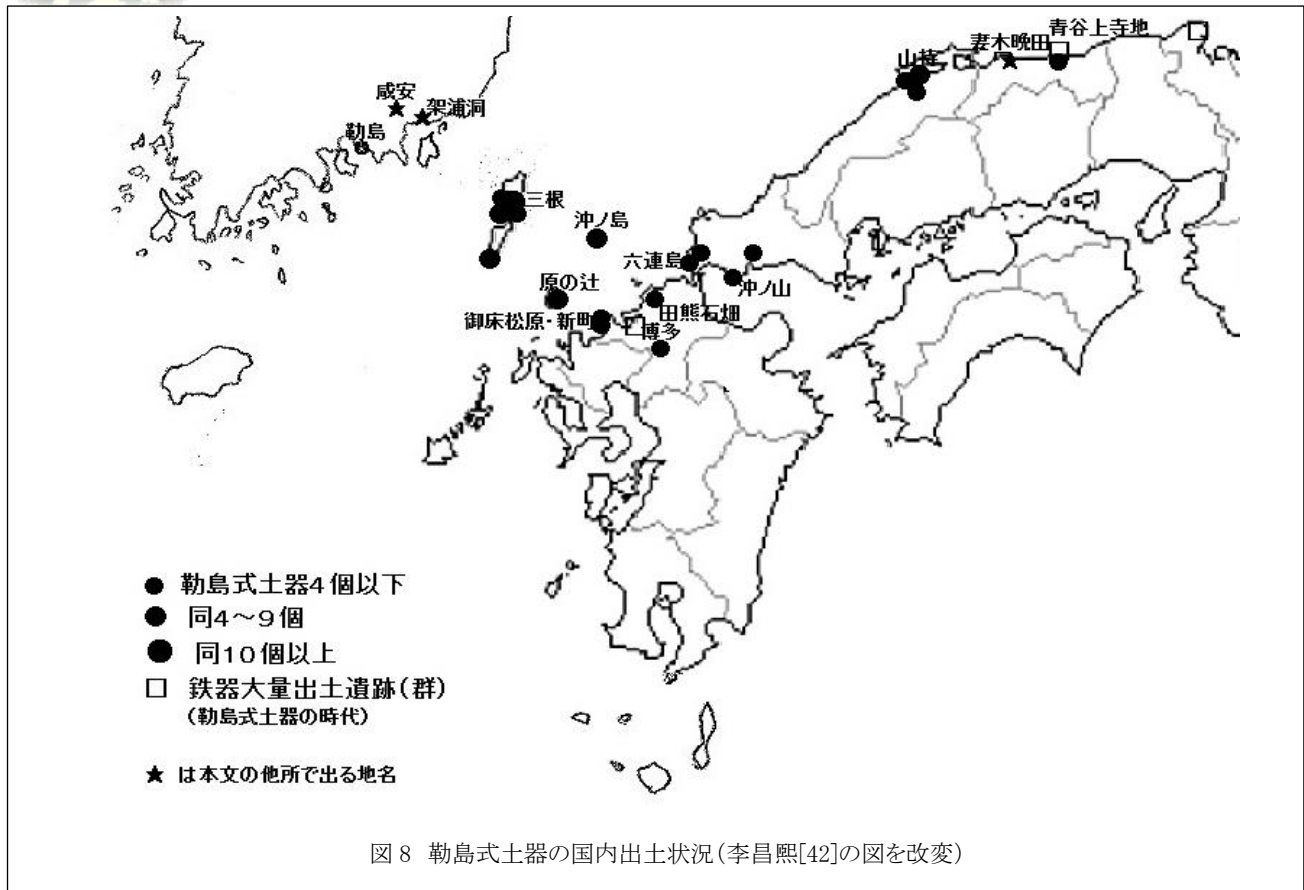


弥生時代のムナカタには朝鮮半島から直輸入された多種の文物や葬制などが見られ、その東方への伝播にムナカタ海人族が大きな役割を果たしていたと考えられる。

それらをもたらした渡来人の有力者が、ムナカタから東進して開いたのが出雲を中心とする日本海沿岸文化であった。『出雲国風土記』が描く出雲の国づくりのリーダーのオオアナムチはムナカタの古社に多く祭神として祭られているが、タゴリはその后神とされムナカタにおける出雲勢力を象徴する神であったと見られる。

弥生時代中期以降、朝鮮半島南部で鉄の生産が急増し、日本にも流入が始まる。その中継基地は、韓国南西部海岸にある周囲数^{ろくとう}の島の小島^{ろくとう}（ヌクト）であった（以下図8参照）。その島で使われていた土器が、沖ノ島から数個出土し、ムナカタでも田熊石畑遺跡で出土している[9]。島式土器は、交易の寄港地であった対馬、壱岐、糸島半島西部に多く出土するが、「奴国」があった博多湾沿岸には殆ど入らず、ムナカタ以東では山口県から鳥取県までの日本海沿岸に数多く出土する[42]。このことから、朝鮮半島からの渡来人が出雲勢力の範囲内に多く定着したことが分かる。そしてその渡来ルートには、前報のムナカタルート1と2がいずれも使用されていたことが分かる。そしてこの頃の弥生土器が、島をはじめそれ以東の朝鮮半島沿海部の多くの遺跡で出土するので、これらルートは日本列島からの渡韓にも多く利用されていたことが分かる。

神話でオオアナムチとタゴリの子とされるアジスキは、鉄器にゆかりのある神のようである（注14）。この神が田熊石畑遺跡の面する八並川の谷にオオアナムチおよび妹神のシタテルと共に三カ所で祭られていることは、同遺跡で島式土器が出ていることとの繋がりを思わせる。アジスキは島式土器が多く出た出雲の諸遺跡の近くの式内社^{あずき}阿須伎神社の主祭神であり、タゴリーアジスキ信仰がこのころムナカタと出雲とで共有されたと考えられることができよう（注15）。



6. 2 タゴリ信仰と沖ノ島

勒島の繁栄は弥生時代後期に入ると衰退し、交易の中心基地は老岐の原の辻遺跡に取って代わられた。これを久住猛雄は「原の辻＝三雲貿易」と呼ぶ[44]。

これは糸島市の三雲や春日市の須玖で「王墓」が造られ、奴国が金印を受領した時代である。朝鮮半島にも三韓南部諸国が成立し、鉄生産と流通を掌握したと見られる。これ以降鉄製品の流入と鉄器生産が福岡平野に集中し、全国から鉄を求めて人が集まるようになる。

しかし一方で、山陰への鉄の流入は止まなかった。青谷上寺地の繁栄は続いていたし、その手前大山山麓むきばんだの妻木晩田遺跡(図8参照)には、鉄器がふんだんに流入していた。この遺跡では福岡平野のような高度な鉄器加工は行われておらず、鉄素材と鉄器は朝鮮半島から直接輸入されていたと見られている。鉄器の流入はさらに東進し、丹後半島のいくつかの遺跡で多量に発見されるようになる。

これらの弥生時代後期の山陰地方の鉄器出土状況は、「原の辻＝三雲貿易」を管理する筑前西部の首長に干渉されない貿易ルートが存在していたことを示す。それは沖ノ島ルート1にほかならない。



前報で指摘したように、このルートでは、特に半島から列島への方向の渡海では、ムナカタを經由せず沖ノ島から直接山口県西岸に到達するバリエーションが可能で、この時期の山陰への鉄器の輸入にはそのルートが使われたのではないか。弥生時代後期にムナカタでそれほど顕著な遺跡が発見されていないことも、その推測を支持する^(注16)。弥生終末期になると、「原の辻＝三雲貿易」は「博多湾岸貿易」に移行し、鉄器などの博多湾岸への集中はさらに進む[44]。一方で沖ノ島―出雲ルートの重要度はさらに増したと考えられる。

ムナカタ本土を經由しないこのルートでの航海には、必ずしもムナカタの海人の協力を必要としない。宗像出身であっても、沖ノ島―出雲ルートに特化した海人が参加していたのではないか。そのような海人は、沖ノ島の神としてタゴリをも祭るようになったのではないか。

6. 3 沖ノ島誓約によるパラダイムシフト

勢力を強めてきていたヤマト王権を中心とする畿内や瀬戸内地方では、弥生時代終末期まで依然として鉄の欠乏状態が続いていた。山陰地方や丹後地方から分水嶺を越えての流入が想定されるが（第1報参照）、需要を十分賄える量ではなかったと思われる。

この頃、瀬戸内海は交易路としては殆ど機能していなかったという[46]。これは諸勢力が盤踞しているこの多島海では、物資の安全な運搬が難しかったためであろう。ところが続く古墳時代前期のうちには、大量の鉄器が畿内に流入し、古墳にも多量に副葬されるようになる[47]。これは瀬戸内海交易路が開発されたためと考えなければ説明できない。一方大口の顧客を失った博多湾貿易は、古墳時代前期後半には衰退する。その効果は絶大であった。

このようなパラダイムシフトが起きるには、なにか大きな政治イベントがあったはずである。それは、ヤマト王権をはじめ、安定した貿易ルートを渴望していた東方諸豪族の参加・協力による、貿易路確立の誓約のための会盟であったのではないか。十分な鉄を持っていなかった当時のヤマト王権は、単独で瀬戸内ルートを確立できるほどの武力を持ち合わせていたとは思われない。しかし前述の崇神天皇の三輪山祭祀開始の説話にあるように、祭祀権という強力なリーダーシップを持っていた（三輪山祭祀は、沖ノ島とほぼ同時期に始まっている[49]）。

その誓約のための祭りが、最初の沖ノ島祭祀であったのではないか。

「ウケイ神話」は、それを象徴的に示したものと思われる。「ウケイ」は、誓約という字で表現されている。まさに多くの関係者が集まって誓約を行ったことを示している。



その会盟の目的は、沖ノ島経由で山陰勢力が直接輸入していた鉄を、沖ノ島から瀬戸内海経由で畿内方面に安全に運ぶことにあると考えられる。従って焦点の沖ノ島が祭祀場所選ばれるのは、当然のことである。ただしそれには、特権を奪われる出雲を中心とする山陰勢力の承諾または屈服が必要である。しかも山陰勢力は朝鮮半島の産鉄地に権益を保有していたと思われるし（注 17）、また出雲は鉄の最重要な対価であったと思われる玉類の最大の生産地でもあるので（注 18）、会盟への出雲勢力の積極的な参加が必要であった。

ここで起用されたのが、出雲本宗家の嫡孫阿田賀田須命（吾田片隅命）だったのではないか。この人物はヤマトで生まれたと考えられ、実際にヤマトの古社で祭られているが、その子孫は本宗家系図から外れ、甥の大田田根子が本宗家を継いで三輪山の祭主となっている。一方阿田賀田須命は忽然とムナカタに現れ、宗像大社ゆかりの複数社で祖神として祭られている。これらの記録や伝承が示唆するのは、ヤマト王権（ここでは崇神天皇）が阿田賀田須命をムナカタに派遣し、沖ノ島貿易の管理と沖ノ島祭祀の継承を任せただけではないか、ということである。このような管理業務や祭祀儀礼は、宗像海人族には手に余る仕事であった。ヤマト王権にとっては、ヤマトで目の上のこぶであった出雲族の首領を放逐できるので、一石二鳥であった。もちろんこれができるのは、ムナカタと出雲との古くからの深い繋がりがあってのことである。こうして、宗像海人族を管理する胸肩君が誕生した。

このような構造は、神代紀第六段本文でタゴリがイチキシマの上に置かれたことにも現れている。

6. 3 タギツの起源と役割

タギツは単独で祭られることが少なく、特にムナカタでは全く祭られていない。しかし前述のようにセオリツがその名を変えた神と仮定すると、ムナカタ内で少なくとも4社に祭られていた（現在は1社）。

セオリツは、近江朝で始まったと思われる国家祭祀で唱えられた大祓詞が示すように、朝廷にとっての重要神である。農業民間の争いに関する罪を水に流す神とされるので、王権を支える氏族間での多くの争いを経験してきた大和朝廷はこの神を大祓詞の中心に据えたのであろう。

この神の名を、ウケイ神話でタギツに変えたのはなぜか。これにはまず二つの理由が考えられる。一つは、セオリツが「ソウルの姫」を意味するということである。金沢庄三郎が説いたように[50]、セオリは古代韓国語ソホリの転語で、現在の韓国のソウルと同語源の、「主な邑」^{むら}すなわち都という意味である（もちろんこれは半島における一般的な呼称であり、現在の大韓民国の首都ソウルを意味するものではない）。ソホリ（ソフル・ソウル）に因むと思われる地名は、北部九州に多く残っている。筑前第一の高峰背振山^{せふりさん}もこの言葉に由来すると言われており、福岡市早良区^{さわら}（旧筑前国早良郡）も同語源である。



ソウルは、古くはソ・プルと言ったという。プルは村の意味で、長崎県ではかつての村を触と言った。今でもそれは壱岐や松浦半島などに残っている。ソは、大きいという意味があったらしく、そのためみやこがソ・ウル（プル）となったという。ソにはまた金・鉄の意味もあったらしく、鉄の国ということで新羅を意味することにもなったという。「つ」は天つ風というように、現在の「の」に当たる古語である。

『日本書紀』は、日本のアイデンティティーを確立し、国内はもとより中国や朝鮮半島の国々に宣言するための史書であった。その史書に「ソウルのヒメ」という名の神が多く出てきては、特に朝鮮半島の国々に対して日本の主体性を示せない。史書だけで抹消しても、実際に見聞する諸地方に多く祭られていては、名実が相伴わないと思われる。このため王権の力の強い地域では、『日本書紀』の編纂と同時に神名が変えられたのではないか。ただしタギツとなったのはごく一部で、他は別名の神となっているようである（次報で詳細に検討）。セオリツが岩手県や各地の山間部などに多く祭られているのは、このような改名の網から洩れたためであろう。

第二の理由としては、三女神が地祇（くにつかみ）となっていることが考えられる。ウケイ神話では三女神はスサノオに渡されて海の神となっている。他の海神も、地祇である。スサノオをはじめ出雲神は、全て地祇に分類される。宗像氏の祖阿田賀田須命も同様である。セオリツはもともと天神と考えられるので、そのままでは三女神の中には入れられなかったのであろう。

タギツの素性については次報で考察予定であるが、いずれにせよヤマト王権関連の重要神であることに疑いはない。表1の五男神の中にも天皇家の祖神オシホミミが加わっている。全体の祭主がアマテラスと観念されていることと共に、三女神の中のヤマト王権側の「お目付役」としてタギツを加えたものと考えられることができる。

7. 終わりに

宗像沖ノ島の神信仰の歴史的変遷とその背景を、記紀神話・歴史史料・祭神解析・考古学的知見などから総合的に検討した。

『日本書紀』の誓約神話^{うけい}で最も古いと思われる伝承では、沖ノ島の神は市杵島姫となっている。大和朝廷の公式見解と思われる誓約の段本文は三女神を田心姫（タゴリ）・湍津姫（タギツ）・市杵島姫（イチキシマ）と現社説の順で挙げるが、それぞれの鎮座地は記さない。中世の『宗像大菩薩御縁起』になると、三女神を現社説と同様に三宮に対応させる説が登場する。これは比較的成立が新しいと考えられる『日本書紀』中の伝承に現社説と異なる三女神の三宮配置が記されていることと、本文の三女神の



序列とを結びつけたためと見られる。しかし一方では同書を含む中世史料は田島の第一宮と沖ノ島の祭神が同一と記す。この食い違いが近世以降の史料で混乱を招いている。

イチキシマを祭っていた中世の田島の第三宮は、正確に沖ノ島の方角を向いて祈る。沖ノ島の方向を向いて祈る神社はムナカタに多く、歴史的にイチキシマのみを祭って来た神社では特にその傾向が強い。ムナカタの地元民にイチキシマ信仰が古くから根付いていることを思わせる。

これに対しタゴリを祭る旧第一宮は、現在と同じく沖ノ島と反対の方向を向いて祈る。その方向には、タゴリとともに出雲の主神大己貴（オオナムチ、大国主と同神）を祭る矢房神社がある。両神には神婚伝説が伝えられ、オオナムチと共に両神の間の子神を祭る神社群も、その面する谷の延長上にある。矢房神社は沖ノ島祭祀開始の時期に築かれた宗像市域最大の前方向後円墳東郷高塚古墳を向いて祈るが、同古墳を含む市域の前期前方後円墳からは山陰系の祭祀土器が出土していて、出雲系の首長が祭られていたと見られる。

また津屋崎古墳群中心部の大都加神社の祭神には、上記両神と共に宗像氏の祖吾田片隅命（阿田賀田須命）と宗像氏代々の首長が祭られている。吾田片隅命はムナカタで少なくとも他の宗像大社ゆかりの2社にも祭られていた。同神はオオナムチ直系の子孫であるが、崇神天皇の時代にヤマトを去ってムナカタに現れたようである。それには特別なミッションが存在したと思われる。

そのミッションとは、鉄器輸入と沖ノ島祭祀に関わるものと見られる。弥生時代後期から古墳時代初めにかけて鉄器は朝鮮半島から壱岐を經由し博多湾地方に大量に流入し高度な鉄鍛冶も発達したが、山陰地方にも別ルートで豊富に供給されていた。このルートは沖ノ島を經由していたと見られる。一方この頃畿内には殆ど鉄器が入らなかった。これは瀬戸内交易路が機能していなかったためと見られる。

そこで沖ノ島ルートの鉄を瀬戸内交易路に導入するため、ヤマト王権のリーダーシップで関連諸氏族が、焦点となっている沖ノ島で会盟して祭祀を行ったのが、沖ノ島祭祀の始まりと考えられる。そのことを象徴的に語っているのが、誓約神話^{うけい}と考えることができる。吾田片隅命とその一族は、弥生時代始めからのムナカタと出雲との深い繋がり^{うけい}の土台の上に、宗像海人族を組織管理して交易を主導し、同時に誓いの祭祀を継続する役割を担ったものと考えられる。鉄の対価となる出雲の玉の調達^{うけい}の役割も担っていた。

この誓約の効果はきわめて大きかった。ヤマト王権は大いに勢威を拡大し、一方で博多勢力は衰退に向かった。統一日本国へのパラダイムシフトが起こったのである。



うけい
誓約で誕生した三女神のうち、宗像氏の祭るタゴリと宗像海人族が祭るイチキシマについてはかなり
明らかになったが、タギツとムナカタとの直接の接点を発見できない。瀬織津姫（セオリツ）^{せおりつ}という神が
三女神のうちのタギツに置き変わっている例がしばしば見られ、しかも両神の分布が相補的であるので、
タギツがセオリツに名を変えたと仮定することができる。近江朝の頃創られたと考えられる「大祓詞」に
重要神として出るセオリツは、大和王権を代表する神として三女神に加えられたと思われる。その
セオリツがタギツと名を変えたのは、セオリツが朝鮮半島起源の名であるためと考えられる。中世の宗
像神社のタギツを祭る第二宮は、セオリツを主神とする津屋崎の波折神社を向いて祈る。

三女神と沖の島祭祀の始まりについては、タギツについてより突っ込んだ考察が必要であるが、それには本報で触れていない「邪馬台国問題」の解明が必要なため長文にならざるを得ない。従ってタギツについてのこれ以上の検討は、別論文として次報に公表予定である。三女神と沖の島祭祀の始まりについてのより進んだ考察は、その後に本論文の（下）として公表したい。

注

（注1）前段である『書紀』神代紀第五段本文では、伊奘諾尊（以下イザナギとする）^{いざなぎのみこと}と伊奘冉尊（以下イザナミ）^{いざなみのみこと}が夫婦になって日本の国土を次々に産んだあと、「次にこの国や自然の王者^{きみたるもの}をうまなければ」と言って大日靈貴（以下オオヒルメ）^{おおひるめのむち}という名の日神^{ひのかみ}を産んだ。これが一書では天照大神^{あるふみ}というと記されている（オオヒルメは、一般に「太陽神を祭る、位の高い巫女」と解釈されている）。この子が非常に美しいので地上においておくべきではないといって天上^{あめ}に挙げられたとある。そのあと月の神、蛭子、素戔鳴尊（以下スサノオ）^{すさのおのみこと}を産む。このスサノオが、元気がよく乱暴で、しかも泣いてばかりいる。それで人が死んだり、山の木が枯れたりする。それで両親の神は根の国に行けといって追い払った。

この後に第六段の「ウケイ」神話が続く。その本文によると、スサノオは「高天原^{たかまがはら}に上って姉のアマテラスに会ってから根の国に行きたい」と言って許された。乱暴な男なので、上がってゆくと海は騒ぎ、山は鳴った。アマテラスは驚いて、国を奪いに来るのではないかと疑った。そこで完全武装をして待ち構え、スサノオをなじった。

スサノオは、「お姉さんと会わなければ遠くに行けないと思ってはるばるやってきたのです。悪い心はありません。」^{うけい}と言った。「どうやってそれを証明できますか。」というアマテラスの問いに、スサノオは「お姉さんと一緒に誓約（以ウケイ）をしましょう。そのとき私に男の子が生まれたら潔白^{とつかのつるぎ}と考えてください。」と言った。そこでアマテラスは、スサノオの十握劍^{あまのまない}を取って三つに折り、天真名井^{たごつ}ですすい^{いつきしま}でから噛み砕き、吹きすてた。その息吹き^{たごり}の霧の中に生まれたのが、田心姫（以下タゴリ）、湍津姫（以下タギツ）、市杵嶋姫（以下イチキシマ）の三柱の女神である（本書では原則として『書紀』の読みは岩波文庫版[8]のものを採用するが、タゴリとイチキシマについては宗像大社の呼び方を採用する）。

今度はスサノオが、アマテラスが腕^{みすまる}と髪^{いぶ}に着けていた御統（勾玉や管玉を紐で貫いて輪にしたもの）を貫いて、すすい^{みすまる}でから噛み砕き、吹き捨てた。その息吹き^{いぶ}の霧の中に生まれたのが、オシホミミ以下五柱の男の神様である（第三の一書では六男神）。



〔注2〕『宗像神社史』は、この点に認識の混乱があるように思われる。順序と鎮座地とを併せて記した第二の一書および『古事記』と同一視したものであろう。

〔注3〕『古事記』の多紀理毘賣は、この田霧を書き換えたものではないか。これは少なくとも「ウケイ」神話に関しては『古事記』が後発の史料であるとの疑いを強くさせる。

〔注4〕岩波文庫の『書紀』では天照大神に『古事記』の天照大御神と同様に「アマテラスオオミカミ」と訓を付けているが、これは後年の皇室の祖神化の影響を受けている写本を採用しているためと思われる。アマテラスオオカミとの訓を附した写本も多い。

〔注5〕現在はアマテラスを第一にオオアナムチ、タコリの順となっているが、宝暦一〇年（1760）の置き札によると、アマテラスの名はなく田心姫命・大己貴命の順となっている [14]。三女神筆頭のタコリがここ古代宗像族の原点と思われる東郷—田熊地区の中心にある神社の主神となっているのは、重要な事実と考えられる。

〔注6〕『宗像郡誌』[16]は、この神社の祭神を江戸期の史料も含め考察して不詳としている。それが『平成データ』になって上記祭神が明記されたいきさつについては、さらに詳細な調査が必要である。

〔注7〕弘仁六年（815）に、嵯峨天皇の命により編纂された古代氏族名鑑。1182 氏姓が記録されている。京と五畿内居住者に限られているが、宗像氏など地方の主要氏族も多く顔を出している。

〔注8〕ムナカタ以外では、愛知県春日井市に阿太賀田須命を祭る社が 2 社と吾田片隅命を主祭神とする 1 社がある。前者は和邇の名のある祭神を併せ祭るので、これら 3 社はヤマトで和邇（和仁）氏が成立した後下向した祖先を祭ったものであろう。和邇氏は、一方では和邇部として「天足彦国押人命三世孫彦国葺命之後也」などとして皇別氏族に名を連ねる名族である。これと阿太賀田須命を祭る和邇氏との関係は、不明である。

〔注9〕阿羅加耶は、古代韓国西南部にあった加耶諸国のひとつである。邪馬台国の時代『魏志』東夷伝に弁辰安邪と書かれた国をもとに現在の咸安（ハマン）市付近にできた国で、3 世紀から 6 世紀まで存続した。加耶諸国の盟主は、はじめ金海市付近にあった金官加耶（魏志倭人伝にある狗邪韓国をもととする）であったが、同国が弱体化したあと阿羅が取って代わり、4 世紀初めには高句麗の広開土王と戦うほどの力を持っていた[22]。なお咸安の位置は後出の図 8 中に示す。前出の架浦洞は咸安から馬山湾を経て出港した途中にあり、沖ノ島からは直線上にある。

〔注10〕宗像大社とその周辺の遺跡については、花田勝広の論文[19]に詳しい。

〔注11〕セオリツは、記紀神話に出てこないため一般にはあまりポピュラーではない。しかし神道の最も基本的な祝詞の一つである「大 祓 詞」に、きわめて重要な神として出てくる。あらゆる罪を祓え流す神々の最初に、「高山・低山の末より、さくなだりに落ちたぎつ速川の瀬に座す瀬織つひめ（原文は瀬織津比咩）」という神（武田祐吉の訓読[31]による）と紹介されている。大祓詞は現在でも多くの神社で定期的に読み上げられるため、神道関係者はセオリツの名をよく知っている。

滋賀県大津市の佐久奈度神社（延喜式内比定社）の由緒によると、「天智天皇御宇八年（669）勅願により中臣朝臣金連が当地において祓を創始、祓戸大神四柱を奉祀した」ということになっている。『日本書紀』にも、天智九年に「山御井（大津市の三井寺の泉とされる）の傍に、諸神の座を敷きて、幣帛を班つ。中臣金連、祝詞を宣る。」とある。大祓詞がこのころの創始であることは、大体認められているようである。



『平成データ』には、セオリツを祭る神社が全国で 308 社収録されている（瀬織津の他瀬折津 1 社と瀬下津 2 社を含む）。

（注¹²）滝（瀧）に因む名を持つ神社は全国に 279 社が数えられる。これらの神社に祭られている女神で最も多いのは、セオリツの 27 社である。しかもうち 21 社には他の水神など滝に関係ありそうな他神の名がない。滝のイメージがきわめて強い神であることがわかる。

次ぎに多いのはタゴリの 24 社であるが、タコリを祭る滝系神社は 19 社が栃木県に集中し、前報[2]で見たようにそのほとんどの社名が滝尾（瀧尾）神社である。次いで 23 社がタギツを祭神とし、うち 13 社が宗像神のなかでタギツのみを祭神としている。

（注¹³）花田勝広によると[19]、祭祀開始は中殿山（現在の高宮祭場から東に延びる小尾根）で、5 世紀頃と推定される。連続した祭祀は、下高宮周辺で 7 世紀後半から 8 世紀に行われている。これは「露天祭祀」と推定されるので、『宗像大菩薩御縁起』に記される天応元年（781）三所の神を始めて屋内の一所に祭ったという説話[32]とほぼ対応する。

（注¹⁴）神代紀第九段第一の一書に「味鉏高彦根神、光儀華艶しくして、二丘二谷の間に映る。」とあり、さらに歌謡がある。『古事記』にも類似の記事がある。これは雷の擬人化という説が有力で、『古事記』に「今、迦毛大御神と謂うぞ」とある（京都の上賀茂神社の神は鴨別雷神神）。高温の鉄鍛冶を山中で行っている様子を言ったという説もあり、事実第 1 報で見たように鉄器の普及と関係が深い。

（注¹⁵）『出雲国風土記』は同名の神社が他に 39 社もあったと記す。同書にはアジスキの説話が五カ所も出てきて、オオアナムチとスサノオに次ぐ重要な出雲神であったことが分かる[43]。

（注¹⁶）弥生時代後期に見られるムナカタの衰退は、寒冷化による海退で船運が宗像市中心部で利用できなくなったためと考えられる。田熊石畑遺跡では船着き場の存在が推定されている[14]。福沢仁之らは、鳥取県東郷池湖底堆積物の解析により、過去 10,000 年の海面変動を推定している[45]。そのデータと北部九州の主な遺跡・古墳との対比は、別途報告予定である。

（注¹⁷）山陰系の搬入土器が、釜山市の東萊貝塚から発見されているという[44]。

（注¹⁸）朝鮮半島が三国時代（4 世紀以降）に入ると、半島にこれまでなかった硬玉（ヒスイ）製勾玉が突如出現する[22]。新羅古墳に副葬された日本列島産硬玉は列島出土品をも超える 5000 点以上と推定されるという[48]。

この玉を抑えていたのが、出雲族である。弥生時代後期後半になると、それまで日本海沿岸一帯に広がっていた玉作りが、出雲に集約されてくる。これは主に、出雲の玉造の花仙山で良質の瑪瑙と碧玉（花仙石）の資源が発見されたことによる。この頃北陸の玉生産が下火になるので、鉄器で硬玉（ヒスイ）を加工していた工人が出雲に移ってきたと考えられている。



参考文献

- [1] 産経新聞平成 29 年(2017) 5 月 7 日号、同 25 日号.
- [2] 矢田 浩, 『宗像神を祭る神社の全国分布とその解析 —宗像神信仰の研究（1）—』, むなかた電子博物館紀要, 7 号, pp.202-237, 2016.
http://www.d-munahaku.com/culture/kiyou/files/2015/09_kiyo2015.pdf
- [3] 矢田 浩, 『北部九州の宗像神と関連神を祭る神社の解析 —宗像神信仰の研究（2）—』, むなかた電子博物館紀要, 8 号-No.2, 2017（予定）.
- [4] 宗像神社復興期成会, 『宗像神社史上』, 1961 および『宗像神社史（下）』, 1966.
- [5] 正木喜三郎, 『宗像の歴史と伝承』, 岩田書院, 2004.
- [6] 亀井輝一郎, 『福岡教育大学紀要』第 20 号第 22 分冊. 2010.
- [7] 亀井輝一郎, 『[宗像・沖ノ島と関連遺産群]研究報告 I』, ④-1, 2011.
- [8] 坂本太郎他校注, 『日本書紀（一）～（五）』, 岩波文庫, 1994-2005.
- [9] 武末純一, 『「宗像沖ノ島と関連遺産群」研究報告 I』①-1, 2011.
- [10] 倉野憲司校注, 『古事記』, 岩波書店, 1963.
- [11] 鎌田純一, 『先代舊時本紀の研究 校本の部』, 吉川弘文館, 2013.
- [12] 秋本吉郎校注, 『日本古典文学大系 2 風土記』, 岩波書店, 1958.
- [13] 神社本庁, 『全国神社祭祀祭礼総合調査（平成七年）』, 1995.
- [14] 宗像市史編纂委員会, 『宗像市史』史料編第 1 巻, p.820, 1995.
- [15] 宗像市教育委員会, 『国史跡田熊石畑遺跡』, 2014.
- [16] 伊東尾四郎, 『宗像郡誌 上編』, 秀巧社, 1944.
- [17] 宗像市史編纂委員会, 『宗像市史』史料編第 3 巻, p.240, 1995.
- [18] 吉井良隆, 『式内社調査報告』第 20 巻, 皇學館大學出版部, 1983.
- [19] 花田勝広, 『中世の宗像神社と鎮国寺』, むなかた電子博物館紀要, 第 4 号, pp.53-108, 2012.
http://www.d-munahaku.com/culture/kiyou/files/kiyou_120401/053-108.pdf
- [20] 鈴木正信, 『日本古代氏族の基礎的研究』, 東京堂出版, 2012.
- [21] 日本歴史大系第 41 巻『福岡県の地名』, 平凡社, p.86, 2004.
- [22] 朴 天秀, 『加耶と倭』, 講談社, 2007.
- [23] 前島已基, 『古代出雲を歩く』, 山陰中央新報社, 1997.
- [24] 原 俊一他, 『日本考古学』第 9 号, 2000.
- [25] 鹿島町教育委員会, 『堀部第 1 遺跡』, 2005.
- [26] 萩原千鶴, 『出雲国風土記 全訳注』, 講談社学術文庫, 1999.



- [27] 花田勝広, 『沖ノ島祭祀と九州諸勢力の対外交渉』, 第15回九州前方後円墳研究会北九州大会発表要旨・資料集, 2012.
- [28] 宗像市教育委員会, 『田久瓜ヶ坂』, 1999.
- [29] 福津市教育委員会, 『奴山正園古墳』, 2013.
- [30] 津屋崎教育委員会, 『奴山5号古墳』, 1978.
- [31] 倉野憲司・武田祐吉, 『日本古典文学大系 I 古事記 祝詞』, 岩波書店, 1958.
- [32] 神道大系編纂会, 『神道大系 神社編 49 宗像』, 神道大系編纂会, pp. 6-23, 1979.
- [33] 伊東尾四郎, 『宗像郡誌 中巻』, 臨川書店, 1925.
- [34] 神道大系編纂会, 『神道大系首編一 神道集成』, 神道大系編纂会, p. 19, 1981.
- [35] 神道大系編纂会, 『神道大系 総記(中)』, 神道大系編纂会, p. 328, 1988.
- [36] 貝原益軒(伊東尾四郎校訂), 『筑前国続風土記』, 文献出版, 1987.
- [37] 加藤一純他, 『筑前国続風土記付録 中巻』, 文献出版, 1977.
- [38] 青柳種信(広渡正利他校訂), 『筑前国続風土記拾遺(中)』, 文献出版, 1993.
- [39] 遠賀郡教育会, 『遠賀郡誌』, 臨川書店, 1986 復刻.
- [40] 山野善郎, 『[宗像・沖ノ島と関連遺産群]研究報告Ⅱ-1』, ⑦-1, 2012.
- [41] たとえば, 大和岩雄, 『神社と古代王権祭祀』, 白水社, 1989.
- [42] 李昌熙, 『弥生時代の考古学2 弥生文化誕生』, pp. 204-224, 同文社, 2009.
- [43] 萩原千鶴, 『出雲国風土記 全訳注』, 講談社学芸文庫, 1999.
- [44] 久住猛雄, 『考古学研究』, 第53巻, 第4号, p. 20-36, 2007.
- [45] 福沢仁之他, 『名古屋大学加速度質量分析計業績報告書』9巻, p. 5-17, 1998.
- [46] 福永伸哉, 『弥生・古墳時代における太平洋ルートの文物交流と地域間関係の研究』(平成18-21年科研費研究報告書), pp. 55-70, 2010.
- [47] 大阪府立近つ飛鳥博物館, 『平成22年度特別展 鉄とヤマト王権』, 2010.
- [48] 朴天秀, 『古墳時代の考古学9 21世紀の古墳時代像』, 同成社, pp. 107-127, 2014.
- [49] 笹生 衛, 岡田莊司編『日本神道史』, pp. 58-91, 吉川弘文館, 2010.
- [50] 金沢庄三朗, 『日韓古地名の研究』, 草風館, 1985.